

## 巻頭言

岡山県立和気閑谷高等学校

校長 香山 真一

令和元年度、本校は、文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の指定を全国 20 校の一つとして受けました。本事業は、平成 30 年 3 月に告示された高等学校学習指導要領を踏まえ、Society5.0 の社会を地域から支える人材の育成に向けた教育改革を推進するため、高等学校が自治体、高等教育機関、産業界等との協働によりコンソーシアムを構築し、地域課題の解決等の探究的な学びを実現する取組を推進することによって、地域振興の核としての高等学校の機能強化を図るというねらいを持っています。

本校は、このいわゆる「地域協働推進校」として、全国のモデルとなる実践をめざしてチャレンジしてきました。振り返れば、この 1 年間の主な成果は次のとおりです。

1 つは、本事業のために立ち上げた「魅力化推進協議会（コンソーシアム）」を持続可能な組織として地域に根付かせるために、「学校運営協議会（コミュニティ・スクール）」にバージョンアップさせることでした。これは、県立高校初として制度化され、令和元年 12 月 23 日に第 1 回の会を開催し、充実した協議を行うことができました。委員は 15 名で、備前・赤磐市長、和気町長、各市町の教育長、備前東・赤磐・和気商工会長、備前商工会議所会頭などの意思決定権を有する方々で構成されています。

2 つめは、本コミュニティ・スクールは本校の学校経営計画や予算の協議、組織や人事の具申などに当事者として包括的に学校経営に関わっていくものですが、それを実務的に支える組織が不可欠であることから、下部組織として、小中高接続部会、産学官連携部会、高大接続部会を設けることにしました。これらのワーキング・グループが実務的なレベルで、様々な具体的な改革案、魅力化策をまとめ、コミュニティ・スクールで協議、承認することとし、充実した提言をまとめつつあります。

3 つめは、本コミュニティ・スクールの教育効果を最大限発揮できる魅力的な教育課程の開発です。このたび文部科学省から指定を受けるに当たり、本校の事業プランに高い評価をしていただきました。その要因として特筆すべきは、新学習指導要領を踏まえた豊かな授業実践を、各教科がスクラムを組んで取り組み、その実践報告を教師一人ひとりが本校のホームページにアップしていることです。平成 30 年度から始めたこの取組は、令和になっても受け継がれています。それに加えて、新たに開発しつつある学校設定教科・科目「地域協働探究」は、ドイツのデュアル・システムを参考にし、授業の一環として、自分のキャリアを開発するために事業所や官公庁などでインターンやシャドウイングなどの体験をしながら課題を探究するという時間です。

このような挑戦的な取組を推進するには、本校教職員とカリキュラム開発等専門家、地

域協働学習実施支援員らが“One Team”として志を一つにしなければなりません。このたび、令和元年度文部科学省優秀教職員表彰において、教職員組織としてチーム名「岡山県立和気閑谷高等学校教職員一同」を表彰していただいたことは本事業の最高の船出となりました。今後は、生徒たちも含めて“One Team”として大海で帆を掲げてまいりたいと存じます。引き続き、関係の皆様方の御支援・御協力をたまわりますようお願い申し上げます。

# 目 次

○	巻頭言	
○	目次	
I	概要	
1	研究開発の概要	1
2	実施体制の概要	3
3	研究開発概念図	7
4	ロジックモデル	8
II	詳細	
1	【組織の取組】	
	(1) 魅力化推進協議会（コンソーシアム）／ 学校運営協議会（コミュニティ・スクール）	9
	(2) 小中高接続部会	14
	(3) 産学官連携部会	20
	(4) 高大接続部会	22
2	【教科・科目】	
	(1) パフォーマンス課題と長期ループリック	26
	(2) デュアルシステムカリキュラム	33
3	【閑谷學】	
	(1) 概要・テーマ一覧	39
	(2) 1年次閑谷學	41
	(3) 2年次閑谷學	49
	(4) 3年次閑谷學	54
	(5) 発表会（卒業探究発表会、探究学習発表会）	59
4	【課外活動】	
	(1) 生徒会活動（行動憲章、ボランティア、だっぴ等）	64
	(2) 放課後学習支援	67
	(3) イングリッシュキャンプ	68
	(4) 英語出前講座	69
	(5) こくさいフォーラム in Wake	70
	(6) 多様な主体による協働会議	72
	(7) 姉妹校交流	74
	(8) 全国募集に係る取組	76
III	評価	
1	7つのチカラアンケート結果	79
IV	関係資料	
1	新聞記事	81
2	3年次卒業探求論文	84
3	運営指導委員会会議録	93





# I 概要

## 1 研究開発の概要

### 2019年度 地域との協働による高等学校教育改革推進事業 研究開発の概要

指定期間	ふりがな	おかやまけんりつわけしずたにこうとうがっこう				②所在都道府県	岡山県
2019～2021	①学校名	岡山県立和気閑谷高等学校					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	設置学科：普通科、キャリア探求科 生徒数：345名	
	普通科	80	73	77	230	(普通科 230名、キャリア探求科 115名)	
キャリア探求科	40	37	38	115			
⑥研究開発構想名	「恕」の精神を持って地域と協働する探究人の包括的育成						
⑦研究開発の概要	本構想は、本校が規定する「地域と協働する探究人」育成を目的とし、卒業までに身につけさせたい資質・能力「7つのチカラ」の向上を目標とする。そのために、(ア)各教科・科目における地域協働カリキュラム、(イ)地域協働デュアルシステムカリキュラム、(ウ)総合的な探究の時間における地域協働カリキュラム、(エ)各教科・科目等と連動する課外活動、(オ)(ア)～(エ)を支援する体制の構築の5点について研究開発する。						
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	<p>(1) 目的・目標</p> <p>本構想の目的は、「地域と協働する探究人」を包括的に育成することである。「地域と協働する探究人」とは、自己の在り方・生き方を探求し自己成長と地域貢献を融合した人生をデザインし、SDGsを意識しつつ、身の周りや地域課題を主体的に探究し、地域に貢献できる人物である。この目的のため、各教科・科目、総合的な探究の時間、課外活動の3領域を通して、「7つのチカラ」（自分を理解する力、職業とつなぐ力、考える力、行動する力、コミュニケーション力、チームワーク力、自立する力）の育成を目標とする。将来にわたり探究心を持ち、身の周りや地域の課題の解決策を提案する等、地域に貢献する人材を持続的に送り出すことが期待できる。</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p>(ア) 各教科・科目における地域との協働によるカリキュラム</p> <p>生徒の学習意欲を引き出し、主体的な学びの実現を目指したパフォーマンス課題とルーブリック評価を実践し、単元の記録を学校ホームページにアップしている。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【仮説】各教科の単元と「7つのチカラ」をつなげた長期ルーブリックで身につけるべき資質・能力の到達点とその評価規準を生徒と教師が共有し、教科横断的なパフォーマンス課題の設定、地元の特長的な教育資源の活用、地元企業と連携した実習や本物に触れる体験を取り入れた単元開発により主体的な学習者を育成することができる。</p> </div> <p>(イ) 地域との協働によるデュアルシステムカリキュラム</p> <p>普通科文Ⅱ系とキャリア探求科総合系の間で、学科の枠を越え相互に科目選択できるようにし、就職・公務員志望者を対象とした2年次の夏期3日間のインターンシップでは、町役場と和気商工会の協力のもと和気町内を中心に就業体験先を確保している。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【仮説】2年次の夏・冬・春に各5日間の就業体験実習を行い、3年次に学校設定教科「地域協働探究」を設定するデュアルシステムカリキュラムの開発により、求められる力への理解や職業意識を深め、7つのチカラを向上させる意欲を引き出し、進路目標を自覚し、将来の職業を自らの意志と責任で選択する生徒を育成することができる。</p> </div> <p>(ウ) 総合的な探究の時間における地域との協働によるカリキュラム</p> <p>1年次では探究手法の学習および校内と和気町をつなげる探究活動、2年次ではテーマ別に和気町の課題解決に向けた探究活動、3年次では一人一人が自らの進路分野の理想への提言まとめ、という3年間のプロセス、及び1・2年次生は探究学習発表会、3年次生は卒業探究発表会で地域の方や大学関係者、企業の方を招いたポスターセッションやプレゼンテーションをするという枠組ができています。</p>					



	<p>【仮説】探究学習の過程で生徒が大学関係者、地元企業・自治体の従業員・職員等から適宜直接指導を受けられる体制を構築することで、探究の専門性や新規性が高まり、探究活動の質が深まるとともに、探究活動に関わる地域関係者の変容も期待できる。</p> <p>(エ)各教科・科目等と連動する課外活動 地域の方や小中学生、留学生、国内外の高校生との交流を積極的に行っている。</p> <p>【仮説】各教科・科目での学びを生かし、総合的な探究の時間の情報収集や仮説検証の場として活用することで、生徒の視野が拡大し、地域関係者が課題を再認識できる。</p> <p>(オ)上記(ア)～(エ)を支援する体制の構築 和気町が本校に派遣する支援職員1名が常駐し、総合的な学習の時間の企画・運営の中心として活動している。また、支援職員、町商工会、町教委、校長、教頭、主幹教諭、地域連携担当者、事務担当者による連絡会を隔週で開催し、情報共有し小中高連携を支援するとともに、学校評議員に町教委や近隣の中学校長を加えた「魅力化推進協議会」を年5回開催し、学校運営や教育課程編成などについて協議している。</p> <p>【仮説】今後、主たる「地域」を和気町から2市1町に拡充することを想定したコンソーシアム（コミュニティ・スクールへ移行予定）を作り、多様な主体と協働する教育活動を、カリキュラム開発等専門家が支援職員、教職員や生徒とともに進める体制を構築することで、本研究開発終了後も学校と地域とが持続的に関わる経験とノウハウの蓄積が期待できる。</p>
<p>⑧-2 具 体 的 内 容</p>	<p>(1)地域との協働による探究的な学びを実現する学習の実施計画</p> <p>(ア)各教科・科目 「7つのチカラ」育成の年間計画を生徒と教師が共有した上で、教科横断的パフォーマンス課題を開発・実践する。就職・公務員志望者対象に学校設定教科「地域協働研究」を新設し、自己理解と人間関係調整力を高めるとともに、社会人講師による講義や職場体験を通して職業を自らの意思と責任で選択できる資質・能力を高める。</p> <p>(イ)デュアルシステム 2年次の夏・冬・春の3期に各5日間、3年次に学校設定教科「地域協働探究」の中で2か月間毎週金曜日を2期、就業体験実習や地域貢献活動を実施し、職業選択に資する。</p> <p>(ウ)総合的な探究の時間 1年次生は前期で探究の手法を学び、後期に和気町を主題に5分野で探究学習を進める。前期は大学と連携、後期は分野ごとに大学または和気町当該課の指導を受ける。 2年次生はSDGs学習の後、コンソーシアム構成員からそれぞれの現状と課題を聞く場を持ち、和気町または各自の地元の課題あるいは現代社会の課題をテーマに探究学習を進める。テーマに応じて大学や自治体、企業の方から適宜指導を受ける。 3年次生は各自の進路分野について、コンソーシアムや連携先の関係する構成員から情報収集しながら、現状と理想の差を埋める提案を探究する。 1、2年次生は探究学習発表会、3年次生は卒業探究発表会で、地域や大学、企業の方を招き、ポスターセッションやプレゼンテーションを行う。</p> <p>(エ)課外活動 「多様な主体による協働会議」に探究グループの代表者が参加し自分たちの探究活動について地域の方から直接意見を求め聞いたり、「放課後学習支援」で小中学生を直接指導したりするなど、生徒が地域内の多様な方と直接対話できる場を設定する。</p> <p>(2)カリキュラム・マネジメントの推進体制 企画委員会がコンソーシアムの3部会と協働してカリキュラムの内容を立案、地域協働プロジェクト推進委員会で協議、コンソーシアムで承認する地域協働推進体制をとる。</p> <p>(3)必要となる教育課程の特例等 教育課程の特例：特になし 教育課程の特例に該当しない教育課程の変更：学校設定教科「地域協働探究」の新設</p>
<p>⑨その他 特記事項</p>	<p>平成28年度第7回持続発展教育（ESD）大賞 文部科学大臣賞受賞 平成29年度第7回キャリア教育推進連携表彰（文部科学省・経済産業省）最優秀賞受賞</p>

## 2 実施体制の概要

	おかやまけんきょういくいんかい	ふりがな	おかやまけんりつわけしずたにこうとうがっこう
管理機関名	岡山県教育委員会	学校名	岡山県立和気閑谷高等学校

### 2019年度 地域との協働による高等学校教育改革推進事業 実施体制の概要

#### 1 管理機関・学校の概要

##### (1) 管理機関名、代表者名

管理機関名：岡山県教育委員会  
代表者名：教育長 鍵本 芳明

##### (2) 学校名、校長名、研究を実施する学科

学校名：岡山県立和気閑谷高等学校      学科：☑普通科    ☑専門学科    □総合学科  
校長名：香山 真一

#### 2 取組内容

和気閑谷高等学校がある和気町とその近郊の市町の魅力や課題を知り、将来地域を支える人材の育成を目指すためのカリキュラム開発の研究を実施する。具体的には、地域を支える人材として必要とされる学校が掲げた「7つのチカラ」を育成するため、各教科・科目における長期ルーブリックを作成するとともに、教科横断的なパフォーマンス課題を設定し、多面的多角的な探究活動を実施する。また、テーマ別にグループで和気町の課題解決に向けた探究活動を実施している現行の閑谷學（総合的な学習の時間）の専門性や新規性を高めるために、大学関係者や自治体、企業からの指導體制の構築を行う。さらには、職業観の育成や専門的な知識・技能を習得するとともに、地元企業等の魅力や課題について体感することができる学校設定教科「地域協働探究」（仮称）を開設し、地元関係者による社会人講話や地元企業等への就業体験実習等を実施する。その際に、教科横断的な取組となるようカリキュラム開発を行う。

コンソーシアムとしては、開発したカリキュラムに対して、それぞれの専門的な分野から今後の方向性を協議するとともに、各機関の職員を社会人講師として高等学校へ派遣したり、就業体験において生徒の受入等を行ったりして、教育活動の支援を実施する。また、小学校や中学校での出前講座や放課後学習支援等の調整を行うなど、学校の研究開発の研究・改善を支援する。

管理機関である県教育委員会としては、上記の先進的な取組を強化するとともに、県内外の高等学校への普及を図るため、現在、地域と協働した先進的な取組を実施している県内の複数の高等学校と和気閑谷高等学校とで、連絡協議会を立ち上げ、先進校同士で成果や課題を共有したり、フォーラムを開催したりする。

#### 3 管理・運営方法

##### (1) 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名
和気町	町 長・草加 信義
和気町教育委員会	教育長・徳永 昭伸
和気商工会	会 長・川上 健二
和気金融協議会	会 長・丸児 務（中国銀行和気支店長）
赤磐市	市 長・友實 武則
赤磐市教育委員会	教育長・内田 恵子



赤磐商工会	会 長・金谷 征正
備前市	市 長・田原 隆雄
備前市教育委員会	教育長・奥田 泰彦
備前商工会議所	会 頭・寺尾 俊郎
備前東商工会	会 長・横山 忠彦
NPO 法人 和気サンシュユの会	理事長・定國 誠也
特別史跡旧閑谷学校顕彰保存会	理事長・國友 道一
岡山大学	教師教育開発センター長・三村 由香里
和気閑谷高等学校	校 長・香山 真一
和気閑谷高等学校 P T A	会 長・大智 りえ
和気閑谷高等学校同窓会	会 長・内山 登
岡山県教育委員会	教育長・鍵本 芳明

## (2) 将来の地域ビジョン・求める人材像等の共有方法

地元和気町からの支援職員を地域協働学習実施支援員として和気閑谷高等学校に配置していることや、コンソーシアムに地域の自治体及び教育委員会、地元商工会、PTA、同窓会等を含めることで、地域が考えるビジョンや人材について学校と地域が共有し、同じ方向性で教育活動の充実を図ることができる。

## (3) コンソーシアムにおける研究開発体制

地元自治体である和気町に、和気閑谷高等学校の生徒の約半数が住む近隣の赤磐市・備前市の自治体や大学、商工会議所、NPO 等を加え、従来の「魅力化推進協議会」を発展・拡充した新たなコンソーシアムを構築し、その下にワーキング・グループとして、「小中高接続部会」、「産学官連携部会」、「高大接続部会」を設置し、実効性のある会議を運営することで、地域と協働した教育活動の展開を目指す。

## (4) カリキュラム開発等専門家の指定及び配置計画

カリキュラム開発専門家を2名、非常勤職員として指名する。和気閑谷高等学校地域協働プロジェクト推進委員会コアメンバーとして、カリキュラムの編成を担う企画主任や3部会主担当者へのアドバイスやカリキュラム開発に係る教職員及び支援職員（地域協働学習実施支援員）への指導・助言等を行い、本研究開発終了後も自走できるようなカリキュラムを開発する。

## (5) 地域協働学習実施支援員の指定及び配置計画

和気閑谷高等学校と和気町との協定に基づいて和気町から派遣されている支援職員1名（平成31年度）を指定し、閑谷學（総合的な探究の時間）や教科横断的な学びのコーディネーターとして、地域と連携する探究学習のプログラムの企画・立案や生徒への指導等を行うとともに、生徒の学びの場として様々な課外活動を企画・運営する。また、地域と連携した探究学習の手法等、教職員への研修等を実施する。

## (6) 運営指導委員会の体制

地域人材育成に資する地域課題の解決等に向けた研究を中心とした教育課程の研究開発を行うため、大学関係者、産業界関係者、報道関係者、自治体関係者等を運営指導委員のメンバーとし、幅広い視点から専門的な指導・助言を受けられるような体制を築く。

### 【構成メンバー】

氏名	属性／所属	役割
前田 芳男	大学関係者／ 岡山大学地域総合研究センター 教授（副センター長）	地域との協働による教育活動の 手法に関する指導

神崎 浩二	産業界関係者／ 岡山県経済団体連絡協議会 事務局長	産業界が高等学校に求める教育 の在り方に関する知見
岡山 一郎	報道関係者／ 山陽新聞社編集局 編集委員室長	地域課題等に関する知見
足立 大樹	教育関係者／ ベネッセコーポレーション 学校カンパニー 西日本教育支 援推進部 中四国支社長	全国における地域との協働によ る教育活動や教科横断的な学習 の手法に関する知見
石原 達也	NPO 関係者／ 岡山 NPO センター 代表理事	地域における社会貢献活動の手 法の知見
中村 賢三	自治体関係者／ 岡山県総合政策局地方創生推進 室長	地方創生に関する県行政からの 知見

#### (7) 研究成果報告・事業成果の検証に向けた計画

和気閑谷高等学校は、各教科・科目ごとの実践の成果を、学校ホームページで公開したり、毎年実施している卒業探究発表会や探究活動発表会を広く公開したりすることとしている。また、学力向上に資する研究協議会を年1回開催し、各教科・科目等において自主的・自立的に課題解決に向かう態度や地域社会に貢献する態度の育成に資する取組について、県内外で広く共有できるようにする。

管理機関は、有識者から構成される運営指導委員会を年2回開催し、運営指導委員の提言や評価を踏まえ、研究計画の検討、研究の実施過程について検証を行う。また、指導主事等が、教育課程の作成や改善、探究的な学びにおける授業改善についての状況を把握し、適切な指導・助言を積極的に行う。

研究成果については、和気閑谷高等学校をはじめとした、地域と協働した教育活動を実施している複数の先進実践校の取組を県内外の高等学校等に報告する場を用意する。

#### (8) 管理機関又はコンソーシアムによる主体的な取組・支援

##### (ア) 管理機関による予算支援

和気閑谷高等学校を含めた1学年が3クラスの小規模校は、所属する教職員数も少なくなるなど、さまざまな教育活動に停滞が生じる可能性が出てくる。そこで、管理機関である県教育委員会は、学校長の裁量権を拡充し、学校の教育目標を達成できるように弾力的な予算の仕組みとして実施する「学校経営予算」において、通常、在籍生徒数に応じて決定される配分額の下限を1学年4クラス規模とし、小規模校における教育活動の一定水準の維持に努めている。

##### (イ) 管理機関による人的支援

和気閑谷高等学校を本県の地域と協働した探究的な学びを実践する先進校として位置付け、地域を含めた岡山の創生のために貢献できる人材の育成を図るため、専門性を考慮した教員の配置を行う等の人的支援を行っている。

##### (ウ) 地域協働先進校の連絡協議会の実施

和気閑谷高等学校に加え、複数の地域と協働した教育活動を実施している先進実践校と、県教育委員会が連絡協議会を立ち上げ、連携・協力体制を構築する。このことで、和気閑谷高等学校をはじめとする先進的な高等学校の取組の成果を、フォーラムの開催等を通じて県



内外の高等学校等へ普及するとともに、先進実践校同士で成果や課題を共有し、地域と協働した教育活動のさらなる充実を図る。

## (9) 事業終了後の継続的な取組の実施に向けた計画

### (ア) コミュニティ・スクールの導入

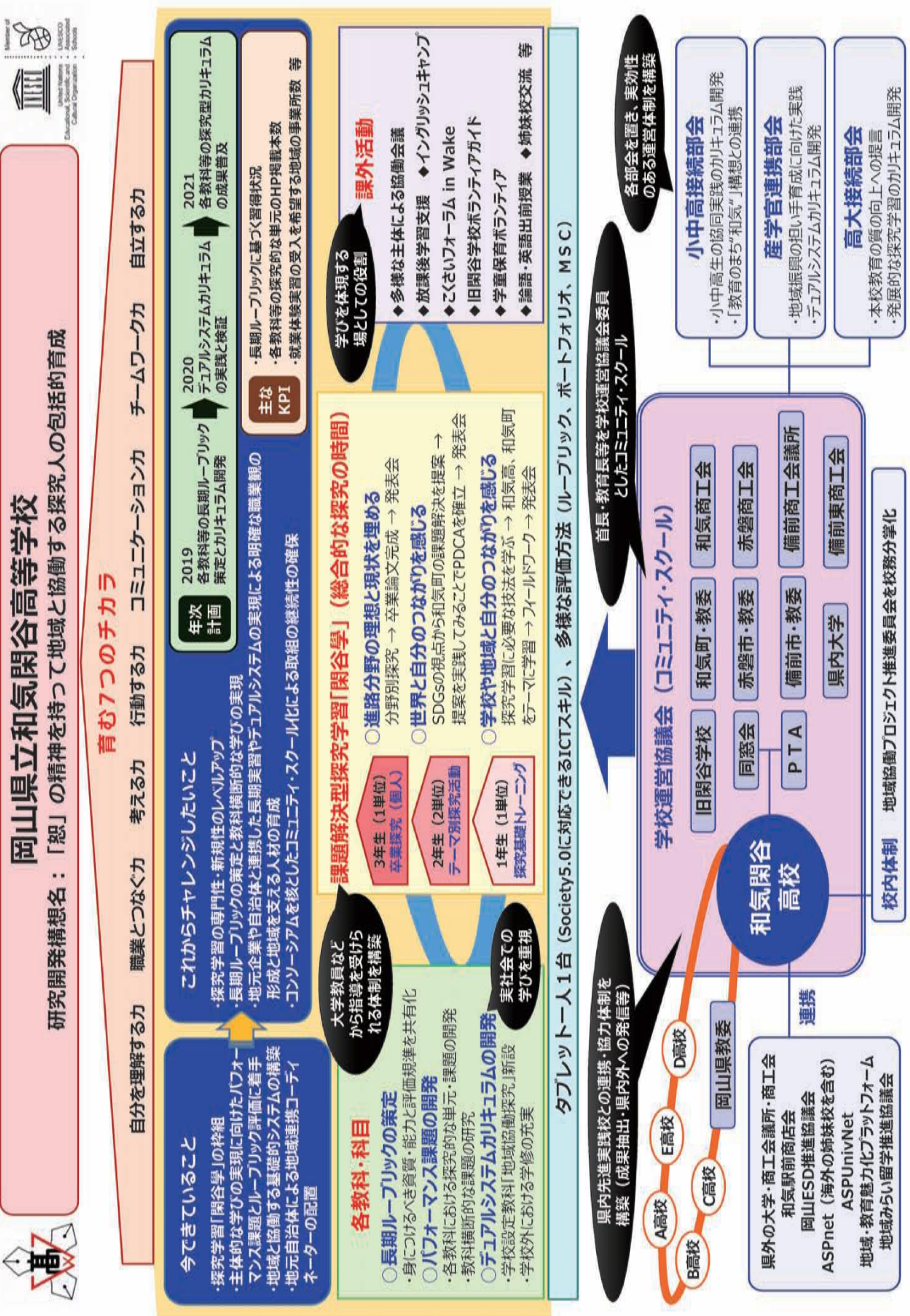
岡山県立学校にコミュニティ・スクールを導入できるよう、平成 31 年度前半に規則改正を行い、平成 31 年度中に導入することとしており、最初に和気閑谷高等学校の魅力化推進協議会（コンソーシアム）を学校運営協議会に移行することで、首長および教育長を委員とするコミュニティ・スクールとし、高等学校の取組支援体制の継続を図るとともに本県のモデルとする。

### (イ) 地域学校協働学習支援員の継続

和気町との協定により和気町から派遣された支援職員を地域協働学習実施支援員に指名しており、事業終了後も引き続き地域協働学習実施支援員として高等学校へ配置することが可能であることから、学校による地域と協働した探究的な学びを継続することができる。

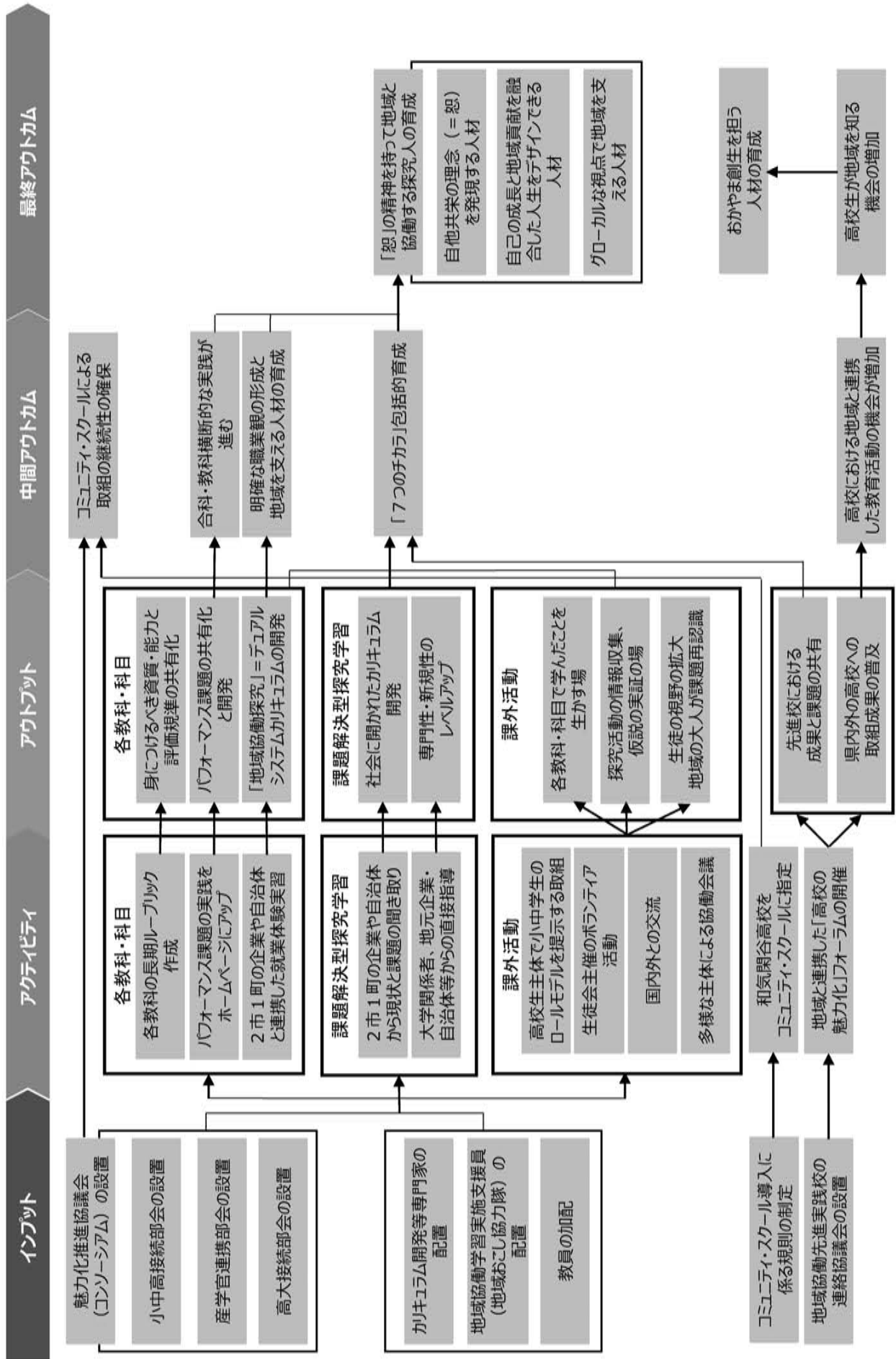
### (ウ) 高等学校による成果の普及

和気閑谷高等学校が本事業で実施した先進的な取組を、他の高等学校教員等に周知し、成果を普及させるため、各教科・科目ごとの実践の成果を、学校ホームページで公開したり、毎年実施している卒業探究発表会や探究活動発表会を広く公開したりすることとしている。また、学力向上に資する研究協議会を年 1 回開催し、各教科・科目等において自主的・自立的に課題解決に向かう態度や地域社会に貢献する態度の育成に資する取組について、県内外で広く共有できるようにする。





岡山県立和気閑谷高等学校 ロジックモデル





## II 詳細

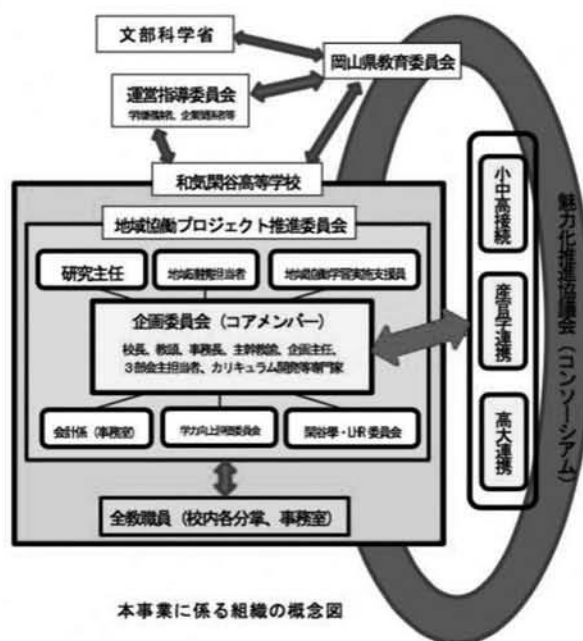
### 1 【組織の取組】

#### (1) 魅力化推進協議会（コンソーシアム）／学校運営協議会（コミュニティ・スクール）

今年度より、文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の地域魅力化型に指定され、3年間、国のサポートを受けながら、地域と連携した魅力あるカリキュラムをつくっていくこととなった。この事業の特徴は、地域の方に関わっていただく共同体「コンソーシアム」をつくり、授業や探究学習、ボランティアなどの課外活動などを、地域の力を借りて、生徒が活動しやすい環境をつくることである。

コンソーシアムは、本校の8割の生徒が通う備前市・赤磐市・和気町の、首長や教育長、商工会議所や商工会、大学関係者、学校関係者から構成されている。7月に第1回の会議を行い、12月からは、コンソーシアムを再編成して、岡山県の県立高等学校で初のコミュニティ・スクールに移行した。

コンソーシアムには主に各団体のトップが参加する。そのため、実務的な内容を進める部会を設けている。小中高接続部会、産学官連携部会、高大接続部会の3つで、カリキュラム開発等専門家2名（江森真矢子さん・梅村竜矢さん）と地域協働学習実施支援員1名（中村哲也さん）が、本校の各部会担当者と協議しながら会の運営を進めている。



#### 委員一覧（順不同・敬称略）

機関名	機関の代表者名
* 和気町	町 長・草加 信義
* 和気町教育委員会	教育長・徳永 昭伸
* 和気商工会	会 長・川上 健二
和気金融協議会	会 長・丸児 務（中国銀行和気支店長）
* 赤磐市	市 長・友實 武則
* 赤磐市教育委員会	教育長・内田 恵子
* 赤磐商工会	副会長・中原 哲哉
* 備前市	市 長・田原 隆雄
* 備前市教育委員会	教育長・奥田 泰彦
* 備前商工会議所	会 頭・寺尾 俊郎

* 備前東商工会	会 長・横山 忠彦
NPO 法人 和気サンシュユの会	理事長・定國 誠也
* 特別史跡旧閑谷学校顕彰保存会	理事長・國友 道一
* 岡山大学	教師教育開発センター副センター長・高旗 浩志
* 和気閑谷高等学校	校 長・香山 真一
* 和気閑谷高等学校 P T A	会 長・大智 りえ
* 和気閑谷高等学校同窓会	会 長・内山 登
岡山県教育委員会	教育長・鍵本 芳明

令和元年 12 月 23 日、\* の主体を委員として学校運営協議会（コミュニティ・スクール）へ移行

### ア 第 1 回魅力化推進協議会（コンソーシアム）

日時 令和元年 7 月 24 日（水）13：30～15：00

#### 協議事項

（ア）本校の取組について（質疑）

（質問）全国募集にエントリーしてくる生徒の背景はどのようなものなのかを知りたい。

保護者は都会にいるが祖父母が地域にいる、あるいは都会の学校で適応が難しいなど、いろいろなケースがあり得ると思う。寮に関することだけで無く、教職員スタッフの充実がなければ、全国募集はうまくいかないのではないか。例えば、特別支援的な観点でのスタッフやスクールカウンセラーなど、学校の先生の体制をどう整備するのか。

（回答）現在の本校では、近隣の親族の家から通っている生徒がいる。不登校の生徒が心機一転、全国募集に手をあげるというケースは他校では多くあるが、本校にはまだ例はない。他校の例では、不登校から地域留学をして地域でのプロジェクトに取り組み、東京大学に合格したケースがある。寮にハウスマスターがおり、心のケアもしながら勉強をさせるというのが一般的である。

（質問）学校運営協議会では、職員の任用に関して意見を述べる、学校運営に関して意見を述べるができることとある。学校運営協議会はある程度踏み込んだ意見を述べることになるだろう。校長の学校運営方針と異なる意見が出る、あるいは委員の中でまったく逆の意見が出た場合、どうやって落としどころを定めていくのか。

（回答）岡山市内のある中学校の例を紹介する。岡山市内でも 3 本の指に入る荒れた学校だったが、コミュニティ・スクール（CS）が機能して立て直しを図った。人事異動に関して、学校運営協議会が意見を具申した結果、校長以下相当数の教員が 10 年くらい異動なく教育にあたり、結果、落ち着いた学校になっていったという例がある。学校運営協議会の意見と校長の意見が大きく異なった場合、校長も意見に耳を傾け、協議会で落としどころを見つけるようにしなければ、名ばかりの CS になる。参加する委員の重みは、従来の学校評議員よりも重いという覚



ればと思う。

(イ) 地域から期待することについて

- ・和気閑谷高校の構想は、育てたい力を明確にし、目指す姿もはっきりしているので、今後のこの場での協議もしていきやすい。和気閑谷高校がやろうとしている地域学にも期待をしている。
- ・年配の方は今の企業を理解しておらず、職場環境の安全性などもまったく環境が変わっていることを知らない。地元の人が地域を知らないことは問題だ。学校の先生も異動が多く、地元企業のことを知らない先生も多い。学校で考える地域と、企業サイドが考える地域の範囲は全然違う。企業サイドからいえば県がどうではなく、1時間以内は全部地元なので、一緒にやっていきたいと思います。それを先生たちに理解してもらいたい。
- ・もっと生徒が主体になったPRをしてはどうか。生徒が興味を持って取り組めるような動画の制作などでもよい。生徒が良さをPRすることは大切だ。そのことによって、いろいろな人材が集まる可能性が広がるのではないか。
- ・構想は素晴らしく、続けていってもらいたいと思う。いろいろな授業を詰め込み、体験を与えることは、ありがたいことと思うが、一番してもらいたいのはコミュニケーションをとる力を養ってほしいということ。詰め込むことはいくらでも吸収できるだろうが、外に出す力が弱い。本人達がコミュニケーションを取りやすくなる方法を教えてあげてほしい。
- ・町内に高校があることは、活力あるまちづくりにとって欠かせないと、町長ともよく話している。今後もできるかぎりの支援を町としてもしていきたい。選ばれる学校づくりは、義務教育においてもテーマとなっている。小中学校においても、魅力づくりをしていくことは大きな課題であり、和気閑谷高校の取り組みは参考になることが多い。
- ・市長・町長が3人も来ているこの会議では、例えば通学の交通機関、バスの問題についてもスピーディに物事が動く可能性がある。この会は、和気閑谷高校のみならず、このエリアの小中高校が良くなっていくスタートだと思っている。
- ・いま、金融機関は融資だけでなく、総合的なコンサルティング業務を行う機関となっている。こうした金融機関のもつ力を学校教育にも生かせるのではないか。
- ・ものづくりフェスタは、高校の文化祭への出展、会場の提供、ボランティアの派遣など和気閑谷高校と良い関係にある。今年度のものづくりフェスタは、小、中、高校生、一般を含めての英語スピーチコンテストや、小中高校生がプログラミングでロボットを動かす体験できる場をつくらうという企画もある。来年度、小学校からプログラミング教育がはじまる。小学校で学び、中学校で深め、高校で3Dプリンタも使って何か作るといったことをしていけば、和気にいながら世界を相手に仕事をしていくことも考えられる。3Dプリンタの購入も検討中。これらを高校生の選択授業に入れてい

ってもらったら、高校の魅力化に結びつくと考えている。

- ・和気閑谷高校の取組は、高校の教育を変える大きな第一歩になる。普通科で学校を魅力化しようというとき、従来は進学実績という単線的な取り組みをしてきたが、そういう観点で魅力づくりをするのは限界にきている。そうではなく、地域とともに魅力をつくっていくという、第一歩だ。和気閑谷高校だけの魅力化でなく、他の普通科高校にどれだけのモデルを示せるか。モデルプランをぜひ示してもらいたい。
- ・保護者としてこの構想はぜひ実現してもらいたい。ただ、大人ははりきって会議をしているが、肝心の子ども達に伝わっているのかなという不安がある。その点もテーマになるのでは。
- ・高校はこれまで勉強と部活の両立しか言ってこなかったが、それをやめる時期にきている。そうではなく、高校生としての自分が社会にどう貢献しうるのかを考えることが、これからの教育の中心になる。だからこそ、総合的な探究の時間がカリキュラムマネジメントの中心になる。それを進めているのがこの学校だ。3年間予算がついたからではなく、その後どう続けていくかを考えて取り組んでいくべき。人口減というピンチをチャンスに変える取り組みをしてほしい。
- ・「岡山県立高等学校教育体制整備実施計画」では、地域とのより一層の連携を提起している。和気閑谷高校は、これまで地域の厚い支援の下に様々な取組をしてきた。国からもモデルとなりうる構想だと、実現を期待されている。和気閑谷高校の魅力化ももちろんだが、県下、全国のモデルになってもらいたい。県下でも小規模校など困難を抱えている学校も多くある。これらの学校と共有化を図り、双方向での発展に資するモデルとなるよう期待をし、県としても支援していきたい。
- ・備前市には、備前緑陽高校に加え、備前市立の定時制高校も持っており、昨年度から魅力化推進会議を開催している。大いに参考にさせてもらいたい。
- ・取組については先進的かつチャレンジングなことをしていると思う。しかし、そもそも高校の、特に普通科の役割は何か。保護者や子供はなにを期待しているのか。人間力を高める点では有意義なことをしていると思うが、進学に目線を置いた時に、直接成果が上がるものがどこにあるのか。構想の中に具体的にみつけることができなかった。
- ・町として、地域おこし協力隊をいれるような協力は今までもしてきたし、これからもできる。4月から町内でバスを走らせ、備前とも相互乗り入れしている。和気方面から備前緑陽へ、備前方面から和気閑谷への乗り入れもでき、赤磐市も吉井町からバスを走らせている。これも引き続き来年度もやっていってほしいとお願いをしている。

## イ 第1回学校運営協議会（コミュニティ・スクール）

日時 令和元年12月23日（月）13：30～15：30

協議事項



(ア) 教育課程について（全体説明、グループ協議、意見共有）

新学習指導要領の施行に合わせて現在検討中の8つの類型について協議

- ・理系文系は徹底した教科指導、他6つの類型は人間力をつける指導をするのがよい。
- ・学んだことを社会で活かすのが学問であるという閑谷学校の学びを反映させたい。
- ・小学校からのつながりがあるとよい。
- ・単純でわかりやすいカリキュラムがよい。
- ・地域との密着を生かしてほしい。
- ・これを達成するためにこのようにしているという理念をしっかりと持つことが必要だ。
- ・本校の歴史を顧みて、特別進学クラスをつくってはどうか。
- ・本校の特色をどこに出そうとしているか見えない。先を見据えた話のカリキュラムになっているのか。中学生が見て魅力があるのか。
- ・1年秋に類型を決定するのが難しい。
- ・赤磐・備前から見ての魅力を出す必要がある。資格取得や中学校の先生の勧めがあればよい。

(イ) 教育課程を実現するための人事について（全体説明、グループ協議、意見共有）

上記の教育課程を実現するために必要な人材について協議

- ・情報科の教員が不足するのではないか。
- ・今の流れを絶やさない人事が重要。校長再任用はどうか。
- ・ユネスコや閑谷學を指導できる教員、地域との協働を特化して担当する人材、全国募集を活用できる人材が必要。
- ・普通科の管理職と専門科の管理職の両方がいた方がよいのではないか。

**ウ 第2回学校運営協議会（コミュニティ・スクール）**

日時 令和2年2月28日（金）15：00～17：00 予定

議題 学校関係者評価、次年度の学校経営計画と予算について

講演 高校魅力化評価システム診断結果にかかわる解説

講師：三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社 喜多下悠貴氏

※ 新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止。

## (2) 小中高接続部会

魅力化推進協議会「小中高接続部会」は生徒の進路、地域の課題解決、また学力向上において県内の小学校、中学校等の教育機関との連携を推進するため設立した。2市1町（備前市、赤磐市、和気町）の各小学校から中学校、そして高校まで地域に根差した接続を実現する取組にかかわる意見を出し合う部会となっている。

### 委員一覧（順不同・敬称略）

和気町立和気中学校校長	小林 健	和気閑谷高校校長	香山 真一
和気町立佐伯中学校校長	松井 啓子	教 頭	上野 修嗣
赤磐市立赤坂中学校校長	的場 豊	事 務 長	神田 明夫
赤磐市立吉井中学校校長	青山 利明	主幹教諭	福田 浩司
備前市立三石中学校校長	岡部 高弘	企画主任（教諭）	安東 真美
備前市立吉永中学校校長	木村 俊一	部会主担当（教諭）	浮田 圭一郎
和気町立和気小学校校長	徳永 博文	地域協働学習実施支援員（支援職員）	中村 哲也
		カリキュラム開発等専門家	江森 真矢子

### ア 第1回小中高接続部会

日時 令和元年7月9日（火）9:00～10:30

協議事項

（ア）2市1町小中高交換留学制度について

本校生徒と2市1町の小中学生が交流により、小中高の連携・相互理解促進を図る。交流を通して、オープンスクールよりも具体的に本校の活動やそれによって力をつけた生徒を知ってもらい、受験生獲得につなげる。本校生徒には学校外での学びの機会となり、小中学生には本校生徒と実際に交流することで地域内でのロールモデルを獲得し、進路選択の一助となる。

#### 【意見】

- ・保幼小中の連携は進んでいる。そこに高校がどう入っていけるかを考えるのが良い。
- ・距離があることがネック（三石、吉永ならば近いが、備前、日生、伊里は遠い）。授業時間数の確保は中学の課題の一つ。備前市の場合は、ICT環境が整っている（1人1台のタブレット、全教室にPC、教材提示装置、プロジェクタ）ので、ネット経由での交流は可能。ただし、やはり年に何回かは生の姿を見る交流が良い。

#### 【取組への反映】

部会での意見を踏まえ、教員の負担増につながる新たな事業を行うのではなく、現状の枠組みの中で行ってきた以下の4つの事業の質向上に努めることとした。

①高校生による論語出前授業（12/6）

2年次閑谷学のチームが和気中学校1年生に対して実施

- ②高校生による英語出前授業（第1回：7/10、第2回：12/11）  
英語研究部が和気小学校1年生に対して授業を実施
- ③高校生による放課後学習支援  
和気中学校にて8回、佐伯中学校にて6回実施（参加高校生のべ14人）  
※和気町がタクシー代を負担
- ④探究学習発表会・多様な主体による協働会議（2/1）  
昨年より多くの中学生に参加を呼びかけ、本校を知ってもらう。

(イ) 小中高生サミットについて

小中高生が地域内外の多様な大人と対話する場を開催し、地域への関心を高め、主体的に地域社会に参画する人材を育成する。町内3校（和気中、佐伯中、本校）の生徒会執行部を中心に、ファシリテーターとなる中高生リーダーを育成し、対話の場を持続的に開催できる仕組みをつくる。それぞれの年代の視点で地域の課題・解決策、地域でやりたいことについて議論する場を設け、主体的に地域社会に参画する原体験の機会を提供する。

**【意見】**

- ・小中高校生が1つの課題に取り組むということであれば、ボランティア活動など日常の場面で行動を共にし、絆を深めていくことを考えて良い。
- ・備前市も社会教育課がだっぴを実施しているので、和気とも社会教育課同士が連携すると広がるのではないか。
- ・赤磐市もだっぴを入れていく方向。サミットという形で2市1町が集まるのは良い。

**【取組への反映】**

来年度以降2市1町へ拡大していくことを念頭に置き、今年度はサミットの土台つくりと位置づけ、和気町内の中学校・高等学校を対象に連携を進めている。

①佐伯中学校だっぴ（10/19）

中学1～3年生45名を対象に大人31名、大学生17名、本校生徒13名がキャストとして参加。事前に高校生対象のファシリテーション研修を実施。

②和気町内の中学生を対象に生徒会だっぴ（サミット）を3月に開催。ここでは佐伯中学校だっぴに参加した高校生がファシリテーションを行った。

(ウ) 2市1町地域協働ベースボールプロジェクトについて

身体障害者野球チーム「岡山桃太郎」との交流事業を通じ、小学生から大人までが社会貢献活動を体験しながら地域での人々のつながりを意識する。「岡山桃太郎」は活動場所や対戦相手がなく、活動が厳しい状態にある。本校野球部が中心となり練習場所の提供や対戦相手、練習補助など活動のサポートを行う。中学生（野球部に限定しない）や小学生にも呼びかけ、社会貢献活動+小中高接続のイベント（テ



ィーボール教室など)も実施する。

#### 【意見】

- ・野球だけだとできる生徒に限られるので広げてはどうか。野球は赤坂中、佐伯中が合同チームになるので、高校にサポートしてもらえるとうれしい。
- ・三石は野球部が休止状態で来年も入部希望者はいないだろう。野球をやりたい生徒はクラブチームに入っている。県規定では平日1日、土日どちらか1日は部活完全オフとなっている。部活は教員の働き方改革との絡みもあり、部活動支援員に任せていく方向。
- ・生徒数が減る中で部活の精選をしなければならない事情があるが、高校の部活に中学生が参加することで活動の場を確保することを考えてよいのではないかと思う。

#### 【取組への反映】

- ・10/6と10/20に障害者野球チーム「岡山桃太郎」と本校硬式野球部が合同練習と練習試合を行った。両日ともにKSB(瀬戸内海放送)の取材を受けた。10/21のスーパーJチャンネル内で取り組みが紹介された。12月より近隣の保育園、幼稚園、小学校などで、岡山桃太郎と本校硬式野球部が野球教室を開催する。
- ・現在、野球部ではタカギスポーツ(岡山市中区)と提携し、障害者用の野球用品開発に携わっている。今後はパラスポーツ全体、バリアフリー社会の改善を目指し、活動を行う。

#### (エ) 和気閑谷高校文化祭(9/7)企画について

昨年度よりスタートした、地域との協働による文化祭の開催を発展させ、小中学生の来場者を増やすことを目指して今年度は以下の事業を行う。将来的には本校の文化祭が「まちのみんなの文化祭」となることを志向する。

#### 【意見】

- ・高校との交流は可能性を感じる。中学1・2年の段階から高校の姿を見ることは大事である。先を見据えての学習や進路選択をしてもらいたい。
- ・異なる学校種との交流は、表現の力をつける上でもチャンスである。
- ・(文化祭に関して)9月の終わりに総体があり1・2年生の参加は難しい。日程的にも土日どちらか休みにするので日曜日の休みが多い。参加しやすい環境を作ってほしい。

#### 【取組への反映】

総体の日程上、中学生の参加は難しいと判断し、今年度は小学生の参加を促すため、地域の子育て支援NPOの協力を得た子ども向け企画とスタンプラリーを用意し、2市1町の小学校に案内を依頼した(中学校へは例年どおり案内)。

- ①小学校への案内配布(各教育委員会経由で次の小学校に対し、学級掲示等を依頼)  
備前市(三石小学校・吉永小学校)、赤磐市(山陽小学校・山陽西小学校・山陽東



小学校・山陽北小学校・豊田小学校・磐梨小学校・桜が丘小学校)、和気町(和気小学校・佐伯小学校・本荘小学校)

②ママほっとサロンとの協働企画「一緒に遊ぼう！わんぱーく in 和気閑谷高校 楷楓祭」

2年次生閑谷學で小学生等との交流をテーマにしている生徒9人がスタッフとして参加し、芝生広場での水遊びを行った。20組(大人19人、子供23人)が参加をし、本校卒業生を含むボランティアスタッフを含めると60人が参画する企画となった。

③スタンプラリー

会場内をめぐり、スタンプを集めた子供にはお菓子の詰め合わせを賞品として渡した。用紙を63枚配布(ゴールしたのは27人)。文化の部全体では、受付名簿ベースで小学生31人、中学生32人の参加があった。

## イ 第2回小中高接続部会

日時 令和元年11月12日(火)13:30~15:00

### 協議事項

#### (ア) 2市1町における持続可能な12年間のキャリア・パスポートの制度構築

文部科学省が、令和2年4月から全国の小学校・中学校・高校に「キャリア・パスポート」を導入する方針を決定したことで、赤磐市、備前市、和気町の2市1町で、小学校から高校まで確実にキャリア・パスポートを引き継ぎ、最終的な進路まで活用できる仕組みを構築したい。児童生徒にとっては、自らの学習状況やキャリア形成を見通し、振り返るなど、自己評価を行うとともに主体的に学びに向かう力を育み、自己実現につながる。

#### <導入のメリットについて>

- ・大学を目指す生徒はキャリア・パスポートで、小学校からの履歴を持ち上げることができれば、調査書にも反映することができる。また、同様に就職を目指す生徒も自分の来歴をアピールする素材として活用できると考えている。
- ・目的を明確化し、その活用方法を東備地域でモデル化できれば意義がある。また、この会で1つのモデルが生まれたら、他の高校にも横展開できると考えている。
- ・ポートフォリオとしての活用だけでなく、教育内容でつなぐことにも活用できるのではないかと考えている。今の高校での総合的な探究(学習)の時間が中学校と切り離されており、それまでの教育の成果を活かせていない(繋がっていない)ことがもったいないと思っている。

### 【中学校側からの意見】

- ・ 1枚にすると、失われる可能性が高いだろう。それぞれの学校で様々な活動の成果を保管しているので、どのように次に送るかの一つの試みだろう。それを制度化していこうとすると、解決しなければならない課題がたくさんあるだろう。
- ・ 中学校のフォーマットが例示されているが、年に1度、1枚にまとめるのではポートフォリオとしては物足りない。しかし、全部を送ろうとすると膨大になる。
- ・ 本校では今年度、各教科で毎回ふりかえりをしている。最初は書けなかったが、教員皆でどうしたら書けるようになるかを協議し、丁寧に5W1Hで書けるように指導した。生徒のコメントには全部コメント書いて返すという取組で、かなり書けるようになってきた。

### (イ) 12年間で一貫した課題探究への取組

地域特有の文化・歴史・自然と国際社会の動向を教材として、町おこし・国際交流や社会貢献活動の実践を学び、それらを軸に教科の学びを生かせるよう関連づけをした「総学（総探）」内で、その系統的な教育課程、指導方法、評価に関する研究を小中高12年間通して行う。

### 【意見】

- ・ 入学者数の予想については東備の他の高校も同じ状況。人口減対策は各市町の喫緊の課題であり、各地域への愛着を育てることには意義がある。
- ・ 義務教育では時間を生み出すのが非常に難しい。東備地域に関して学習する時間を1時間捻出することで積み上げてはどうか。小・中学校でも1年に1時間地域について学習をし、そのポートフォリオをつなぐということではどうか。縦でつなぐと12時間の単元になる。
- ・ 各学校の特色として総合的な学習の時間を設定している。テーマを統一することはかなりすり合わせが必要。田舎に行けば行くほど、中学生がいないと成り立たない行事もある。

## オ 第3回小中高接続部会

日時 令和2年1月22日（水）13:30～15:00

### 協議事項

#### (ア) 小中高生サミットについて

提案：①各小中学校の代表児童と生徒会執行部が本校に集まり、本校生徒会執行部を中心に小中高生サミットを開催する。

②テーマは地域課題解決を設定する。

③年3回の開催を予定し、最終回で発表を行う。

**【意見】**

- ・ やること自体は意義がある。小規模校で人間関係が固定化されているので、多様な人と触れ合うことに意義がある。SDGsについても学ぶ機会になる。
- ・ 中学校にはスマホサミットがある。スマホについて生徒が考え話していくことには意義があり、続けると熱量が高くなってそれが学校に伝播するという良さがある。
- ・ 秋スタートで8月に発表とすれば、生徒会の代替わりにも対応できる。
- ・ 小学生がサミットに参加するのは難しいのではないかという意見もあった。新学習指導要領で謳われている「学びに向かう姿勢、人間性等」に注目したい。なぜ学ぶのかを高校生の言葉で語ってもらえると、良いのではないか。学びに向かう力が生まれる場になると良い。

(イ) 持続可能なキャリア・パスポート作成について

提案：①各校でキャリア・パスポートを作成し、進捗状況を部会で報告する。

②本校が各中学校から引き継いだキャリア・パスポートの活用方法を検討する。

**【意見】**

- ・ 県が指定している雛形を使って、1枚だけ送っていく方法を各校考えている。それ以外の基礎資料は膨大な量になる。
- ・ 単年で考えると、来年度は1枚だけ見ても使い道はないのではないか。数年経てば意味のあるものになるだろう。どう役に立てることができるのか検討しなければいけない。
- ・ 高校入試にキャリア・パスポートを絡めると本来の意味がなくなるのではないか。

(ウ) 和気閑谷高校生による小中学校インターンシップ制について

提案：閑谷學の探究学習として、本校2・3年次生の教育系志望者または希望者が、2市1町の各小中学校の学校現場で毎週一回の頻度でインターンシップを行う。ジョブシャドウイングから授業補助や事務作業など、小中学校の先生方のもとで学びを深めさせたい。

**【意見】**

- ・ 守秘義務については懸念がある。知っている生徒同士だと情報が漏れやすいので出身生徒でない方が良い。複数での参加は生徒同士の甘えが出ることもある。
- ・ 中学生の職場体験では、中学校はこんなところ、という紹介を小学生にやってもらう。そうすると、受け身ではなく能動的に動ける。中身を能動的なものにしてもらいたい。



### (3) 産学官連携部会

魅力化推進協議会「産学官連携部会」は『恕』の精神を持って地域と協働する探究人の包括的育成を目指して地域振興の担い手育成に向けた実践とデュアルシステムカリキュラム開発を2つの柱として運営体制を構築した。

#### 委員一覧（順不同・敬称略）

備前市市長公室企画課長	岩崎 和久	和気閑谷高校校長	香山 真一
備前市教委教育部文化振興課長	横山 裕昭	教 頭	上野 修嗣
備前商工会議所専務理事事務局長	西角 友彰	事 務 長	神田 明夫
備前東商工会支援課長	武田 正幸	主幹教諭	福田 浩司
赤磐市総合政策部政策推進課主査	直原 真弓	企画主任（教諭）	安東 真美
赤磐市教育委員会学校教育課長	家森 康彰	部会主担当（教諭）	赤畠 真一
赤磐商工会支援課長	竹並 義人	カリキュラム開発等専門家	梅村 竜矢
和気町まち経営課長補佐	海野 均		
和気町教委社会教育課長	則枝日出樹		
和気商工会支援課長補佐	出射 弘貴		
NPO 和気サンシュユの会理事長	定國 誠也		
和気金融協議会長	丸児 務		

#### ア 第1回産学官連携部会

日時 令和元年4月24日（水）9:00～10:30

協議事項

(ア) 令和元年度2年次生の「閑谷學」について

##### 【意見】

- ・閑谷学校は多様性の中での学びがあった。「閑谷學」もその精神を引き継いでいる。
- ・地域でアクションできれば世界のどこでも力を出せる。また、キャリア教育の側面も持っており長い目で見れば地域のためになる。
- ・今年度の目標は「実践する」ということ。提案だけで終わらずにアクションを起こすところまでいきたいと考えている。

(イ) 就業体験実習について

##### 【意見】

- ・毎年20人程度が2市1町の商工会、商工会議所管内の企業に就職している。
- ・本年度より5日間の実習を年3回実施する予定にしている。受け入れをぜひお願いしたい。
- ・単位認定を行う方向で検討するので、生徒には実習記録をつけさせる。また、事業所には評価もお願いしたい。

(ウ) 全国募集について

【意見】

- ・昨年度入学生は応募3人で合格者はなかった。今年度入学生は合格者3名（兵庫2、香川1で、いずれも自宅からの通学）であった。
- ・今後の課題は生徒の住居問題。下宿先がなかなか見つからず困っている。下宿への単純な受け入れではなくテーマを持った斡旋であってもよい。

イ 第2回産学官連携部会

日時 令和元年10月17日（木）15:00～16:30

協議事項

(ア) 2年次生の就業体験実習について

①第Ⅰ期（夏季休業中）実施報告

- ・CURRY&CAFE SHIBABE（備前市）2名
- ・株式会社 前田園（赤磐市）1名
- ・有限会社 山本製菓（赤磐市）2名                    以上男子生徒5名参加

②Ⅱ期、Ⅲ期も2、3月に実施予定。受入事業先増加に向けて事業所訪問をする予定

(イ) 学校設定教科・科目「地域協働探究」について概要説明

【意見】

- ・基礎学力、知識を学ぶ場になればよいのではないか。
- ・課題を与えての探究学習を検討してもよいのではないか。
- ・カリキュラム上での日時の検討は今後大切になるのではないか。
- ・ある程度まとまった時間、事業所での活動が必要ではないのか。

ウ 第3回産学官連携部会

日時 令和2年1月29日（水）15:30～17:00

協議事項

(ア) 令和元年度2年次生の就業体験実習について

①第Ⅱ期（2月）、第Ⅲ期（3月）の実施予定報告

- ・株式会社 前田園（赤磐市）Ⅱ期2名、Ⅲ期2名
- ・有限会社 山本製菓（赤磐市）Ⅲ期1名
- ・株式会社 Future Dimension Institute（和気町）Ⅱ期3名
- ・株式会社 徳永こいのぼり（和気町）Ⅲ期2名

第Ⅱ期、第Ⅲ期とも第Ⅰ期と同じ男子生徒5名が参加

②次年度以降の実習受入先確保のお願い

(イ) 学校設定教科・科目「地域協働探究」について

実施内容の検討

#### (4) 高大接続部会

魅力化推進協議会「高大接続部会」は県内の大学との連携を図り、本校教育の質の向上への提言と、発展的な探究学習のカリキュラム開発を目的として設立された。今後本校が持続的な発展をしていくうえで、閑谷學の高度化ならびに本校の目指す生徒の包括的育成を軸とし、本校にとって必要なカリキュラムや教科の評価指標について協議する部会となる。

#### 委員一覧（順不同・敬称略）

岡山大学 教育学研究科 准教授	宮本 浩治	和気閑谷高校校長	香山 真一
		教 頭	上野 修嗣
岡山大学 地域総合研究センター 実践型教育プランナー	吉川 幸	事 務 長	神田 明夫
		主幹教諭	福田 浩司
岡山商科大学 経営学部商学科 教授	三好 宏	指導教諭	荒金 恭子
		企画主任（教諭）	安東 真美
山陽学園大学 地域マネジメント学部 学部長	大橋 和正	部会主担当（教諭）	岸田 典子
		カリキュラム開発等専門家	江森 真矢子
中国学園大学 副学長	住野 好久	カリキュラム開発等専門家	梅村 竜矢

#### ア 第1回高大接続部会

日時 令和元年8月8日（木）13:30～15:00

協議事項：授業改善・7つのチカラについて

生徒の学力を向上させるため授業改善に取り組んでいる。「7つのチカラ」を総合的な探究（学習）の時間だけでなく、各授業においても身につけさせるため、全教科で取り組みを行っていく。長期ループリックは指導と評価の一体化を図るという目的のもと、作成を行っている。完成したものは生徒の学力向上の指標とする。

#### 【意見】

- ・7つのチカラが互いにどのように作用しているのか、その構造が見えない。
- ・7つのチカラを今後どのように活用していくのか。カリキュラムとの整合性が必要である。
- ・その探究人が必要としている資質・能力をどのように身につけさせるべきかを考えた際に、どのように7つのチカラが関係していくべきかを考える必要がある。
- ・教科で学ぶことと、探究で学ぶことの関連性をしっかりさせることが大事。各教科で何のために学ぶのか、という目標もすべて閑谷學に繋げていけばよいのではないか。新しい教科と閑谷學の棲み分けと連携が必要である。



## イ 第2回高大接続部会

日時 令和元年10月7日(月) 15:00～16:30

協議事項：育成すべき資質・能力とその評価について

第1回部会を受け、「7つのチカラ」の構造化に着手した。「21世紀型能力」の構造をもとに作成した。(P25上図)各教科からの長期ルーブリックの資料には、7つのチカラのルーブリックもある。各教科の掲げる観点別ルーブリック(長期ルーブリック)と、7つのチカラのルーブリックとの結びつきがない状態であることが現段階における課題である。高等学校も大学と同じようにAP(アドミッション・ポリシー)、CP(カリキュラム・ポリシー)、DP(ディプロマ・ポリシー)を明示するべきだということが中教審で議論されている。今後各教科において作成した長期ルーブリックを実効性のあるものにしていきたい。

### 【意見】

- ・求める人材像がどのコンピテンシーを持つ人を指すのかを明確にする必要がある。
- ・7つのチカラと学力の三要素、個々の教科のルーブリックが見えるように整理するのはどうか。
- ・今の長期ルーブリックの観点を、本校オリジナルの物にバージョンアップしていく必要があるのではないか。
- ・学習指導要領の教科ベースの表現になっている現在の評価の観点から、生徒が自分の力を付けるうえで、見て分かりやすいルーブリックを目指す必要がある。
- ・学校全体でのディプロマ・ポリシーを作り、それを受けて各教科がどのように教科指導に繋げていくか、を考える必要がある。

## ウ 第3回高大接続部会

日時 令和元年12月5日(木) 15:00～16:30

協議事項：目指す姿・育成すべき力と、長期ルーブリックについて

「7つのチカラ」を認知/非認知、学力の三要素を軸に整理した。(P25下図)  
(国語科作成の長期ルーブリックを参考に説明)教科で育てる観点と「7つのチカラ」の関連を具体化。7つすべての力を育てることも検討したが、授業の中では、「コミュニケーション力」、「考える力」、「自分を理解する力」に絞った。学習指導要領で示されている力ではなく、本校独自に育てる内容を焦点化した(特に関心意欲態度)。

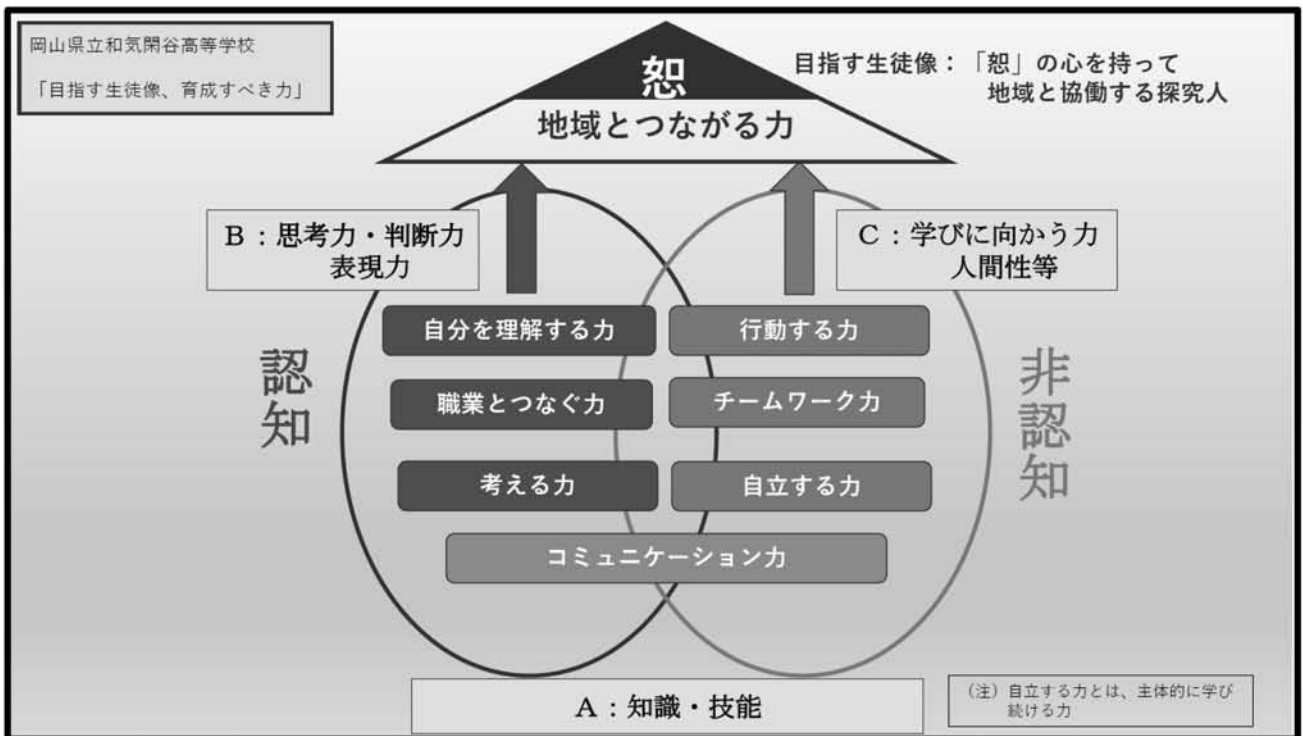
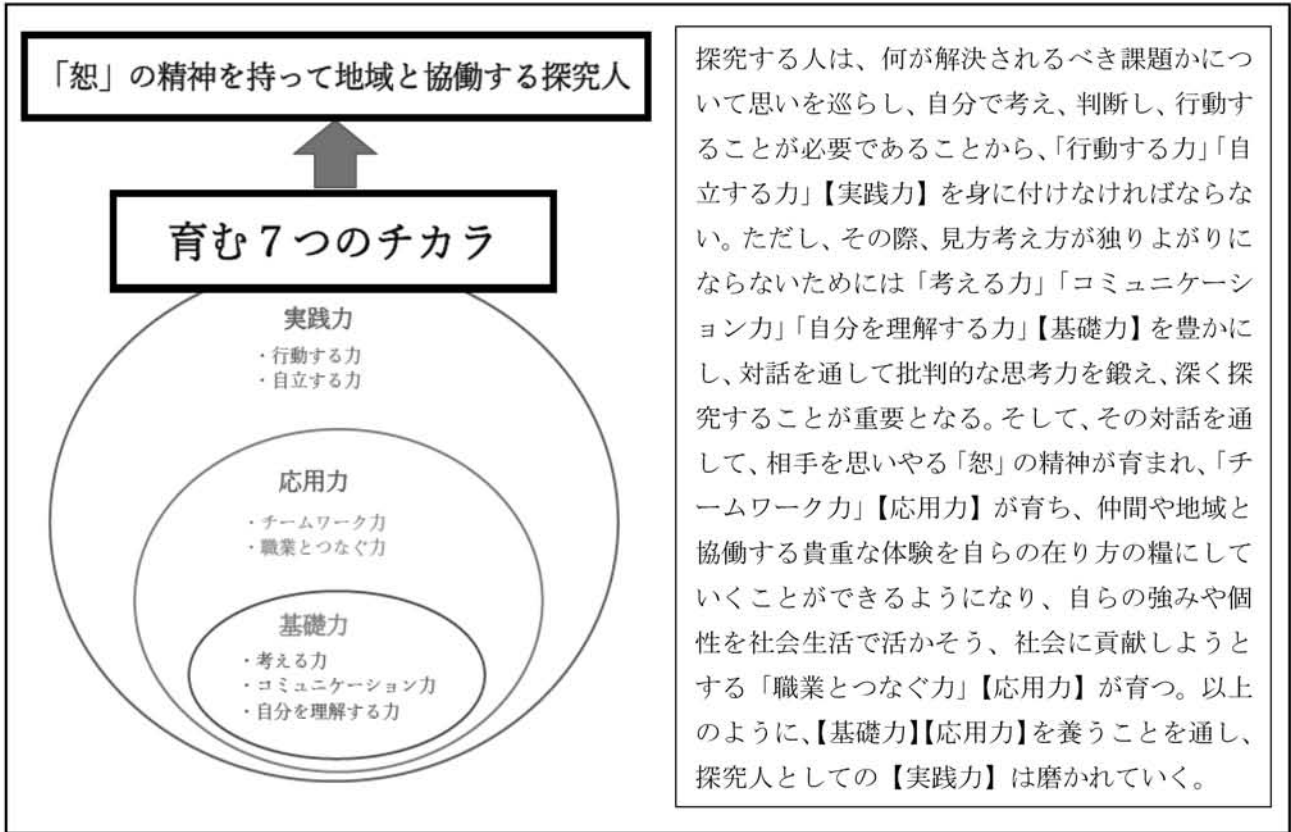
### 【意見】

- ・概念図は(以前のものと比較して)わかりやすくなった。
- ・「地域と協働する探究人」を目指す生徒像とするのであれば、それがルーブリックに反映されても良いのでは。
- ・構造図については、7つのチカラがこれで良いのか、中身は再検討すべき。今後の研究実践の中で見直していくべきでは。

- ・「7つのチカラ」はこのようにまとめること自体に無理があるのではないか。和気閑谷高校ならではの力を明確にしていくほうが良いのでは。(地域と協働するための●●力)
- ・大事なのはこの構造図を教員／コミュニティ・スクールの委員／生徒と共有し、協議して相互理解を深めていくためのツール。
- ・7つのチカラの中に「地域」というキーワードがもっと現れたほうが良いのではないか。
- ・「地域の魅力や資源について」など「地域」についての理解や、課題解決の態度なり力を評価しようという指標になっている場合がある。本校でも地域にこだわった資質能力をつけようとしていることを明示してはどうか。
- ・「本校の国語科」はどういう国語の授業を目指すのか、それをまず明らかにしないとルーブリックは作れないのではないか。



# 7つのチカラ



## 2【教科・科目】

### (1) パフォーマンス課題と長期ループリック

本校では、岡山県の指定を受け、生徒一人ひとりを生かす教室づくりによる学力向上の研究を平成 29 年度から行った。本研究の主眼は生徒が主体的な学習者となることを目指し、生徒が自らの成長を実感できる学校の仕組みづくりに全教職員で取り組んできた。

今年度、より一層生徒の学習意欲を引き出すことのできるパフォーマンス課題の作成と実践、さらには、卒業までに身に付けるべき資質能力である「7 つのチカラ」につながる教科の長期ループリックの作成と実践に取り組んでいる。

ここでは、「パフォーマンス課題」と「長期ループリック」に関する事項を報告する。

#### ア 研修体制

本校では、毎年、常勤の教職員の約 3 分の 1 が異動となる。また、1 学年の定員が 120 名であり、担当する教科によっては 1 名のみということもあり、上記のような学習指導の取組を継続発展していくために、2 つの方向から研修体制を考えている。1 つ目は、学校として目指していることを教科の枠を超えてサポートしていくために定例の職員会議や学力向上評価委員会での研究授業の機会を通じての教職員同士による学び合い。2 つ目は、授業を組み立てる教職員一人ひとりが大学などの専門機関とつながって主体的に授業改善を深めていける教科別ワークショップである。

令和元年度 平成30年度 高等学校学力向上フロンティア(完成年度)に関わる 授業改善の年間計画について	
1 研究主題 (1) 学校における研究主題 「一人ひとりをいかに教室」づくりによる「学力向上」を目指す研究	
2 1年間の取組予定 (○: 職員会議後の授業改善に関わる情報共有)	
4月1日	○学校経営計画WS+「和風岡谷高校の授業について考える」
4月22日	○教科の7つのチカラと成長を実感できる授業づくり
5月11日(2限)	PTA総会授業参観
5月13日	シラバス提出締め切り
5月27日	○
6月17~21日	公開授業週間(各教科の研究授業)
6月21日	○
6月18日	第1回学力向上評価委員会・授業公開(5限)
7月2~6日	「望ましい学習の態度・意欲ループリック」の実施
7月~8月	※教科別ワークショップ①の実施期間※
7月19日	○公開授業週間後の情報共有
8月17・18日	★全国スクールリーダー育成研修会(京都大学)※名可也
8月20日	○
8月29日~	教科の7つのチカラと長期ループリックの提示開始
9月20日	○
10月18日	○
10月~2月	※教科別ワークショップ②の実施期間※
11月11~15日	公開授業週間(各教科の研究授業)
11月14日	公開授業・研究授業(数学、商業) 第2回学力向上評価委員会(T)
11月18日	○
11月19日	指導教諭公開授業・第2回学力向上評価委員会(Y)
11月29日	MSC評価の実施
12月16日	授業実践報告(PDFした完成版)の提出締め切り
1月8日	○
1月16日	○各教科の実践報告
1月21日	第3回学力向上評価委員会(T)5限授業公開
2月3日	第3回学力向上評価委員会(Y)5限授業公開
3月3日	○
通年で実施されるもの	
○「望ましい学習の態度・意欲ループリック」の実施(4, 7, 10, 12月)	
○各自の実践報告(第2回会議資料をご参考ください)	
○生徒によるMSC評価表	
○研究記録の執筆	

表1 年間計画(7月提示した修正版)

(ア) 定例の職員会議や学力向上評価委員会の研究授業を通じての教職員同士の学び合い

a 定例職員会議後の各回 20 分~30 分程度の研修

4 / 1 「和気閑谷高校の授業について考えよう」

（「授業の額縁（目標・手順・達成基準の明示と省察機会の確保等）」の実践の再確認と、昨年度までのパフォーマンス課題の好事例の紹介、今年度の計画（表1）を提示し、全員が実践報告を完成させること、7つのチカラと関連した長期ループリックを作成することを共有する）

4 / 22 「教科の7つのチカラと成長を実感できる授業づくり」

（教科別グループで、教科の7つのチカラをすり合わせ、授業を実施しての情報交換）

5 / 27 「『授業の額縁』と『ループリック実践』を共有しよう」

（「本時の目標」「学習の手順」「達成基準」等を示した、1時間分の板書の写真を共有し、工夫点や苦労しているところなどについて、説明し合う）

7 / 19 「2学期の「授業」づくりに向けて」

- ・長期ループリックと7つのチカラの実践イメージを持つ
- ・ICTの活用実態について



5 / 27 の研修の様子

（上記2点を目的に、同僚の実践報告を共有し、グループで話し合う）

9 / 21 2学期の研究授業・公開授業、生徒MSC評価等の予定連絡

10 / 18 「授業実践報告をよりよいものにするために」

（今年一番初めに完成した実践報告執筆者から報告の記載に係る注意点の伝達と協議）

11 / 18 11 / 21 の公開授業の運営にかかわる最終確認

12 / 17 「新カリキュラムに向け、ディプロマポリシーと長期ループリックの検討」

（教科ごとにグループを編成し、令和2・3年度の教育課程において各類型で育てたい力について考える。また、国語科の長期ループリック（案）を参考に各教科の長期ループリックと7つのチカラとを連動させたものにする話し合いをする）

1 / 8 令和元年度授業改善取組報告～生徒の学習意欲を引き出す学習課題の実践報告～

（各自が作成した実践報告をもとにグループに報告する）

b 学力向上評価委員会（6・11・1月開催）の機会を利用した教職員の学び合い

学力向上評価委員会は、学力向上と進路保証が有機的に結びついているか検証する場として、大学教員、本校教職員、本校生徒代表とが多角的に教育活動を評価する場として上記3期に、5回実施した。特に、研究テーマに沿った学習指導の改善がその主たるものとなるため、11月と1月には研究授業と公開授業に全教職員で参加し、お互いの授業を評価し合った。



<研究授業>

令和元年 11 月 16 日 (木) 実施

1 年普通科標準コース「数学 A」

授業者：岡本安宜教諭

1 年 3 組「簿記」

授業者：柴谷祐人教諭

指導・助言：高旗浩志教授

(岡山大学)

参加者全員がどちらかの授業を 1 時間参観し、上記「授業参観の視点①～④」で気づきを付箋に記入し、視点を絞ってグループ協議を行った。教職員アンケートからも、全ての教職員が「スキルアップに役立つ」と肯定的回答をしており、「今までの知識を使い、どこまでの解決を求めているのか、共通認識をもたせる」「腑におちていない子たちへの手立て」等、参加者一人ひとりにとって学びが深まっていることが見て取れる。

授業参観の視点	
①	「一人ひとりをいかす教室」づくりがどのようになされているか。
②	①による「学力向上」の実際場面がどのようなものであったか。
③	②の具体的な方法として授業者の作成したルーブリックへの到達具合について、ルーブリックの基準の妥当性の検討。
④	ルーブリックに到達するための足場かけがどうであるか。特に、到達の困難が予想される生徒に対する効果的な足場掛けの検討。



研究協議の様子 (上・下)



<公開授業>

令和元年 6 月 18 日 (火)

5 限 (授業公開のみ)

令和元年 11 月 19 日 (火)

6・7 限

令和 2 年 1 月 16 日 (木)

6・7 限

11 月には、23 講座と 2 年次閑谷學 (のべ 38 名の教職員)、1 月には 27 講座 (のべ 35 名の教職員) の授業について、全員で参観し、上記の「授業参観の視点①～④」による気づきを付箋に記入し、それをもとに協議を行った。

11月19日(火)[6限]の時間割		教務課		
	6限	本時の目標 (問い)	達成基準 (B基準)	授業 担当者
	14:10~14:55			
1-1	社会と情報 (2FPC教室)	検定に向けて、速度・文書の練習をする。	集中して検定の練習に取り組むことができたか。	立石/森脇
1-2	体育 (体育館)	「バドミントン」相手をゆきふり、ポイントを狙え。	ペアで協力し、ラリーを続けることができたか。	木村
1-3	音楽 (音楽教室)	「ふるさと」の楽譜を作成し、ギターでメロディーとコードを演奏する。	「ふるさと」の楽譜を完成させ、ギターでメロディーが演奏できたか。コード演奏に挑戦できたか。	藤原か
	書道 (書道教室)	完成した漢字仮名交じりの書を、他者に説明したり自己分析する。	自分の言葉で良さなどを説明できたか、他者の意見を聞く姿勢ができたか。	研山
	美術 (美術教室)	自作色紙で、黒の台紙に貼るパーツをつくる。	明度対比、色相対比を使い効果的な配色ができたか。	小川
2-A	数学Ⅱ (121)	三角関数のグラフはどんな形?	$y=\sin \theta$ 、 $y=\cos \theta$ のグラフの形がわかり、書くことができる。	高原
2-B	数学Ⅰ (122)	どんな命題を偽というのか?	命題の真、偽が判定できたか。	岡本
2-C	生物β (生物教室)	バナナやジュースからDNAを抽出する。	実験操作に従ってDNAを抽出することができたか。	下野
2-3	保健 (124)	発表を聞いて、わかったことを自分の知識にする。	発表内容がどれくらい身についているか?まよめのプリントを完成させる	和氣
3-A	コミュニケーション英語Ⅲ (131)	一人ひとりが、他の人に本文内容を分かりやすく説明することができる。	調べた内容を他の人に分かりやすく説明ができたか。板書が適切であるかどうか。	小賀
3-B	数学A (132)	角に関する性質を用いて、星形の1つの角を求めよう。	友人と協力 or 個人で、諦めずに考える姿勢が見られる。	太田悠
3-C	古典B (133)	桐壺は、なぜ病んだの?	本文を正確に現代語訳し、状況を理解できる。	岡
3-3	現代文B (134)	豊太郎はいい奴?	本文の記述を根拠にして主人公に対する自分の意見を持つことができる。	荒金

(イ) 教職員一人ひとりが大学などの専門機関とつながって主体的に授業改善を深めていける教科別ワークショップ

各教科が主体となつて、大学等の専門機関とつながりパフォーマンス課題を含めた単元づくりや授業実践、長期ルーブリックの作成や実践に関して専門的な見地からの指導をうけた。今年度の実施状況は右表のとおりである。

教科別ワークショップ(7. 19現在)					
	教科	形式: A本校でワークショップ B校外で研修	講師(所属)	実施日①	実施日②
1	国語	A	宮本浩治先生(岡山大学)	7月25日(木)	1月15日(水)
2	数学	B	岡崎正和先生(岡山大学)	7月31日(水)	11月14日(木)
3	外国語	A	調子和紀先生(ノートルダム清心)	7月26日(金)	3月18日(水)
4	地歴・公民	B	桑原敏典先生(岡山大学)	8月22日(木)	10月31日(木)
5	理科	A	藤本義博先生(岡山理科大学)	7月10日(水)	
6	保体		2018年度までの全国大会の実践授業について共有	7月9日(火)	
7	家庭	B 高教研家庭部会 家庭科教員研修会	京都大学大学院教育研究科 京都大学教育学部 特任教授 北原 琢也 先生	8月20日	
8	情報	B	全国スクールリーダー育成研修会(京大)	8月18日	
9	芸術	B全日本高等学校書道教育研究会岡山大会	文部科学省教科調査官 豊口和士氏	11月14, 15日	
10	商業	A	松田寿雄先生(岡山商科大学)	10月30日(水)	11月14日(木)
11	福祉	B 高教研家庭部会 家庭科教員研修会	京都大学大学院教育研究科 京都大学教育学部 特任教授 北原 琢也 先生	8月20日	
	数学	岡本	全国スクールリーダー育成研修会(京大)	8月17日	8月18日
	数学	福田裕也	全国スクールリーダー育成研修会(京大)	8月17日	8月18日
	商業	柴谷	全国スクールリーダー育成研修会(京大)	8月18日	
	外国語	松嶋	全国スクールリーダー育成研修会(京大)	8月18日	
	国語	岡	全国スクールリーダー育成研修会(京大)	8月18日	
	国語	長谷川	全国スクールリーダー育成研修会(京大)	8月18日	

## イ 進捗状況

前述した研修を受け、現在までの進捗状況を報告する。

### (ア) パフォーマンス課題

1月末までに、現在、27の実践報告をホームページに掲載できている。昨年度からの変更点として、単元を通して育てたい「7つのチカラ」と「生徒の変容」の記入を試みた。

具体については本校ホームページ (<http://www.wakesizu.okayama-c.ed.jp>) 参照。

### (イ) 「7つのチカラ」とつながる教科の長期ルーブリック

- ・教科のシラバス・年間計画に教科の7つのチカラを入れたものを提示・作成。(5月)
- ・教科の「7つのチカラ」一覧の作成・検討。(6月)
- ・長期ルーブリックの活用イメージを職員会議後の研修で共有。(7月)
- ・作成した「7つのチカラ」とつながる教科の長期ルーブリック案の完成と検討。(8月下旬)
- ・第1回高大接続部会で作成した長期ルーブリック案や教科の7つのチカラについて協議し、修正した。(9～11月)
- ・第2回高大接続部会に「7つのチカラ」とつながる教科の長期ルーブリックとして国語科の案を提示し、意見をもらう。(12月)



・12月の職員会議後の研修で国語科を例に他教科も修正版の作成を依頼。

年度当初の作成した長期ルーブリック（上）と修正版（下）

岡山県立和気開谷高等学校 国語科の「7つのチカラ」と長期ルーブリック（案）			
長期ルーブリックを達成することを通して、教科の「7つのチカラ」を身につけていきます。 ◆【教科の「7つのチカラ」】			
1 自分を理解する力	2 職業とつなぐ力	3 考える力	4 行動する力
将来の自分の人生の歩み方を考えていくに当たり、自分を理解し、自分らしさを確立していくことが大切である。「自分を理解するチカラ」では、積極的に自分の興味・価値観・長所を確認し、将来につなげていく力を育てます。	将来を考えていくためには、様々な職業を具体的に知り、職業を体験し、自分が職業を通して社会とどのように関わるかを考えていくことが大切である。「職業とつなぐチカラ」では、様々な体験から動向観・職業観を育み、職業選択をしていく力を身につけます。	何かに遭遇したときや情報を手に入れたときに深く考え意思決定し実行することは大切である。考えることで問題を解決する方向に導けます。「考えるチカラ」では、論理的思考力や創造する力を身に付けることで意思決定できる力を育てます。	世の中の様々な情報を取り入れるためには、自ら動き、選択し実行していくことが必要である。「行動するチカラ」は、実際に前に一歩踏み出す力を育てます。
自分ができていることとできないことを見極める力。	言語活動を通じて職業理解の基盤となる考え（動向観・職業観）を形成する力や職業に就くために必要な言語に関する能力。	他者の意見の良い点と悪い点を比較しながら見つめ、より良い考えとなるように生産的に付け足せる力。	課題解決に向けて、3「考える力」を意識して実際に行動できる力。
評価	OPPシート	パフォーマンス点・OPPシート	パフォーマンス点・OPPシート
5 コミュニケーション力	6 チームワーク力	7 自立する力	
話す態度や聞く態度を学び、相手の気持ちや理解することは、良い人間関係を形成するのに役立ちます。「コミュニケーション力」では、お互いを理解し良い人間関係を構築する力を育てます。1対1のやりとりだけでなく、少人数での意見交換、多数に自分の考えを伝えることを学びます。	生活や仕事の様々な場面では、チームワークが必要です。「チームワーク力」ではチームにおける様々な役割の意味や態度について理解し、その場に応じて適切な役割や責任を果たそうとする力を身に付けます。また、相手の立場に立って考え互いに支え合い取り組む姿勢を学びます。	社会の激しい変化に対応して生きていくことは大切です。「自立するチカラ」では、よりよい生活や生き方を実現するためにスキルアップをめざします。	
自分の思いや考えを伝える力と、三つの「聞く」「聴く」「訊く」をきちんと使い分けられる力。	グループや集団における活動の中で、6「コミュニケーション力」を意識して行動できる力。	言葉を通して自己や他者、社会とよりよく関わろうとする力。	
評価	パフォーマンス点・OPPシート	パフォーマンス点・OPPシート	パフォーマンス点・OPPシート

◆国語科長期ルーブリック

(注)「達成度2」は全員に身につけて卒業してほしいレベルです。「達成度1」に達しない「達成度0」(表記していない)は、単位の認定ができないレベルです。

観点	達成度1	到達度	達成度3
国語への関心・意欲・態度(学びに向かう力)	言葉にかかわる興味関心を持ち、やる気を持っておおむね課題に取り組めるが、課題の内容によってはあきらめてしまうこともある。	言葉にかかわる興味関心を持ち、課題でわからないことをあきらめずに考えることができる。	言葉に関する興味関心を持ち続け、学んだことを自分の生活に結びつけ、自分の課題として考えていくことができる。
聞く・話す(思考・判断・表現)	相手の話を聞いたり、自分の考えを相手に伝えることができる。	話のポイントや相手の反応を意識して、聞いたり、話したりできる。	互いの立場を尊重して、聞いたり、話したりできる。発表・グループでの協議・討論・対話など、目的や場面に合わせて、話の構成や表現方法を工夫できる。
書く(思考・判断・表現)	自分の考えを書くことができる。	自分の考えをわかりやすくするために、次の三点を、考えることができる。 ①読み手の存在。 ②段落の役割など意識した文章の構成や展開を考える。 ③根拠を挙げる。	目的や場面に合わせて、次の二点を工夫して書くことができる。 ①読み手にふさわしい文の種類や表現方法の選択。 ②論理の展開(納得できる根拠と主張)を考えて文章を構成する。
読む(思考・判断・表現)	書き手が自分に伝えたいことを読み取ることができる。	書き手が自分に伝えたいことを読み取るために次の2点を、考えることができる。 ①文章の中心的な部分を読み取り、要旨をまとめる。 ②場面や登場人物の関係、心情の変化をたどることで主題を考える。 読み取ったことを基に、筆者や語り手の考えを踏まえて、自分のこととして考えている。	文章の種類に合わせて、論理や物議の展開の仕方など考えることができる。 読み取ったことを基に筆者のものの見方や考え方を客観的に評価して考えることができる。 筆者や語り手と対話しながら、人間、社会、自然などについての自分の考えを深めている。
基本的な知識 日常生活に必要な国語常識。 (例)漢字、敬語、文法などに関する知識。	チェックテスト等で習得の程度が25パーセント以上である。日常生活の中で、少しずつ、その知識を生かそうとしている。	チェックテスト等で習得の程度がおおむね50パーセント。かつ、日常生活の中で、その知識を生かすことができている。	チェックテスト等で習得の程度がおおむね80パーセント以上。かつ、日常生活の中で、その知識を積極的に生かすことができ、よりよく生活しようとしている。

国語科長期ルーブリック				国語の7つのチカラ	
観点	達成度1	到達度	達成度3	1	2
国語への関心・意欲・態度(学びに向かう力)				グループや集団における活動の中で、5「コミュニケーション力」を活用して互いに高め合い、互いの思いや考えを伝えるように課題解決、探究する力。	グループや状況にふさわしい言葉の選択と活用能力
「聴」の心を持って、他者と協働する態度	グループや集団活動において、言葉を通して他者とつながって、思いや考えを伝えるとともに、他者の考えにも耳を傾けることができ、課題解決や探究活動に役立てようとしている。	グループや集団活動において、言葉を通して他者とつながり、思いや考えを伝えるとともに、他者の考えを注意深く聞くことができ、問題解決や探究活動のために全体に貢献しようとしている。	グループや集団活動において、言葉を通して他者とつながり、他者を思いやった方法で思いや考えを伝えるとともに、他者の考えを聞いて必要な情報を課題解決や探究活動のために全体に貢献しようとしている。	自分の思いや考えを伝える力と、三つの「聞く」「聴く」「訊く」をきちんと使い分けられる力。	他者の意見の良い点と悪い点を比較しながら解決されるべき課題を見つめ、よりよい解決となるように建設的な意見を付け足すことができる。
聞く・話す(思考・判断・表現)	相手の話を聞いたり、自分の考えを相手に伝えることができる。	話のポイントや相手の反応を意識して、聞いたり、話したりできる。	内容をより深く理解するために的確な質問をすることができ、また、発表・グループでの協議・討論・対話など、目的や場面に合わせて、話の構成や表現方法を工夫できる。 特に課題解決的な場面において、他者の意見の良い点と悪い点を比較しながら解決されるべき課題を見つめ、よりよい解決となるように建設的な意見を付け足すことができる。	言葉を使って自己や世界を変えようとする態度、プレゼンする力	
書く(思考・判断・表現)	自分の考えを書くことができる。	自分の考えをわかりやすくするために、次の3点を取り入れて文章を書くことができる。 ①読み手の存在。 ②文章の構成や展開。 ③根拠。	目的や場面に合わせて、次の3点を取り入れて文章を書くことができる。 ①文章の中心的な部分を読み取り、要旨をまとめる。 ②場面や登場人物の関係、心情の変化をたどることで主題を考える。 さらに、複数の文章を比較して読み取ったことを基に筆者や語り手のものの見方や考え方を客観的に評価して、自分の考えを述べるることができる。	他者の意見の良い点と悪い点を比較しながら解決されるべき課題を見つめ、よりよい解決となるように建設的な考えを紡ぎ立ててまとめる(付け足す)力。	
読む(思考・判断・表現)	書き手が自分に伝えたいことを読み取ることができる。	書き手が自分に伝えたいことを読み取るために次の2点ができる。 ①文章の中心的な部分を読み取り、要旨をまとめる。 ②場面や登場人物の関係、心情の変化をたどることで主題を考える。	書き手が自分に伝えたいことを読み取るために次の2点ができる。 ①文章の中心的な部分を読み取り、要旨をまとめる。 ②場面や登場人物の関係、心情の変化をたどることで主題を考える。 さらに、複数の文章を比較して読み取ったことを基に筆者や語り手のものの見方や考え方を客観的に評価して、自分の考えを述べるることができる。	他者が思いや世界、人生、思想から自らの生き方を考える力	
基本的な知識 日常生活に必要な国語常識。 (例)漢字、敬語、文法などに関する知識	チェックテスト等で習得の程度が25パーセント以上である。	チェックテスト等で習得の程度がおおむね60パーセントである。	チェックテスト等で習得の程度がおおむね80パーセント以上である。		

(注)教科の長期ルーブリックが達成されることで右の7つのチカラも身につけていきます。  
「達成度2」は全員に身につけて卒業してほしいレベルです。「達成度1」に達しない「達成度0」(表記していない)は、単位の認定ができないレベルです。

○7つのチカラと教科の観点を融合  
○目指す生徒像を念頭に

(ウ) 学修ルーブリック

「進路」「学習」「学校生活」「課外活動」の4つの場面において、本校の生徒ととして望ましい姿を示した、「学校生活を振り返ろうルーブリック」(下図)を作成し、学期ごとに自分の成長を自己評価するために活用した。この評価をもとに、生徒はiPadや論語手帳を活用して、7月・12月の三者懇談で学期ごとの自らの成長を語る事ができた。

岡山県立和気開谷高等学校 学校生活を振り返ろうルーブリック		1学期			月	日	( )	実施
		評価基準 (自己評価する際の具体的な判断基準)			自己評価	評価理由		
		A (とてもよい)	B (よい)	C (わるい)				
進路	進路に関する準備	自分の実際に合った目標を考えて記入する。	自分の実際に合った目標を考えて記入する。	やりたいことが見つかっていないので、何もしていない。				
学習	授業 開谷準	授業で示される目標をよく理解し、自分の進路に結び付けて意欲的に取り組むことができる。	学習で示される目標に取り組むことができる。	ただなんとなく授業を受けている。				
	家庭 学習	宿題・課題を着実にこなすのはもちろん、自分の弱点の克服や強みを伸ばすための学習にも取り組んだ。	指示された宿題・課題がだいたいできた。	宿題・課題ができていないことがあった。				
学校生活	学校での生活 態度	「行動憲章」を意識して、自分だけでなく、クラスや学校が良くなるように行動できている。	規則や指示を守った生活が送れ、そつなく行動することができた。	生活習慣が乱れたり、だらしない行動をとったりすることがあった。				
	出席 状況	健康管理に気を付けて、遅刻・欠席・早退もほとんどなく生活できた。	だいたい登校できたが、体調や生活リズムを崩すことがあった。	体調や生活リズムを崩しがちで、遅刻・欠席・早退がしばしばあった。				
	清掃	担当する清掃箇所すみやかに移動し丁寧に掃除できる。	担当する清掃箇所を、掃除することができる。	清掃箇所に行かなかったり、移動が遅かったり、まじめに作業ができなかった。				
	服装や頭髪・化粧	ルールを守ることの意味を理解して、自覚ある行動ができる。	ルールをだいたい守ることができている。	注意されると、ただずことができるが、注意されなければ、ルールを守ることができない。				
課外活動	学校行事・委員会・部同好会	自分自身や集団全体の進歩・成長につながる行動をし、成果を語る事ができる。	自分自身や集団全体のためにおおむね活動できた。	積極的に活動に参加しなかった。				
	ボランティア・社会貢献	積極的に活動に参加し、活動を通して得られた自分の成長を具体的にしっかり語る事ができる。	学校でのボランティア活動等を通して自分の成長を意識することができた。	積極的に活動に参加しなかった。				

年 組・コース 番 名前

(エ) 評価

a 学力向上評価委員会における多面的評価の一つとして実施したMSC評価

今年度は、同委員会に参加する生徒を、各クラスから2名ずつ有志を募り、その生徒が評価活動の中心を担った。MSCとは、「最も(Most)」「よくあらわれた(Significant)」「変化(Change)」の略で、学習の当事者である生徒が評価する場の一つとして、2学期に、授業における「一番重要な変化」について全生徒を対象に調査した。クラスごとに集計した結果を持ち寄り、12/20に、学年ごとに8名の代表生徒によってMSC評価を実施した。手順は、まず、選考基準を決め、次に、その基準に照らして、クラスが一番重要な変化を選考し、12/24の全校集会で、発表した。

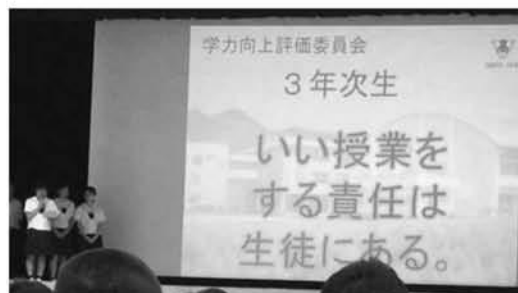
1年次	基準	意見交換ができ学びが深まる。
	結果	現代文のグループワークをする場面。
2年次	基準	より意欲的に授業を受ける。
	結果	該当する授業なし。



3年次	基準	いい授業にする責任は生徒にある。
	結果	コミュニケーション英語の生徒が授業をする場面。

「該当する授業はない」と報告した2年次では、生徒に対しては、「ただ授業を受けるだけでなく、先生が設定した目標も達成できるように授業を受ける」ことを呼びかけたうえで、授業の進度など、授業に対する生徒の要望について、教師と生徒とがコミュニケーションがとれる環境にしていくことの必要性を訴えた。

MSC評価を実施して見えてきた成果は、生徒と教師がともに授業をつくっていくスタイルが一層深まり、授業や学校をよくしようとする生徒が増えてきたことである。課題は、今後ますます、「学習に取り組む環境づくり」をすすめていく必要があることだ。生徒と教職員とのコミュニケーションをよりよくして、一層両者がともに目指す授業をつくっていくかなければならない。



#### b 学校評価アンケート

毎年2学期に実施する「学校評価アンケート」の授業にかかわる教職員質問項目「授業内容の充実、改善に努めており、成果が感じられる。」に対して「よくあてはまる」「ややあてはまる」と肯定的に回答した教職員の割合は、82・9% (H29) → 82.3% (H30) → 90.5% (R1) であった。また、生徒質問項目「各授業内容は工夫されてわかりやすく学力向上に役立っている」に対して肯定的に回答した生徒の割合は、75.2% (H29) → 69.6% (H30) → 75.9% (R1) と微増している。

このことから、主体的な学習者の育成に向けて学習指導を充実させていく仕組みが整い、その成果も表れつつあることが、教職員・生徒両者の評価から、見て取れる。

#### ウ 成果と課題

成果は、パフォーマンス課題・長期ループリックについても、一定の前進があった点である。また、生徒と教師がともに学び合う学校風土が形成されつつあることである。

課題は、教科横断的な課題の研究については本校の総合的な探究の時間である「閑谷學」における生徒が探究を進めていくにあたって、複数教科の教員から指導を受けた生徒事例がいくらかは見られるが、意図的・計画的な実践までには至っていないことだ。また、長期ループリックについても、本校が育てたい生徒像がより具体化できる、本校独自の長期ループリックの作成を目指すこと、あわせて、作成したループリックをどう活用していくかについても、今後さらに工夫していかなければならない。



## (2) デュアルシステムカリキュラム

本校では令和3年度入学生より、普通科（協働探究系）に学校設定科目「地域協働探究 $\alpha \cdot \beta$ 」を開設し、2年次生で週4単位、3年次生で週6単位選択履修させる予定でカリキュラム案を検討中だ。学校での座学と企業での実習を組み合わせる新教育システムである「和気高版デュアルシステム」を導入することが決まっている。この科目を選択した生徒は、年間を通して市町や商工会の協力を得て地元の企業や団体でインターンシップを行う予定だ。インターン先は、生徒の進路希望先に応じて、介護施設や保育所、製造業、農家、市町役場など多岐にわたることを考えている。

以下、現在行っているインターンシップ等のデュアルシステムに類似した取り組みについての説明、および本校で実施予定のデュアルシステムカリキュラム案について記す。

### ア インターンシップ

平成24年度より、毎年夏に3日間のインターンシップを行っている。対象生徒は2年次生の就職希望者（例年約40名）で、自宅から通勤できるもしくは一度学校に通学してから出社できる製造業、サービス業などに従事し、同時に従業員へのインタビュー等を行うことで働くことや地域の産業について考察している。

また、インターンシップの前後には事前・事後指導を行い、受け入れ事業所に電話でコンタクトを取る、日誌を記入する、礼状を書き送付するといった経験を通して社会人としてのマナーも学んでいる。

#### 【インターンシップ受け入れ先事業所一覧（令和元年度）】

	事業所名	事業内容	住所（市町）
1	株式会社山陽マルナカ 山陽店	販売	赤磐市
2	みのる産業 株式会社	製造	赤磐市
3	富士鋼業 株式会社	製造	赤磐市
4	淵本重工業 株式会社	製造	赤磐市
5	株式会社 NTN 赤磐製作所	製造	赤磐市
6	春の家デイサービスセンター	福祉	赤磐市
7	有限会社 三井商会	建材、エクステリア	備前市
8	コーワソ 株式会社	総合物流	備前市
9	特別養護老人ホーム 悠の里	福祉	備前市
10	日本ゴア 株式会社	製造	備前市
11	株式会社 徳永こいのぼり	製造	和気町
12	カモミール	整体、薬膳料理	和気町

13	恒次工業 株式会社	製造	和気町
14	株式会社 山博	切り花加工	和気町
15	有限会社 ビッグモリーズ	販売	和気町
16	谷尾食糧工業 株式会社	製造	和気町
17	株式会社岡山和気ヤクルト工場	製造	和気町
18	株式会社 メイト	部品製造	和気町
19	和気町役場	事務、保育、宿泊施設など	和気町
20	介護老人保健施設アルテピアせと	福祉	岡山市東区
21	カナミヤ食品株式会社岡山事業所	製造	岡山市東区
22	日宝綜合製本 株式会社	製本、デジタル印刷出版など	岡山市中区
23	株式会社山陽マルナカ 高屋店	販売	岡山市中区

今年度は 23 社に 40 名の生徒を受け入れていただいた。

【インターンシップ時の様子】



作成済のデザインを検討中！



製図作業中



クレーン車に乗車しました



集中して慎重に！



倉庫から陳列棚へ移動



花木を移動して水やり

## イ 就業体験実習プログラム

デュアルシステムカリキュラムの導入に先立ち、今年度（令和元年度）より、就業体験実習プログラムを実施している。このプログラムでは、Ⅰ期（夏季休業中）、Ⅱ期（2月特別入試の家庭学習日中）、Ⅲ期（3月一般入試の家庭学習日中）の計3回、各5日間（計15日間）にわたって実習を行った。対象生徒は前述したインターンシップと同じ2年次生の就職希望者である。3日間のインターンシップでは、地域にどのような企業があり、働くとはどういうことかを“発見する”ことが目的であるのに対し、この就労体験実習プログラムでは、就業する上で実際の業務に求められる資質・能力に対する“理解を深める”ことを目的としているため、就職に対してより明確なイメージを持っている生徒がこちらのプログラムを選択する。

### 【就業体験実習プログラム受け入れ可能企業一覧（令和元年度）】

	事業所名	事業内容	住所（市町）
1	有限会社 山本製菓	製造	赤磐市
2	株式会社 前田園	造園	赤磐市
3	富士鋼業 株式会社	製造	赤磐市
4	コーワン 株式会社	総合物流	備前市
5	Curry&Café Shibabe	飲食	備前市
6	有限会社 三井商会	建材、エクステリア	備前市
7	備前市役所	公務	備前市
8	株式会社クラレ鶴海事業所	製造	備前市
9	黒崎播磨セラコーポ備前製造所	製造	備前市
10	一般社団法人 まなびと	教育	和気町
11	岡山技研工業株式会社	製造	和気町



12	株式会社 横谷工務店	工務	和気町
13	株式会社 Future Dimension Institute	ドローン	和気町
14	株式会社 徳永こいのぼり	製造	和気町

#### (ア) 体験後の生徒の感想

- ・真夏の炎天下での作業は大変疲れました。
- ・工場内の暑さは相当厳しかったが、日がたつにつれて自分の作業スピードが早くなっていくのを感じうれしくなりました。
- ・最終日に社長から夕食をご馳走になり感激しました。
- ・仕事で疲れた後、自転車で自宅まで帰るのが大変でした。
- ・毎日違うまかない食がいただけでうれしかったです。
- ・熟練した作業員の方のスピードには驚きました。

#### (イ) 体験後の受け入れ先企業の感想

- ・暑い中、大変きつい仕事内容だと思ったが、日頃から部活動で鍛えているため最後まで頑張り感心しました。
- ・接客上のマナー、礼儀もわきまえて対応ができていました。見ていて大変気持ちよかったです。
- ・作業現場に蜂の巣があり危険な目に遭わせて申し訳なかったです。
- ・Ⅱ期、Ⅲ期も積極的に受け入れをします。

#### 【インターンシップ・就業体験実習プログラム受け入れ先事業所事後アンケートより】

- ・会社として大変よい刺激をいただいている。会社のことを知ってもらえることも大きい。
- ・受け入れにかかわる社員の一体感や指導の仕方の反省、そして達成感が得られることは社員教育に良い。
- ・実際に作業体験していただくことで、入社後のミスマッチ防止につながると思う。
- ・当社に対する意見をいただけることで企業としての活動改善の参考になる。

#### ウ デュアルシステムカリキュラム案

上記の取り組みを土台として、令和3年度の導入に向けたデュアルシステムカリキュラム案を作成している。

##### (ア) 長期インターンで人材育成を図る

「地域協働探究 $\alpha \cdot \beta$ 」では、毎週特定日の1～6限つまり1日中インターンを行うことも考えられる。活動時間は各事業所の就業時間に合わせるため、生徒の活動時

間は様々になることが予想される。当該科目は学校設定教科・科目であり他の科目と同様に5段階評価を行う。3日間のインターンではどうしても生徒の受動的な活動になりがちだ。そのためできる限り一つの事業所が受け入れる人数を1人にすることを考えている。業務内容も毎週1日、1日中働くとなるとおのずから仕事の種類や量が増え、難易度も上がることを考えられる。そのため将来自分が就こうとしている職業を多面的に知ることになると思われる。結果として生徒の覚悟が決まるという好循環が期待できる。生徒はこの実践を通して普段の学校での教科、科目では知ることができないことを日々学ぶことが可能となる。例えば、スーパーマーケットでは食品の衛生管理を目の当たりにしたり、市町の役場では「守秘義務」があることを知ったりすることになる。また、生徒は毎日、実習日誌に記録を残す。その日誌には事業所の担当者がひと言記入する欄もある。厳しいコメントが記入されることがあればまた逆に生徒を褒めることが記入されることもあるだろう。それにより相乗効果が期待できる。

また、この実践計画は既存の体験実習との棲み分けを考えつつ進めていくことも大切だと思われる。

#### (イ) 進路選択の一助とする

「地域協働探究 $\alpha \cdot \beta$ 」最後の授業では、生徒がインターンシップで学んだことを、受け入れ先の事業所や保護者の前でプレゼンテーションをして締めくくることが考えられている。発表方法は生徒ひとり一人が体育館のステージ上に上がり発表する、または、体育館内でのポスターセッションの方法をとることも考えられる。

生徒は授業を通して学んだことを一定の文字数内でレポートとしてまとめたり、写真やイラストなどを添えて分かりやすくインターンシップの成果をまとめたパネルを用意したりすることも考えられる。

将来、インターン先に就職するケースも出てくることが予想される。また、直接インターン先の事業所に就職せずとも市町の内外で同じ職種の仕事に就く生徒もでてくる可能性もある。最終的に地元の市町に戻って活躍、貢献してくれる生徒がひとりでも多く出てきてくれれば幸いだ。



地元の仕事、  
もっと知りたい！

働く私の将来が  
みえるかな？

この仕事、  
次の世代に伝えたい！

本実習では、生徒が仕事内容を体験するとともに、就職した場合、自分がその職場でどのように成長できるかを体験することで、地元企業等への就職率向上につなげたいと考えています。

## 県立和気閑谷高等学校 就業体験実習 受入企業等を募集します！

### 令和元年度 就労体験実習の概要

- Ⅰ期【令和元年7月22日～8月28日】
- Ⅱ期【令和2年2月10日～2月18日】
- Ⅲ期【令和2年3月9日～3月18日】

※期間内で連続5日間以上の受入をお願いします。

本実習の詳細は、右担当までお問合せください。

#### 【本件担当】

岡山県立和気閑谷高等学校  
魅力化推進協議会  
産学官連携担当  
教諭 赤島 真一

☎0869-93-1188

### 受入連絡票

受入企業等の名称 \_\_\_\_\_

所在地 \_\_\_\_\_

担当ご芳名 \_\_\_\_\_

電話番号 \_\_\_\_\_

FAX \_\_\_\_\_

その他 \_\_\_\_\_

実習の時期	可否	受入可能人数
Ⅰ期【7月22日(月) ～8月28日(木)】		
Ⅱ期【2月10日(月) ～2月18日(火)】		
Ⅲ期【3月9日(月) ～3月18日(木)】		

FAX送付先：岡山県立和気閑谷高等学校内

魅力化推進協議会 産学官連携部会 担当 教諭 赤島真一

FAX番号：0869-93-1010

電話番号：0869-93-1188

\* 各期実習期間は、別紙要領第3条のとおり、5日間以上です。ただしⅠ期のお盆期間は除きます。



### 3 【閑谷學】

#### (1) 概要

閑谷學は本校において平成 22 年度から実践してきた「総合的な学習（探究）の時間」の名称であり、「閑谷学校」の学びの精神を引き継ぎ、地域との関わりを重視しながら、自ら学び、自ら考える姿勢と、問題解決していく力を身につけることを目標とする。今年度は、自らの進路実現にかかわる能力として、7つのチカラの育成に基づいた「情報活用能力」、「問題発見・解決力」、「表現力」を重視した。

各年次の目標は以下のとおりである。

1 年 次	大目標	自己と学問とのつながりを調査し考察する。
	目標	探究学習を行うために有効な探究の学び方(発想法、調査法)、プレゼン手法、チームワークを学ぶ。グループ活動を通して、自他への想像力、学校や地域と自己の強いつながりを感じとれる。
2 年 次	大目標	自己と社会(世界)とのつながりを体験・調査し、考察する。
	目標	テーマに対する探究学習の目的、計画を教員とともに立案し、体験/探究できる。学校内外の体験/探究学習を通して、社会の諸問題と自己及び自己の進路とのつながりを感じとれる。
3 年 次	大目標	自己と社会/これからの世の中とのつながりを調査し、提案する。
	目標	らの進路やつくりたい未来を構想し実現するために探究活動を行い個人論文にまとめることができる。

3年間を見通した計画は以下のとおりである。

	1年次 学問	2年次 世界	3年次 これからの世の中
1学期	学校への適応 仲間づくり	閑谷研修(進路学習) <b>探究学習</b> イントロダクション SDGs・地域課題理解、テーマ決定 ＜就職希望者＞インターンシップ準備	<b>卒業個人研究</b> イントロダクション テーマ決め作文 分野別探究 ※自己理解・社会理解 ※発表機会・内省機会
	<b>探究基礎編</b> イントロダクション 探究手法の習得1[発想法、インタビュー手法、アンケート手法] 地域課題理解	<b>中間報告</b>	
夏休み	ゼミ分け作文	リサーチ、＜就職希望者＞インターンシップ	(就職補講等)
2学期	楷楓祭		
	テーマ決定 探究手法の習得2[文献調査の方法、プレゼン手法(keynote、ポスター)] ゼミ内発表	<b>修学旅行探究</b> ＜韓国＞姉妹校訪問 ＜関東＞企業・大学訪問 <b>修学旅行報告会</b>	分野別探究 調査・分析・実践 論文集作成 発表準備、リハーサル
	<b>中間報告</b>	<b>探究学習</b> 調査・分析・実践	
3学期	発表準備、リハーサル	発表準備、リハーサル	<b>卒業探究発表会</b> <b>社会人になる準備</b> 年金、着こなし講座 など ふりかえり
	<b>探究学習発表会</b>		
	ふりかえり	ふりかえり	

令和元年度「閑谷學」テーマ一覧

1年次

1学期に学んだ探究手法を活用して10月から身近な和気町をフィールドにグループ探究

	テーマ	担当	生徒数	グループ数	内 容
1	観光	原田・福田ゆ	24	6	外国人向けのモデルコース、インスタ映えスポットなど
2	空き家・移住者	福田こ・岸田	24	6	空き家の活用方法、古民家の国際比較など
3	人口・少子化・婚活	鈴木・真野	25	5	まちの魅力発信、ミニ運動会で交流など
4	商店街	立石・太田ゆ	23	5	ロードアート、お化け屋敷、商品開発など
5	環境・防災	八幡・大山	24	6	(環境・農業)ビオトープで棚田再生、(防災)外国人の避難など

120

2年次

1学期と2学期後半で2市1町をフィールドにSDGsを意識したグループ探究

	テーマ	担当	生徒数	グループ数	内 容
1	Think Globally, Act Locally	西田・浮田	23	5	姉妹校との交流、大國家の現状を伝える、SNSで企業PRなど
2	まち活性化	高原・長谷川	22	5	定期イベントの開催、アルバイトの許可など
3	人口問題解決・理想の結婚式	大森・岡本	20	6	電子パンフレット作成、魅力的な結婚式など
4	環境問題・社会問題	藤澤・石井	17	4	家事の負担、金剛川の水質調査、ビオトープなど
5	スポーツ・交流	木村・岡の	25	7	小学生とのスポーツ交流、中学校での論語出前講座など

107

3年次

これまでの探究活動を生かして進路につなげる個人探究と2000字のレポート作成

	テーマ	担当	生徒数	内 容
1	幸せ	森脇・太田悠	23	・妊婦さんが安心してお産に臨むようにするには ・言語聴覚士の探求から「障がい」に対する考え方と知的障がい者の接し方を考える など
2	Culture	下垣・松嶋	22	・歴史を地域活性化に活かすには ・すべての子どもたちに質の高い教育を など
3	いろいろ	赤畠・和氣	23	・ストレスと向き合えるようになるには ・寄り添った看護をするために など
4	Life is worth living	小賀・柴谷	23	・専門店のコーティングとディーラーのコーティングの違い ・めざすべき郵便局員とは など
5	自分探求	下野・荒金	23	・化粧品パッケージから学ぶ～人を魅了するデザインとは～ ・自分がどうふるまえば仕事先でよい人間関係を築くことができるのか など

114

## (2) 1年次閑谷學

### ア 目標

大目標 自己と学問とのつながりを調査し考察する

目標 ・探究学習を行うために有効な探究の学び方（発想法、調査法）、プレゼン手法、チームワークを学ぶ。

・グループ活動を通して、自他への想像力、学校や地域と自己の強いつながりを感じとれる。

### イ 内容

(ア) 1学期：学校への適応、仲間づくり

4/11 本校の源流を学ぶ（講師：和気町社会教育課 森元純一氏）

4/18～4/19 集団宿泊研修「閑谷合宿」（岡山県青少年教育センター閑谷学校）

目的：・集団活動を通して、お互いの立場や役割を理解しながら秩序ある行動のとれる協調的な姿勢を身につける。

・高校での基本的な生活習慣・学習習慣の確立をめざす。

・友人・先生との相互理解を深め、和気閑谷高校の生徒としての連帯意識を高める。

・旧閑谷学校の伝統と歴史を学び、その精神を受け継ぐことにより豊かな心を養う。

日程： 1日目（4/18）

時間	活動内容
8:40	集合点呼
8:50	学校出発
9:20	閑谷学校到着 入所式 ①学校代表挨拶 ②センター所長挨拶 ③生徒代表挨拶 ④オリエンテーション
10:10	史跡見学・写真撮影
10:35	講堂学習
12:00	昼食 各宿泊室へ移動 研修上の諸注意
14:00	道徳教育ワークショップ「仲間づくり」、終了後OPPシートへ記入
17:00	入浴 夕食
19:00	校歌熱唱大会の練習
20:30	校歌熱唱大会（クラスごとに発表）
21:45	室長会（就寝準備・健康チェック表配布）
22:30	消灯・就寝

2日目（4/19）

6:00	起床（洗面・寝具の整理・健康チェック）
6:40	朝のつどい（ラジオ体操・本日の抱負を語る）
7:20	清掃・退室準備
7:45	朝食
9:00	大縄跳び大会の練習
10:30	大縄跳び大会（各クラスで競争）
12:15	昼食
13:00	進路講演会「進路実現をめざして」
13:45	研修のふりかえり・総括
14:30	プレイホールの復元、清掃
14:45	退所式 ①学校代表挨拶 ②センター所長挨拶 ③生徒代表挨拶 ④諸連絡
15:00	閑谷学校出発
15:30	到着・解散

### 【生徒の感想】

- ・最初は明るく楽しいクラスのようなだったが、研修が終わるころには、協力したり助け合ったりできるクラスになっていったと思います。
- ・閑谷合宿で色々な人と関わり緊張もほぐれ、楽しいクラスになりました。行事などに協力的になった。元気が出ればクラスが盛り上がり良いものになりそうです。
- ・最初は全然まとまりがありませんでした。しかし、今回の研修を終えて色々な行事でたくさんの友達と話をしたり、行動したりすることができました。そしてまとまりのあるクラスになることができたと思います。



## 5/17 探究イントロダクション（武道場）

### ・閑谷學の目標

本校の源である閑谷学校では、武士、庶民、他藩の子弟など多様な人々が集まって学び合い、地域の発展のために力を尽くせる人を育てる学校でした。その精神を引き継ぐのが、私たちがこれから学んでいく閑谷學です。具体的には、チームで話し合いながら地域の課題を解決する提案を行うだけでなく自分たち自らで行動する。地域の問題が世界とどう繋がっているのかや、自分が将来どのように社会に参加していくのかを考える、体験する、調査する、議論をする、言葉にして伝えるといった諸活動を通して、自分と社会の未来を創っていく力をつけて行くものなのです。

### ・3年間の流れの説明

#### ・1年次の閑谷學の内容：「7つのチカラ」を身につける

- ①自分を理解する力
- ②職業とつなぐ力
- ③考える力
- ④ 行動する力
- ⑤コミュニケーション力
- ⑥チームワーク力
- ⑦自立する力

## 5/31 探究手法基礎編第1回「発想法」（岡山商科大学経営学部教授 三好宏先生）

テーマ：「千客万来」“新たなお客様をひきつける方法をみんなで発想しよう！！”

内容：発想法とは「地域で起きている実際の問題について、調べ、考えるという学習をしていき、そこで手助けになる力⇒問題解決のための力を身につけてもらう。よりよい学習ができるようになるためには、何が必要か。

### 1. 問題から課題へ

問題＝現実と目標（理想）とのギャップ⇒問題を認識する必要

課題＝そのギャップを埋めるために取り組むこと⇒課題をうまく設定する

### 2. 問いを立てる練習

グループで「ブレインストーミング」をやってみる。

### 3. まとめ：具体的な発想法のテクニックよりも、もっと大切な問いを立てるということを考えてもらった。なんとなくの答えをいきなり考えて、あるいはネットを調べて「はい、答えがありました」ではなく、「答えに向かっていく問いのつながり＝問いの連鎖」を意識してほしい。

## 6/14 探究手法基礎編第2回「アンケート手法」（岡山商科大学経営学部教授 三好宏先生）

### 1. なぜ調査をするのか

主観、思い込み、勝手な想像では、だれも信用しないし、うまくいかない。

「問題の解決策＝課題を克服するためのデータを集める」

### 2. 調査の種類

調査のタイプ ①定量調査 ②定性調査  
調査データの種類 ①1次データ ②2次データ  
調査の目的 ①探索的調査 ②記述的調査 ③因果関係調査

### 3. アンケート調査の特徴

《良い点》①同一の質問を、多数の回答者に、同時に尋ねることができる。  
②回答者は無記名で回答できるため、本音を聞き出しやすい。  
③得られたデータを、統計的に分析できる。

《悪い点》①臨機応変の対応はできない。  
②予想外の回答は得られにくい。  
③通常は、1回すれば終わる。

### 4. アンケート作成のポイント

- ①調査の目的をしっかりとる。
- ②自分なりの答え=仮説を聞くようにする。
- ③多く質問はしない。
- ④回答しやすくするため、選択肢を用意する。
- ⑤なるべく、「はい・いいえ」ではなく、程度を聞く。
- ⑥質問の順番を考える。
- ⑦回答者の属性（どんな人か）を聞く質問を入れる
- ⑧最初に、アンケートの目的、データの使い方、回答期限、調査者のことなどを明記する。
- ⑨質問用紙のデザインを検討する。

### 5. まとめ：実際にアンケートを作ってみよう。「コンビニエンスストアに関する調査⇒最低1つの質問と回答の選択肢をつくる」

6/28 探究手法基礎編第3回「インタビュー手法」(岡山商科大学経営学部教授 三好宏先生)

#### 1. インタビュー調査とは

質問者と回答者が1対1、ないしは1対多数で、ある特定のテーマに基づく質問に対して答えてもらうタイプの調査。ヒアリング調査、面接調査ともいう。

#### 2. インタビュー調査の特徴

《良い点》①1人、少数の人にじっくり深く聞ける。  
②相手の状況を見ながら、臨機応変に対応できる。  
③予想外の回答が得られることもある。

《悪い点》①面接に時間がかかる  
②本音が聞きだしにくい。  
③サンプル数（実際するインタビュー）が少ない。  
④質問者はテクニック（知識と経験）が必要。

### 3. インタビュー調査の進め方

- ①インタビュー手法の決定
- ②質問内容の決定・準備 ⇒ インタビュー実施
- ③結果の解釈とディスカッション

### 4. まとめ：いきなり本番ではなく、事前によく練習をしておくこと。

≪練習≫実際に、質問者と回答者に分かれて、コンビニエンスストアに関するインタビューを試してみる。

## 7/9 地域課題理解「和気町の課題」（和気町役場まち経営課 日笠将吾氏）

1年次の「閑谷學」では和気町について調査研究を中心にすすめる。和気町で問題になっていることなどを聞き、高校生のアイデアをいかせないかと考え、「和気町の課題について～身の回りの小さな困りごと～」という内容で講演をしていただいた。日笠氏の話聞き、探究したいと思うことについての作文を書いた。作文の内容によって5つのテーマに分け、大きなグループ（ゼミ）をつくった。

講演内容：①和気町ってどんなところ？

概要・暮らし・観光・特産

#### ②和気町の課題の背景（人口減少）

人口減少対策

- ・和気町の優位性を活かしたまちづくりを推進する
- ・若い世代の結婚、出産、子育ての希望をかなえる
- ・和気町への新しい人の流れをつくる
- ・和気町内で安定して暮らせるための雇用を創出する
- ・移住、定住促進のための取組

#### ③和気町の課題（まとめ）

- ・人口減少に起因する課題
- ・人口減少対策から見えてきた課題
- ・それ以外の課題

## (イ) 2学期：作文内容により5つのゼミに分かれて探究活動

①観光 ②人口・少子化・婚活 ③空き家・移住者 ④商店街 ⑤環境・防災

テーマの決定：興味のあることを挙げる→テーマを絞る→仮説を立てる→体験する

ゼミ内を4～5人のグループに分け、グループごとに「知りたいこと」「こうなったらいいな」などを挙げながら、それをどうやって調べ、どうしたらできるのか、探究手法のどれを使うことが望ましいかを話し合った。フィールドワークも行いながら、グループ内でどうやって解決していくかを考え、仮説を立て、探究のテーマを決定した。



## 10/18 探究のテーマを考えるためのフィールドワーク

実際の現場を知るために校外に出向き、見学や聞き取り調査を行い、テーマ決定の手がかりにした。

### a フィールドワークの状況

#### 【環境・防災ゼミ】

全国の地域が抱える問題に和気町がどのように取り組み、新たにどんな課題を抱えているかを知るために和気町役場を訪問し、担当者に話を伺った。その後、さらに国際交流協会や和気町役場、津瀬地区の住民等に話を伺い調査を進めた。

#### ①交通…地域の足をどう確保するか？

- ・利用者が減ったことから、デマンド交通「和気あいあいタクシー」を廃止し、スクールバスの空きを利用して町営バス 13 路線を運用しているが、バス停まで遠いという不便さもある。
- ・買い物にいけない高齢者対策に巡回販売をしているが、それをやめてドローンを活用して僻地への生活物資の輸送をしようとしている。話を伺いメリット・デメリットを考え、津瀬地区の住民にも話を伺い、課題への提案を考えるきっかけになった。

#### ②防災…僻地のお年寄りや外国人の避難をどうするのか？

- ・お年寄りには要支援の体制づくりをしている。避難所が遠い問題や避難所開設に役場の人 2 人体制では大変なので、自主防災団づくりを行っているが地域で温度差があるなどの課題がみえた。どうやったら自主防災団づくりが活発になるかを検討する。
- ・外国人の避難については、和気町にも外国人が 260 名在住していて、ハザードマップの多言語化を検討しているが、取り組みは進んでないという。その後、国際交流協会に電話をし、外国人の内訳を聞き、避難するための多言語化に何が必要か検討する。

#### ③そのほか、耕作放棄地や鳥獣被害などの農業や環境に関わる問題について話を伺い。探究学習のテーマと課題を見つける。

#### 【人口・少子化・婚活ゼミ】

「町の人とくらしのありよう」を知る契機とするために、和気駅前にあるエンターワークで、和気に暮らす方々との対話を行った。多様な世代の方（10 名）との対話は、大いに生徒の視野を広げることができたように思う。



### 【空き家・移住ゼミ】

県外から移住し、和気町の古民家に家族4人で住んでいる梅村竜矢氏（カリキュラム開発等専門家）邸へ伺い、見学させていただいた。家の中でグループワークをする。

テーマ1『自分の家にあって、この家にはないものは?』

『自分の家にはないけど、この家にあるものは?』

班ごとで話し合い、発表をする。梅村氏と対話を深め、古民家活用法や登録有形文化財等に関して1級建築士の有正氏から説明をいただく。

テーマ2『納屋の利用法を提案しよう』

ほとんど手つかずの納屋を見学させていただき、そのスペースの利用法について班で討議し、発表を行う。

### 【商店街ゼミ】

商店街の現状を把握するために和気駅付近の探索を行った。普段通学路で通っている道でも、ゆっくり見て回ると新たな発見があって、これからどのような問題に取り組んだらいいのかを考えることができた。また、株式会社徳永こいのぼりに訪問したグループもあり、企画を考える上で大切なことを教えていただき、鯉のぼりをモチーフとした商品などを考えるときの参考になった。

### 【観光ゼミ】（10/18は校内でフィールドワークの準備）

11/7 「パンフレットボックスのポップの作成」

グループが和気駅と和気町観光協会のパンフレット置き場の観察を行った。

11/15 「和気町のインスタ映えスポットの紹介、

「外国人にもわかりやすい観光モデルコース作り」の2グループが、和気町の愛宕山に登り、登山ルートの確認・写真撮影を行った。



11/22 「外国人向けの神社のお参りと手の洗い方を解説

する動画作成」が和気神社に行き、神社での参拝の方法を動画撮影した。また、「外国人向けのグルメパンフレット作成」グループが和気町内の飲食店に行き、店長への取材を行った。

11/29 「和気町の良さをアピールしたポスター作り」グループ

が和気神社を訪問、神社職員に建築で使われた木の特徴や神社の歴史について話を聞いた。

各ゼミのグループのテーマ

①観光ゼミ	
1班	外国人にもわかりやすい観光モデルコース作り（インターネット、パンフでの発信）
2班	外国人の人向けの神社のお参りと手の洗い方を解説する動画作成
3班	外国人向けのグルメパンフレット作成（外国人観光客への対応）
4班	パンフレットボックスのポップの作成（目にとまる・パンフレットを手にとってもらうため）
5班	和気町のインスタ映えスポットの紹介（スポットを自分たちで発信する）
6班	和気町の良さをアピールしたポスター作り（県外・県内向け）

②人口・少子化・婚活ゼミ テーマ	
1班	和気町の全ての人が住みやすい町になるために
2班	和気の良いところを発信しよう！
3班	和気町体育館で和気高主催のミニ運動会を開き、人々の交流を増やす。
4班	人口の減少を防ぎ、いろんな所から人を呼びかけて来てもらう（住んでもらう）
5班	少子高齢化の改善のために

③空き家・移住ゼミ	
1班	古民家の魅力と和気町のくらしについて（登録有形文化財について）
2班	古民家や田舎の素晴らしさについて
3班	空き家の使い道（古民家カフェ）
4班	空き家対策の実態
5班	空き家にファーストフード店を作る
6班	日本と韓国の古民家の違い

④商店街ゼミ	
1班	R o a d a r t
2班	空き家を使ったお化け屋敷
3班	恋クロアイス
4班	和気町の魅力がつまったアイスをつくろう！
5班	子どもたちの鯉のぼりをかざろう

⑤環境・防災ゼミ テーマ	
1班	環境・農業・・・ビオトープで棚田の再生
2班	環境・農業・・・鳥獣被害から農地を守ろう



3班	防災・・・外国人の避難をどうするか
4班	防災・・・自主防災組織をつくろう
5班	交通・・・地域の足をどう確保するか
6班	農業・・・商品開発で和気の農業を守ろう

#### テーマ決定後の流れ

10/25 調査、探究プラン立て

11/2 探究準備

11/8 探究プラン発表

11/15 探究（必要によってフィールドワーク）

11/22 探究（必要によってフィールドワーク）

11/29 探究（必要によってフィールドワーク）

12/10 探究

12/13 発表準備（iPadで資料作成）

12/18 発表準備

12/19 「卒業探究発表会」

12/20 発表準備

1/10 発表準備

1/24 発表準備

1/31 探究学習発表リハーサル

2/1 「探究学習発表会」



5/7	説明者	備前市役所市長公室企画課長	岩崎 和久 様
		赤磐市総合政策部政策推進課主査	直原 真弓 様
		和気町総務部まち経営課地域戦略係係長	日笠 将吾 様
		和気町教育委員会社会教育課主幹	森元 純一 様
5/14	説明者	備前市教育委員会教育部文化振興課	杉山 麻里 様
		備前市教育委員会教育部社会教育課長代理	岡武 俊樹 様
		和気商工会支援課長補佐	出射 弘貴 様
		和気金融協議会長（中国銀行和気支店長）	青木 信浩 様



5/17 SDG s と地域課題の理解⑤「テーマを決める」、ゼミ分け作文

（講師：カリキュラム開発等専門家 江森真矢子氏）

生徒の取り組みテーマの決め方：SDG s や地域の目指す未来の姿や、目指す未来のために乗り越えるべき壁（課題）などをヒントに、自分の取り組みたいテーマを決める。



マインドマップで考えを膨らませる



自分の取り組みたいテーマについて考え、作文を書き、ゼミを決定した。

5/28 ゼミでの探究活動スタート、作文発表、グループ分け、グループのテーマ決め

作文の発表





7/9 中間報告会 10:50~12:40

5つのゼミの中で2~6人のチームに分かれ、地域の課題と関係する探究学習を行っている。その中間報告としてグループごとに仮説と調査計画の発表をする。

指導者の視点：①仮説や調査計画の妥当性

②調査時に参照すべき学問分野、研究者、先行研究の情報提供

サポーターの役割：①チームの相談に乗る、アドバイスを

②地域内のリソース（人、事、企業など）、実践の場などの情報提供

【人口問題解決・理想の結婚式ゼミ】

指導者：岡山商科大学経営学部商学科准教授 大石貴之先生

サポーター：和気町地域おこし協力隊 杉本宗一氏

【社会問題系ゼミ】

指導者：岡山県自然保護センター主幹 阪田睦子氏

サポーター：和気中学校講師/木工作家（現カリキュラム開発等専門家） 梅村竜矢氏

【まち活性化ゼミ】

指導者：山陽学園大学地域マネジメント学部講師 建井順子先生

サポーター：和気町地域おこし協力隊 平井麻早美氏

【交流、まち活性化ゼミ】

指導者：岡山大学全学教育・学生支援機構准教授 中山芳一先生

サポーター：和気町地域おこし協力隊 吉岡香織氏

【Think Globally, Act Locally ゼミ】

指導者：岡山大学地域総合研究センター実践型教育プランナー 吉川幸先生

サポーター：和気町地域おこし協力隊 久保田暁子氏



<アドバイザー & サポーターからの講評>

- ・大石貴之先生(岡山商科大学): 仮説の前に、目的の立て方からしっかりやったらどうか。例えば、結婚テーマのグループの目的は少子化の解消。だが、少子化の原因を結婚式(をするのが大変だから)に置いていた。少子化対策であれば、他の道筋も考えられる。目的の達成に向けてのステップを考えたら、違うテーマも考えられるのでは。
- ・杉本宗一氏(和気町地域おこし協力隊): ターゲット、ゴールをはっきりさせること、これができたらあとは自由に、というやり方がよいのではないか。
- ・阪田睦子氏(岡山県自然保護センター): 理論的に考えるというところが弱いのではないか。仮説や調査計画など、筋道を立てて考えるところを鍛えてもらえたらと思う。
- ・梅村竜矢氏(和気中学校(現カリキュラム開発等専門家)): 仮説がないということに加え、動機付けが難しいのではないかと思った。動機がないと動かない。「こんなことが実現したら、こんな楽しいことがある」と、「楽しい」の要素でひっばってみたら、乗ってくる生徒もいた。
- ・平井麻早美氏(和気町地域おこし協力隊): 全校アンケートを実施したり、比較表を作ったあたりと調査力が高いと感じた。テーマの絞り込み方には課題がある(絞り込めていない)。広すぎて、仮説が立てづらい。どういうテーマならわくわくするのか、自分ごととして取り組めるのか、わくわくする未来を考えてもらうように話をした。テーマとしては楽しみなものが多かった。
- ・中山芳一先生(岡山大学): プレゼンに関して、手元資料を見ずに空でプレゼンする生徒がいなかったのが残念。これから、海外との交流も行っていくということであれば、空でプレゼンできることは余計に大事ということを伝えた。2月の発表会では、全員空で発表しよう、と約束をした。
- ・吉岡香織氏(和気町地域おこし協力隊): 小さい子どもは、目的がはっきりしていたら目的にまっすぐ向かう。年齢が高くなると、目的に向けてのステップをいろいろ考える結果、目的がぶれたり、目的に向かっての筋道がぶれたりするのだろう。時には、下から目的を見上げ、ぶれていないかを確認できると良いのではないか。
- ・吉川幸先生(岡山大学): 仮説のとらえ方について、腑に落ちていないのではないか。仮説=テーマ/課題になっていたり、大きすぎるテーマになっていたりして、何を導こうとしているのか漠然としているチームが多かった。何のために何を明らかにしたいのかがしっかりできていると、後のステップが明確になる。
- ・久保田暁子氏(和気町地域おこし協力隊): 何をしたいのかのゴールが見えていない生徒が多い。もっと絞っていくことが必要、何を結果として得たいのか意識していこうとアドバイスした。賑やかで楽しい時間だった。

問いがうまく立てられていないという指摘を受け、2学期のはじめに仮説(問い)の修正(具体化させること)をした。



テーマ	問い	地域（2市1町）との関わり方
1 大國家の今を伝える	大國家の現状を多くの人に知ってもらえば多くの人に興味を持ってもらえて地域を知ってもらえるのではないかと。その手段はSNSが有効ではないか？	大國家の現状を取材し、毎週火曜日に投稿する社会教育課の森元さんに取材する
2 地域をPRする効果的な広報活動	実際に和気高生が企業の広告等となり、SNSでの発信や販売に携われば、企業の売上高や知名度が上がるのではないかと。	結ファームさんとのコラボ、赤磐マルシェ
3 国際交流ボランティアに参加して国際交流のノウハウを身につけよう!!	色々な国際交流のボランティアに参加し、ノウハウを身につけたら和気町や地域でもより多くの外国人と交流を深められるし、和気町の魅力も発信できるのではないかと。	岡山県で行われている国際交流のボランティアに参加して仲を深め、SNSなどで和気町の魅力である藤公園などのアピールをして和気町にきてもらう機会を増やす。2市1町が現在どのような国際交流をしているか、インタビューする。
4 姉妹校との交流について	ホームステイに関するアンケートを実施してその結果をもとに改善点などを考え、アンケート結果などを学校便りに載せてもらうことでホームステイ受け入れ家庭が増えて、もっと深い交流ができるのではないかと。	和気町、備前市、赤磐市の国際交流について担当者に現状をインタビューする。参加可能なイベントがあれば参加させていただきノウハウを身に付ける。
5 日本に住んでいる外国人は日本語しゃべられるか	外国人はかなり勉強して、日本語を理解しているのではないかと。	和気町に住む外国人
6 校則について	校則を変えたら和気高に来る人が増えるのではないかと	イメージが良くなる親しみやすい雰囲気
7 地域活性化	定期的にイベントを開くことによって和気町への来客を増やせば、和気町が活性化するのはないかと	和気の商工会と連携してイベントを盛り上げる
8 校則について	アルバイトを許可するならば、社会勉強になり、人とコミュニケーションをとることで、地域の方とのつながりを持つことができるのではないかと	2市1町の高校生のアルバイト実施状況を調査する（事業所、高校）
9 地域活性化	和気にすんでる人達は何か意味を持ってきているのでは？（ただ住んでる訳ではない）移住者が増えるならば和気高の入学が増えるのではないかと	移住説明会に同行させてもらい、説明を聴きに来てくれた方達にアンケートをとる
10 幸せに働くこと	〇〇〇ならば離職率が減り、自分、事業所、地域が幸せになるのではないかと	2市1町の離職率の調査 価値観のアンケート
11 和気町をますます好きになるような結婚式を作る	和気町を代表するような結婚式が存在すれば、和気町内で結婚し、和気町の少子高齢化ストップに貢献できるのでは。	地域の代表的なものを活かした結婚式を作る
12 電子パンフレット作成 施設 お店 居住紹介担当		広報わけなど地域の諸団体が発行しているパンフレットから情報を得て、構成を参考に する
13 電子パンフレット作成 企業紹介担当		広報わけなど地域の諸団体が発行しているパンフレットから情報を得て、構成を参考に する
14 電子パンフレット作成 イベント紹介担当	若い世代をターゲットにした和気町紹介パンフレット高校生が作成すれば、若い目線で魅力を伝えることができ、和気町の知名度が上がり、最終的に人口増加につながるのではないかと。	広報わけなど地域の諸団体が発行しているパンフレットから情報を得て、構成を参考に する
15 電子パンフレット作成 動画作成担当		和気町役場関連の動画作成担当部署に町情報と動画作成のコツを聞く
16 電子パンフレット作成 担当未定		広報わけなど地域の諸団体が発行しているパンフレットから情報を得て、構成を参考に する
17 金剛川の水質調査	金剛川の水質をきれいにすると川に行く人が増え、川関連のイベントが盛り上がるのではないかと	和気町役場の水辺の学校担当者に話を聞く。
18 ビオトープ	ビオトープをさらに発展させると、学校の魅力がアップするのではないかと	自然保護センターの方から話を聞く。
19 電子ポスター作成 金剛川紹介	金剛川紹介ポスターを作成すれば、若い目線で魅力を伝えることができ、金剛川の清掃意識につながるのではないかと	地域が作っているポスターから情報を得て、構成を考える。
20 夫婦間の家事についての不満をなくすには、何が有効か	（日本は性別役割分担が残るため夫の参加が少ないから）夫の妻がしている家事への理解が深まれば、家事への参加が進むのではないかと？→夫が理解を深める条件や有効なことを探っていく	二市一町が行っている家庭の家事共同参加への取り組みを調べ、行っていれば助言を仰いだり、アンケートの内容の興味を依頼する。
21 部活動の是非と教育的価値について	日本の部活動を量より質に変えるなど、海外と比較して欧米化を図ることで、和気高の部活動が強くなるのではないかと	和気町と和気高の姉妹都市を有効活用してアンケート調査
22 地域との交流	地域の子どもたちと外遊びを一緒にして楽しさを知ってもらえば、外で遊ぶ子どもが増え、子どもたちの体力が向上するのではないかと	2市1町の小学校にアンケートを取り、外遊びの少ない学校にドッジビーの出前授業に行く 事後アンケートを取る
23 もっと、中学生に論議の文化に触れてもらう	楽しんで論議を学ぶことができれば、中学生たちがより論議について深く知ることができるのでは？	和気中学校1年生に論議かるたを使って出前授業をする
24 地域間の交流	和気の商店街に、高校生からの視点で見ると、若者が集うような流行っているもの（タビオカなど）を継続的に取り入れることによって、みんなを笑顔にすることができる	ふるさと祭りに出店する
25 小学生と運動で交流	高校生が小学生と交流することで、小学生に運動する楽しさや大切さを知ってもらえるのではないかと。	佐伯小学校の児童と運動で交流
26 和気町商店街に和気高のベース基地を	和気町商店街に学習支援などをできる場所をつくれれば、若者や高齢者などすべての世代が交流できるのではないかと	和気商工会で空き店舗の使用について相談する 和気中学生の2学期期末考査対策として学習支援を計画する
27 地域特産品ブランド（和気〇印）の町内認知度を上げる	商品を販売する際、宣伝に力を入れれば、口コミで広がり、認知度も上がるのではないかと	地域で行われるイベント（コンズ、文化祭）で販売した経験を生かしたうえで、11月に行われるふるさと祭りに出店する

2 学期以降、多くのグループが実践的に活動できており、大学や自治体、企業の方から適宜指導を受けることができた。地域おこし協力隊の方が授業に合わせて来校し、日常的に指導をしていただく場面もあった。また、外部の発表会や探究学習の交流会に参加し、自分たちの活動を他校の生徒の前で発表する機会を得たグループもあり、チームで協力してスライドをまとめたり、発表練習をしたりする経験を積めたと同時に、他校の活動報告からも多くの刺激を受けることができた。



#### (4) 3年次閑谷學

##### ア 目標

大目標：自己と社会/これからの世の中とのつながりを調査し、提案する。

目標：自らの進路やつくりたい未来を構想し実現するために探究活動を行い個人論文にまとめることができる。

学年団の目標：全員論文完成、全員発表する。

##### イ 内容

###### (ア) 3年次閑谷學について（ワークシートから抜粋）

個人で探究活動を行い、卒業探究論文（2,000字以上）にまとめます。それぞれの進路に関連した探究テーマを考えてください。4/19（金）に、自分が探究したいテーマについて作文を書いてもらいます。昨年度の3年次生徒同様に、卒業探究論文は論文集という形にまとめます。来年度以降、後輩のみなさんが参考にしますので質の高い論文にしてください。

進路についてよく考え、よく悩みながら閑谷學に取り組み、探究活動を志望理由書や面接を考える際に役立て、最終的に納得のいく進路を実現してください。

###### (イ) 1年間の流れ

4月	みらいカフェ	教職員の自己開示・生徒との対話 新任の先生のキャリアストーリー 価値観を揺さぶる、視野を広げる
5月	ゼミスタート	生徒の書いた探究希望テーマを基にゼミを編成 各ゼミに担当教員2名ずつ、5つのゼミに分かれる
	問いの設定	希望テーマから探究で明らかにしたい“問い”を考える なるべく小さく具体的な“問い”になるように指導
7月	中間発表	1学期の探究成果をゼミ内で発表
夏休み	課題一新書を読む	自分のテーマに関連した新書を読み、要約と自分の意見を書く
10月	序論	1学期の探究を基に序論（テーマの説明・解決したい課題など）を書く
11月末	論文完成	個人探究の成果・課題・過程などを論文にまとめる
12月	卒業探究発表会	発表用のポスターを製作 1,2年生・来客の前でポスターセッション形式の発表

## みらいカフェ企画書

### MIRAI Café 企画

#### 目的

- ・生徒が進路を身近に感じたり考えたりするきっかけ作り
- ・生徒同士で進路について会話してくれるようになったら嬉しい
- ・学年の団結

#### 本時の目標

先生の話からヒントを得て、自分の未来を思い描くことができる

#### 学習の手順

- ①松嶋先生のキャリアストーリーを聴く
- ②セッション1  
(グループに分かれて話をする)
- ～休憩～
- ③柴谷先生のキャリアストーリーを聴く
- ④セッション2
- ⑤セッション3
- ～休憩～
- ⑥「私の夢宣言」&未来への手紙

#### セッションの手順

高校時代から始まる先生のキャリアストーリー(約10分)を聴く  
(どういうプロセスでどう進路選択したのかなど。説教不要)

↓  
生徒に紙とペンを持たせて、共通のお題についての答えを書き、それを一斉に開示して書かれたことをきっかけに話を進めていく

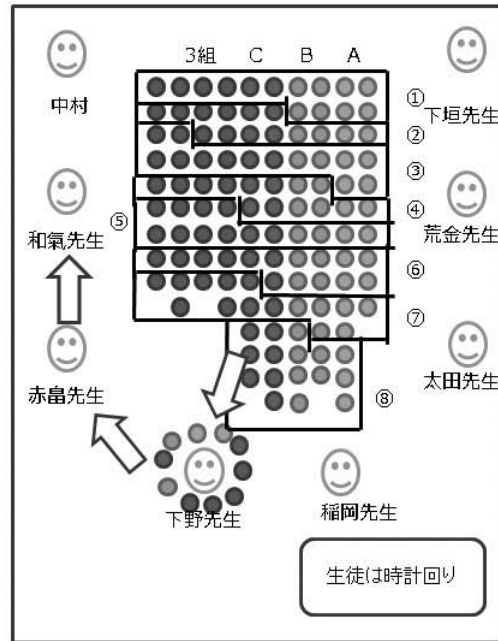
セッション①「進路に関して他のみんなにきいてみたいこと」  
セッション②「進路に関して他のみんなに聞いてみたいこと」  
セッション③「自分の進路の決定度を%で表すと？」

※放課後の教室のイメージで、先生の自己開示に誘発されて気楽にわいわい話せるのが理想

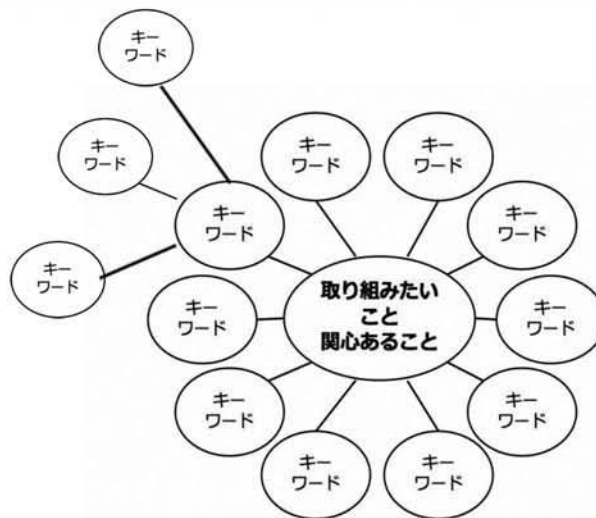
↓  
最後にみんなで拍手して終了

#### 生徒の動き

- ・クラス/コースごとに整列
- ・セッション時は先生の場所へ移動  
(場所は適宜スペースのあるところへ)
- ・話し終わったら時計回りに隣の先生のところへ



#### 問いの設定 ワーク例



#### (ウ) 中間発表

目標：自分の探究活動の進捗状況と方向性を確認し、教員または他の生徒からのフィードバックをもらうことで論文作成や卒業探究発表会までの活動の見通しを持つ。

内容：「探究活動（事前準備）」シートを活用して発表

- ・探究テーマ（問い）
- ・理由（背景・意義でもよい）
- ・探究したいこと/実現したい未来～
- ・検証方法（具体的に）

## (エ) 夏休み課題（ワークシートから抜粋）

「新書」を読みましょう

閑谷學を調べ学習で終わらせず、探究を深めていくためにはインターネットで調べるだけでは十分ではありません。夏休み期間を利用して、新書を読み進路実現につなげてください。補講期間・登校日等を利用して学校の図書館を利用したり、自宅近くの図書館を利用したりするなどして探究を深めていきましょう。

## (オ) 論文について

- ・進路に関連したテーマで2,000字以上の論文を書く
- ・ネットで調べるだけでなく、書籍の活用・インタビュー等のフィールドワークを積極的に行うように指導
- ・フィールドワークは、自分で調べてアポを取り、自分で行くように指導
- ・生徒の書いた論文を集約し論文集として整える（製本は地域の印刷会社に依頼）
- ・3年次生全員と教職員に配布予定

## (カ) ゼミ担当からのコメント

### 【幸せゼミ】

「幸せ」ゼミは最初、「幸せ（仮）」というゼミ名でスタートした。このゼミには医療・福祉分野に興味・関心のある生徒が集まっている。「福祉=幸せ」という意味があり、「みんなの幸せを目指そう」という思いを込めてゼミ担当者から「幸せ（仮）」という案を提示した。最初は仮であったが、探究を進めていくと全員が誰かの幸せを目指しながら探究していると感じられるようになり、「仮」をとって正式に「幸せゼミ」にした。卒業後もそれぞれの道で自分や周りの人、社会全体の「幸せ」に向かって探究を進めてほしい。

### 【Cultureゼミ】

Cultureゼミでは、Culture（文化）をキーワードとして集まった生徒計23人が、自らの進路を念頭に課題を設定し探究した。生徒たち一人ひとり、やり方は様々であったが、文献やインターネットだけに頼るのではなく、地域に調査に出かけたり、興味がある分野のスペシャリストにインタビューしたりすることで、体験を通して深く考え、論文完成まで課題に真摯に向き合った。この経験を今後の人生の糧として、自分らしくどんな場所でも自分の花を咲かせて欲しいと願っている。

### 【いろいろゼミ】

このゼミをいろいろゼミと命名した。それは様々な感性と興味を持った生徒たちが自由な発想でかつ将来、自分の役に立つ探究学習ができればという願いからである。

探究する中で多くの生徒は現場で働く人々の見えない思いと向き合うことができた



と思う。「人の気持ちに寄り添って」「相手の立場に立って」「人を喜ばすためには」「見えない所での努力」などこれから一人前の社会人となる準備や心構えを得る貴重な経験になった。

論文は胸を張って語れる内容になっていない部分もあるだろうが、やり遂げたことを自信にかえて社会人として巣立ってほしいと願っている。

### 【Life is worth Living ゼミ】

Life is worth Living ゼミには計 23 名の生徒が在籍し、ゼミ名の通り、人生における『生きがい』を探究した。生きがいとは何なのか。その答えは生徒の数だけ存在する。似たテーマを選択しても、見出す『生きがい』は個々の感性によって異なった。そして、人間一人の感性も一定ではない。様々な経験や出会いを経て変容していく。今回の探究を通して、著書やインターネットで様々な人の価値観に触れ、変容した今の自分の『生きがい』が書き記せたのではないだろうか。今後彼らが様々な経験をし、良い意味で違う『生きがい』に出会うことを期待する。

### 【自分探求ゼミ】

「自分探求ゼミ」では、テーマによって上記 6 チームに別れ、助け合いながら探究活動を行った。早くから計画的に取り組んでいた人、締め切り目になってスイッチが入り論文を完成させた人、テーマがしっくりこずに、何度か変更し、自分の探究したいことをやっと見つけた人など、課題や探究の向き合い方も人それぞれで、仕上がるまで本当にドキドキであった。だが、ひとり一人が課題をクリアしていくたびに、こんな一面もあったのかと、うれしい発見もあった。論文提出後は、探究発表会。ここで新たな成長を見せてくれることが楽しみだ。

#### 探究テーマ例

幸せゼミ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言語聴覚士の探求から「障害」に対する考え方と知的障害者の接し方を考える</li> <li>・医療と社会保障を持続していくために</li> </ul>
Culture ゼミ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・備前市の地方創生</li> <li>・種の多様性の実現</li> <li>・歴史を地域活性化に活かすには</li> <li>・すべての子どもたちに質の高い教育を</li> </ul>
いろいろゼミ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・e-sports はオリンピック競技になるのか？</li> <li>・殺処分を減らしたい</li> <li>・ストレスと向き合えるようになるには</li> </ul>
Life is worth Living ゼミ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・めざすべき郵便局員とは</li> <li>・専門店のコーティングとディーラーのコーティングの違い</li> </ul>

自分探求ゼミ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・化粧品パッケージから学ぶ～人を魅了するデザインとは～</li> <li>・優しい機械とは      ・絵本を作りたい</li> <li>・信頼される建築士になるために</li> <li>・一人ひとりが輝けるためには</li> <li>・ユーチューブで人気になるにはどうしたらいいか</li> <li>・自分の理想のマイルームを作る</li> </ul>
--------	--

## ウ 生徒の振り返り

（「自分で設定した“問い”にこたえるために、最も悩んだことはなんですか？」）

- ・今年パソコンをほとんど使わず、自分が実際にしていることを自分の言葉でまとめることができたのでしっかりまとめたものができた。
- ・調べるにつれて次の疑問が出て、しばしば脱線しそうになったり、答えがでなくて悩んだりすることが多かった。自分の好きなことだからいっぱい調べたしいっぱい悩んだ。
- ・“教育格差を是正するために理解を深めてもらう活動をする”。世界的な課題を私がなんとかすることはできないな—って思いながら探究していた。直接支援できなくても間接的に支援できればという答えを導いた。
- ・より実現したい未来に近づくために大学選択とかそこで何を学びたいかとか、そうゆうのをしっかり考えることができた。
- ・インターネットやインタビューで調べてもこれだという正解がなかったから難しかった。また、幸せとは何かの定義を作っても、どうやったら幸せになれるのかを考えるのもすごく悩んだ。
- ・自分で問いを設定することにまず悩んだ。自分が今一番知りたいことでもいいけど、ちゃんと誰かが興味を持ってくれることをやってみたいと考えていた。
- ・好きな内容だったので、毎時間調べたり探究したりするのが楽しかったです。嫌で嫌で仕方なかったけど、達成感すごいし、自分にとって良い経験になりました。
- ・先生たちにインタビューしながら、「自分が先生たちの立場だったらどう感じるだろう。どう思うだろう」と考えていました。いっぱい悩んだ分、良い発表ができました。
- ・商品の完成というゴールは確実にあるのに、先が見えなくて、ぜんぜん進まない日もあれば、とても進む日もあるし、来た道は確かではっきりしていても、不安があった。でも完成したとき、本当にうれしかった。
- ・理想と現実の割合。理想のマイルームを作るというテーマにしたけど、やっばすべてが理想通りにいくわけがないし、だからといって現実大目にする夢がないため、そのバランスを考えるのが難しかった。
- ・自分の探究テーマの“問い”の答えは自分自身について考えることで、インターネットで調べたりすることはなかったの、深く考えることが難しかった。自分の経験やそこから感じたことや考えたことをまとめて、文章にするのが難しかった。

## (5) 発表会

### ア 卒業探究発表会 (愛称：アオハル～咲け！ひと味違う自分へ～)

#### (ア) 目的

○3年次生：3年間の閑谷學の集大成として、以下の閑谷學で身につけてきた力を活用・表現する機会とする。

- ・自己の将来について夢や希望を持って具体的に考える力
- ・異なる意見や他者を受け入れ、相互に認め合うことを通じて共同して課題を解決する力
- ・社会を取り巻く様々な事柄に目を向け探究することを通じて、自分の言葉で整理する力
- ・社会活動に当事者意識を持って参加し、現在および将来の学習に活かす力
- ・「閑谷学校」の精神を継承する姿勢

○1・2年次生：3年次生をロールモデルとして、現在の自分たちの学びがどこにつながるのかという見通しと目標をもつことができる。

○実行委員を中心に「生徒が創る」発表会とする。司会だけではなく、企画・運営の大部分を生徒に任せることで、発表会への主体的な参加意識を涵養する。

#### (イ) 日程 12月19日(木) 1～4限

時間	内容	備考
8:55	オープニング 校長挨拶、閑谷學・発表会説明	
9:15	ステージ発表	代表生徒5人(1人5分)
9:45	移動・休憩	
10:00	ポスターセッション第1部開始(説明→発表) 各生徒が2回ずつ発表 参観者からフィードバック・質問	1人7分×3ラウンド (間は1分間)
10:30	休憩	
10:45	ポスターセッション第2部開始 各生徒が2回ずつ発表 参観者からフィードバック・質	1人7分×3ラウンド (間は1分間)
11:10	移動・休憩	
11:25	体育館集合 “シンポジウム”説明	
11:35	“シンポジウム”開始	代表生徒9人
12:20	エンディング 表彰、講評	
12:40	発表会終了・会場片付け	



## (ウ) 内容等

- ・ステージ発表：5つのゼミから選出された代表生徒各1名によるステージ発表
- ・ポスターセッション：個人探究の成果を1人ずつポスターセッション形式で発表
- ・シンポジウム：3年次生の各ゼミから1名ずつ、1・2年次生からそれぞれ2名ずつの代表生徒が対話をした。高校生が自分や社会の未来について考えながら、世の中を今よりも少し良くするためにできることについて意見を交換した。シンポジウムのファシリテーションも3年次生実行委員が務め、好評を博した。進行は全て生徒が行ったが、ステージ上で生徒が対話をするだけではなく、会場に問いかけを行い、来客や観覧生徒にインタビューするなど、会場全体を巻き込む形式で行った。生徒による主体的で対話的で深い学びの場が実現していた。
- ・表彰：和気町長賞、和気商工会長賞
- ・講評：和気町長、和気商工会長、岡山大学吉川幸先生
- ・実行委員：3年次生有志が実行委員となり、会のコンセプト、愛称などの設定、オープニングムービーの作成、当日の進行(司会進行、タイムキーパー、受付など)。コンセプト「3年生全員が主役、参加者も含めて全員が楽しめる発表会」
- ・来場者：昨年度(41名)を大きく上回る77名であった。閑谷學でお世話になった地域の方々をはじめ、進学先・就職先の関係者、近隣中学校からの参観も多かった。加えて、地域協働事業関係者も多数足を運んでくださった。

## (エ) 生徒振り返り(自分の発表に点数をつけるとしたら何点ですか?点数の理由は?)

- ・100点。今までの発表の中では最も良かったと感じたからである。それまではあまり本番で上手く発表ができなかったが、原稿を見ることなく発表できた。もちろん完全に満足がいった訳ではないが、それでも確実に成長は下と思う。また、実行委員になれたことも、能動的に行動する力がつく要員になった気がする。
- ・100点。大きな声で発表できたし、終わった後、話が生々しくおもしろかったって言われたし、自分でも上手にまとめながら発表できたと思う。がんばった。
- ・95点。実体験をもとに摂食障害のポスターを作った。フィードバックシートに分かりやすかったと書いてくれている人が多かったから嬉しかった。-5点はポスターに写真や絵など、もう少し魅力的なポスターを作ればよかった。
- ・100点。賞もただけて、校長先生からもおほめの言葉をいただけたから。写真とかビデオとかたくさん撮られたし、大学の人や教育機関の人、NPOの人などからもたくさんお話を伺って良い時間になった。
- ・70点。フィードバックシートには「わかりやすかった」、「まとめが良かった」、「何気ない日常が幸せなことに気づいた」等ほめてくれている人が多かった。ただ、ポスターをうまく使いながら説明することができなかったから「難しい」という声もあった。

- ・100点。ぎりぎりになって提出してしまっただけ、自分の将来につなげられるような探究ができたと思う。思っていたよりたくさんの人に見られて緊張したけど、自分の伝えたいことを伝えることができたと思う。声の大きさとかはあまり時間なかったけど頑張った。
- ・70点。今回はじめて閑谷学を1人でやってまずとっても緊張した。だが、保育園、幼稚園のはじまりから調べていてすごいなどほめてもらえてとても嬉しかったです。1人で発表は不安なことが多かったが良いようにできてとても良かったです。
- ・80点。(ステージ発表) 400人も越えていた人数の前で、大きな声で発表することができた。パワーポイントが見やすいと好評を受けて、すごく嬉しかった。あとは、時間以内にしようと早口とパワーポイントをとばしてしまった所を改善する。
- ・98点。ポスターは相手から見やすいように色や画像をのせたり、全て原稿に頼らずにアドリブもまじえて発表できたりしたから。ただ、一回目はどのくらい声をはれば聞きやすいかが分からなくて、小さい声になってしまった。二回目はもっと声を大きくして発表できた。



実行委員長挨拶



ポスターセッション

## イ 1・2年次生探究学習発表会

### (ア) 目的

1年次生は自分たちの身の回り(和気高・和気町)の課題について、2年次生はSDGs(持続可能な開発目標)の解決に向けて、身近なことから自分たちにできることを探究・実践した経過と成果を伝える。

### (イ) 内容

第Ⅰ部：1・2年次生合同のプレゼンテーション

1年次生(5ゼミ、28グループ)、2年次生(5ゼミ、27グループ)

第Ⅱ部：投票で決定した各教室の代表グループ(10グループ)によるステージ発表

(ウ) 講師一覧 (順不同・敬称略)

東北芸術工科大学 コミュニティデザイン学科 学科長 (准教授)	岡崎 エミ
探究学舎 講師 (元和気町地域おこし協力隊・和気高支援職員)	向 敦史
NPO 法人「青春基地」 代表理事	石黒 和己
一般財団法人「地域・教育魅力化プラットフォーム」	本宮 理恵
一般財団法人「地域・教育魅力化プラットフォーム」	奥田麻依子
岡山大学 地域総合研究センター 副センター長 (教授)	前田 芳男
岡山大学 地域総合研究センター 実践型教育プランナー	吉川 幸
岡山大学 全学教育・学生支援機構 准教授	中山 芳一
山陽学園大学 地域マネジメント学部 教授	松尾 純廣
山陽学園大学 地域マネジメント学部 講師	建井 順子
岡山県自然保護センター 主幹	阪田 睦子

(エ) 日程 2月1日(土) 1~4限

- 9:00 ~ 9:20 開会・校長挨拶、オープニング (閑谷學の説明含む)、講師紹介
- 9:20 ~ 9:40 休憩・教室へ移動
- 9:40 ~ 10:25 10教室に分かれてプレゼンテーション  
1グループ5分(発表4分、質疑応答・評価記入1分)×5or6グループ  
投票、講評(同時に開票作業)  
代表グループの決定 ※時間があれば振り返り記入
- 10:25 ~ 10:45 休憩・体育館へ移動
- 10:45 ~ 11:30 代表グループステージ発表(4分×10グループ)
- 11:30 ~ 12:00 代表グループ表彰(10教室の各講師よりコメントと表彰)  
全体講評  
東北芸術工科大学 コミュニティデザイン学科長(准教授) 岡崎エミ様  
教頭挨拶・閉会
- 12:05 ~ 12:20 振り返り記入(HR教室)

(オ) 成果と課題(来場者アンケートより)

<成果>

- ・生徒の「やりたい」を大切にされたテーマだったこと。1年から2年への成長の姿が見られた。(県外大学教職員)
- ・学年横断で発表することで、1年が2年との違いに気づき、次に生かせる仕組みにな



- ・学年横断で発表することで、1年が2年との違いに気づき、次に生かせる仕組みになっていること。専門家から直接学べること。全員が発表に関わっていること。全てのつながりが素晴らしかったです。(県外高校教職員)
- ・体育館での代表プレゼンは現状分析、目標の設定、調べ学習、郊外へ行って調査または体験、考察まとめというように、必ず校外での活動があったようです。アクションを起こし、その達成感を生徒たちが感じると、これほど堂々と話せるのかと驚きました。(県外高校教職員)
- ・地域の課題を生徒の目線で捉えられ、今後の活動に興味を持ちました。地域の方と学校関係者の協力体制が素晴らしい。(県外高校教職員)
- ・昨年よりも、レベルが上がっていると感じた。生徒の手でこの発表会が進んでいる様子が感じ取れとてもよかったです。(企業)
- ・何かやる時には、和気高生にも協力をお願いしたい！という気持ちになりました。(地域の方)
- ・1年生で基礎を学び、2年生になると行動に移せるようになっていてとても有意義な活動だと感心しました。(保護者)

#### <課題>

- ・生徒さんのやりたい思いを大切にしつつ、社会的意義に持っていくチームがもう少し増えるといいと思います。(県外大学教職員)
- ・講評にあったように「自分が熱意や使命感を持って取り組むことのできる探究」を見つけてることが大切だと思います。(県外高校教職員)
- ・アンケート調査等で分かったことから、次の行動に繋がるまで発表できると良い。(県内高校教職員)
- ・この探究結果や研究内容について、さらに地域にフィードバックすることで、この活動が地域レベルに広がるのではと思いました。(企業)
- ・もっと積極的に校外的な交わりを持ってもいいと思いました。協力してくれるところはたくさんあると思います。(企業)



生徒による運営



教室でのプレゼンの様子

## 4【課外活動】

### (1) 生徒会活動

#### ア 行動憲章

行動憲章とは、「和気高生の望ましい行動の目標」に加え、「和気高生としての理想の人物像」を表したものである。

和気閑谷高校「行動憲章」

「信」…仲間の挑戦を支える

「勤」…絶えず目標を立て、懸命に取り組む

「儉」…失敗を意味あるものにする

これらの「信・勤・儉」を全校生徒に呼び掛け、委員会活動や学校行事の目標作成や、活動方針のなかには必ず盛り込まれている。きっかけは、現在の生徒の学校生活を改善し、より良いものにしていきたいとの思いから、教員、生徒、生徒会が意見を出し合い作成された。学校生活のなかでスローガンの的に活用されている。

行動憲章のもととなったものは、和気閑谷高校の源流である旧閑谷学校において、閑谷三宝と呼ばれる「信・勤・儉」の考え方だ。「信・勤・儉」は、近江聖人と呼ばれた江戸時代の儒者（陽明学）中江藤樹の教えを基本にするものである。

閑谷三宝における「信・勤・儉」

「信」…信頼は、他人または自分に対して言ったことを必ずやり遂げること。

「勤」…真心を込めて一心に励むということ。

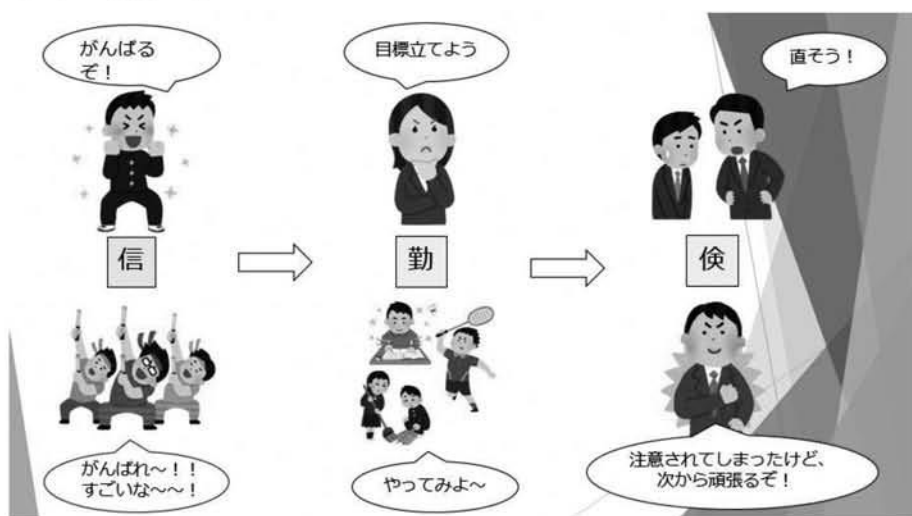
「儉」…お金や時間を節約してつつましく生活をし、学びに集中すること。

これをもとに校長が原案を作成し、全校生徒にアンケートを依頼、その結果を集約し、生徒会で最終的にアレンジを加えたものが「行動憲章」である。現代によみがえる閑谷三宝という意味も込められており、広く庶民に開かれた旧閑谷学校の伝統を受け継ぐ本校として、とても良いスローガンとなっている。

現在は、学校行事などの際に、生徒会を中心に行動憲章の意識を呼び掛けている。その結果、全校生徒に連帯感が生まれ少しずつ新たな取り組みも進んでいる。今年の文化祭では、携帯電話の撮影機能許可のため積極的に生徒から校則順守のための週間が設けられた。また、体育祭において、閉会式前に全校生徒が輪になって大合唱を行った場面は今までになく、大変印象的であった。

今後の展望としては、「信・勤・儉」を軸に、今後の生活の糧として勉強や部活動により一層励む環境をつくることだ。まずは部活動を活性化し、上位進出できるように、日々の

練習から真面目に取り組むことが挙げられる。そして、授業中の私語をなくし、メリハリを持ちテストの点数を上げられるように一時間一時間を集中して授業を受けることを継続していきたい。



## イ ボランティア活動

生徒会主催の主なボランティア活動として、学童保育ボランティアと閑谷ガイドボランティアがある。

学童保育ボランティアは、生徒会の生徒に加え、将来福祉や保育の道に進みたいと考えている生徒を募集し、2週間に1度程度、近隣の小学校に伺っている。勉強を一緒にしたり、グラウンドで遊んだりして、高校生にとっても大変よい経験となっている。

閑谷ガイドボランティアは、旧閑谷学校の紅葉が色づく季節や、春の行楽シーズンに行う。活動内容としては、観光客に生徒が旧閑谷学校の歴史などを説明するが、外国人観光客も多いため、今後は英語でも案内できるように準備したい。旧閑谷学校との関係を大切にするためにも、ガイドボランティアをぜひ継続したいと思っている。



## ウ ユネスコスクールとしての活動

本校はユネスコスクールに加盟しているため、国際交流の機会を定期的にいただいている。その中でも生徒会が参加する、ユネスコスクール実践報告会では、他校と交流し、ESDに関してどのような取り組みを行っているのかを情報交換している。また、今年



の実践報告会では、ブルガリアの生徒とともにパラスポーツ体験を行った。シッティングバレーやブラインドサッカーなど、日頃経験することのないパラスポーツを楽しむと同時に生徒会として障がい者の活躍の場に興味を持った。

今年度は、生徒会と有志の生徒が、障がい者のファッションショー「パラコレ」に参加をしたり、パラ卓球日本代表選手を招いての講演会を主催したりするなど、本校のESD活動の主軸の一つとしてパラスポーツを置きたいと考えている。



## エ だっぴへの参加

NPO法人～だっぴ～が主催するイベントに生徒会メンバーを中心として定期的に参加をしている。「だっぴ」とは、中・高生・大学生・保護者など地域の大人の計8～9人程度のグループをつくり、働き方や生き方などについてテーマに沿って自由に話し合うキャリア教育プログラムである。

このイベントに参加することで、生徒会の生徒のコミュニケーション意欲を高め、全校生徒に対する発信力が高められると考えている。また、地域の方との結びつきを強め、和気閑谷高校を広く知ってもらうための役割も担っている。生徒自身がグループのなかでのファシリテーターをすることもあり、明るい雰囲気づくりや人の話を傾聴する姿勢を学び、成長を続けることができている。

今後はだっぴを通して、地域の方が和気閑谷高校に求めるものを知り、それを校内に還元できる取り組みを考えていきたいと思う。



## (2) 放課後学習支援

本校では、ESD 同好会の活動の一環として、和気町立和気中学校と和気町立佐伯中学校で年間 10～20 回程度実施される放課後学習に先生役として参加している。放課後学習支援は、地域人材の協力を得ながら、基礎学力の定着と学習習慣の確立を図る目的で中学校が主体となり行われ、地域の学習支援ボランティアの方とともに、主に中学 1・2 年生の数学の学習支援をしている。教員志望の生徒を中心に、毎年約 10 名程度が参加している。

今年度は、月曜日の放課後に和気中学校へ 8 回、木曜日の放課後に佐伯中学校へ 5 回、約 1 時間程度の学習支援に参加した。佐伯中学校区へは 8 月に開催された小中合同学習会「夏休みチャレンジスタディ」にも参加し、小中学生の夏休みの宿題のサポートにも協力した。

各中学校への移動手段は、和気町の協力によりタクシーを使用できたので、放課後の短い時間にスムーズな移動を行うことができています。

参加した生徒は、はじめは緊張した面持ちで、中学生にどのように話しかけようか戸惑う様子もあるが、回を重ねるごとに、だんだんと顔見知りになることもあり、サポートの仕方もどんどん上達してくる。教え方がわからない、理解できるようにうまく伝えることができない、といった困りごとも、小さな経験を積み重ねることで、自分の力で解決しようとする姿が見える。参加者は中学生に「わかった」「ありがとうございます」と言って笑顔になってもらえることが大きな励みとなっている。今後も双方にとって価値のある時間を共有したい。



佐伯中学校の様子

夏休みチャレンジスタディ



### (3) イングリッシュキャンプ

8/3と8/4にイングリッシュキャンプがおこなわれた。和気閑谷高等学校と和気町社会教育課の共催によるもので、今年度で4年目の開催となる。英語研究部の生徒と有志生徒がスタッフとなり、町内の小中学生に楽しく英語に触れる機会を提供することを目的としている。

当日は、本校生徒17名、中学生3名、小学生10名と県内のALT10名が参加した。本校生徒は、事前準備や、全体司会、アイスブレイク、キャンプファイヤー等の企画・運営に積極的に取り組んでくれた。今年度は、5班に分かれて、それぞれ自然の物(木の枝や葉っぱなど)を使っの創作アートや、参加者全員が楽しめるレクリエーションを考え、実践するなどの活動をおこなった。どの班も、ALTとなんとか英語でコミュニケーションを取ろうとし、小中学生が英語を喋ったり、活動に参加する手助けをしたりと、自分の役割をしっかりと果たしてくれた。アイスブレイクとキャンプファイヤーは、どちらも生徒たちが自分たちで考え、準備、練習に取り組み、本番でも、小中学生やALTを大いに楽しませていた。

今回のイングリッシュキャンプから、生徒たちは多くのことを学んでくれた。拙い英語でもコミュニケーションを取ろうとする姿勢、役割を果たす重要性、人を楽しませること、自分も楽しむこと、そして全力で取り組むことである。2・3年次生は昨年の活動を活かして活躍し、今回初めて参加した1年次生は、真剣に取り組む先輩の姿を目の当たりにし、良いロールモデルを獲得できた。実りの多いイングリッシュキャンプとなった。





#### (4) 英語出前授業

英語出前授業とは、和気閑谷高等学校英語研究部の生徒が、近隣地域にある本荘小学校に出向き、小学生に楽しく英語に触れてもらう経験を提供するもので、地域連携の一環として平成18年から継続的に行われている。7月には小学1年生を、12月には小学6年生を対象に年2回開催している。今年度は7月に14名、12月に8名の高校生が参加した。

「出前授業」という名称ではあるが、いわゆる一斉授業形式で小学生に英語を教えるのではなく、英語を使ったゲームを通して、楽しみながら英語を使う経験をしてもらうことを目的としている。和気町が英語特区に指定されていることもあり、小学生は基本的な英単語はよく知っている。1年生と6年生という違いはあるが、どちらを対象にする場合でも、新しい単語を教えるようなことはせずに、相手の英語力を考慮した上で、楽しみながら学べるゲームを用意する。

当日に行うゲームやアイスブレイクは、すべて本校の生徒が考えて準備し、当日の進行も生徒が行う。本校の1年次生は、イベントやゲームの企画・運営に関わること自体初めての生徒も多く、小学生の学びを目的とした出前授業ではあるが、高校生にとっても主体性や自ら考えて動く力などを養う機会となっている。

本荘小学校の児童は、本校が開催するイングリッシュキャンプ等の別の活動に参加していることも多く、学校同士の連携という枠組みを超えて、生徒児童同士の再会・交流の場にもなっている。本校生徒が小学生にとって良きロールモデルになってくれていることを願う。



## (5) こくさいフォーラム in Wake (和気町グローバル人材育成プロジェクト)

本校では、論語を基盤として多様な主体との協働と海外でのフィールドワークを合わせることで、心豊かな精神と国際感覚を有し、自分と地域と地球の課題や関係性を結びつけて考え実践できる人材の育成に取り組んでおり、地域と協働し、地域の教育文化資源を活用し、「仁」「恕」を基盤とした本校独自のカリキュラムの提示に挑戦している。

今後はASPnet校としてESDの拠点となり、これらの活動を持続発展させることが求められている。そのために、国内外のネットワークを広げるとともに、あるべき学習者の創造と指導者の教育観の転換を学校全体で取り組みESDを推進すること（ホールスクールアプローチ）が求められている。

今年度は、公益財団法人福武教育文化振興財団教育文化活動助成において、地域課題解決型探究学習の充実、地域や中学校との連携の推進を通して、グローバル人材育成モデルの構築をめざすこととした。10月には、岡山大学留学生や町内在住外国人を招き「こくさいフォーラム in Wake」を実施した。「こくさいフォーラム in Wake」とは、自分が生きる地域と世界について英語を活用して体験し、グローバルにもローカルにも共通する知見を学ぶワークショップである。そして、2月にはその一環として「多様な主体による協働会議」（p72・73 参照）を実施し、生徒個々のグローバル感覚はもとより、地域とのつながりを深く実感させることができた。3月にも「こくさいフォーラム in Wake」を実施予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、やむなく中止とした。



以下、10月の「こくさいフォーラム in Wake」に参加した生徒の感想を紹介する。

2年1組 大森 麻矢

フォーラムの中での留学生の方との交流を通し、他国（ミャンマー）では、母国語のほかに英語もしっかり勉強していることを知りました。理科と数学は、英語で授業をやっているようで、最初は本当だろうかと驚いてしまいましたが、しばらくして、「いいな」といった思いでいっぱいになりました。このようなことが、他国の人が英語を話せる理由だと強く思いました。日本でも今後このようなことをしていけば、多くの人が英語を話せるようになるのではないのでしょうか。また、英語だけでなく、多くの言語を話せるようになれ



ば、そのことを通し、積極的に多くの国の方と交流を深められ、グローバルな視点を身に付けることができるのではないかと思います。

今回のフォーラムでの会話では、なかなか言葉が出てこず、思ったような意思伝達ができなかったのですが、聞き取りについては少しできたように思います。しかし、そのような中でも、留学生の方は私の英語を理解しようとしてくださり、会話はある程度成立していたように思います。これからは、より積極的な交流を心掛け、もちろん、スムーズな交流ができるように、いくつかの会話を用意しておきたいと思いました。

#### 1年1組 徳永 廉

フォーラムを通し、以前の自分と今日の自分の違いについて考えました。以前よりも「これを伝える」という自分の意志は強くなったと思います。しかし、それを行動に移すのに時間がかかった、または、行動に移せなかったのが悔しい思いをしました。自分と留学生の方との違いは、積極性に欠けている自分と比べ、和気駅に迎えに行ったときから、「家から学校まで何分かかるの」「何歳」など、簡単に答えられるような質問をフレンドリーにしてくれた点だと思います。また、先輩と自分との違いは大きな経験値の差です。私ももう少し臨機応変に対応できるように経験を積み重ねていきたいです。

私は、去年あった「こくさいフォーラム」に中学生として参加しましたが、その時には、どんなことをするのか、時間配分はどのくらいか、などの企画からは関わっていませんでした。今回、企画、運営をしていく中で、時間の無さ、その上、アイスブレイクの企画を1年生に任せ、情報共有の難しさや、司会などの際、なかなか言葉が出ず黙り込んでしまったことなど、多くの経験をさせてもらいました。この経験を次に生かし、すばやい行動を心掛けたり、スムーズな運営、進行ができるよう、準備に時間をかけ、様々な場を想定して、英文をいくつか予備で作ったりしておこうと思いました。

#### 1年3組 寺崎 翔輝

フォーラムを通して感じたことは、当たり前のことですが、言語の違いです。言語が違うだけで、こんなにも自分の意思を伝えるのが難しくなるとは思っていませんでした。そして、文化の違いも感じました。お肉などの焼き方や食べ方を聞くにつけ、おいしそうで、海外に行ってみたくてよりいっそう思いました。また、経験の違いも感じました。留学をしに日本に来ているというこの差が、違いを生んでいるように思いました。

とにかく今回のフォーラムは楽しかったです。同じ人間なのに、言語が違う人と話すだけで、日常と離れたような感覚を覚えました。英語を話す中で、失敗も多くありましたが、改善するための方法もすこし見えたので、次に、ぜひつなげていきたいと思っています。進むのも進まないのも自分次第だと思います。失敗をするかもしれませんが、一歩でも前に進み、様々な経験を積み重ねていきたいと思っています。



## (6) 多様な主体による協働会議

### ア 概要

- 日時 令和2年2月1日(土) 13:30~16:00 (開場 13:00~)
- 会場 岡山県立和気閑谷高校体育館
- 内容 ①趣旨説明&アイスブレイク  
②ピッチプレゼンテーション(やりたいこと、話し合いたいことを発表)  
③グループトーク(気になるグループに参加して話し合い)  
④発表&講評(各グループの話し合い内容を発表し、専門家が講評)
- 参加者 本校生徒、地域住民、その他、関心のある方々  
当日内訳:本校生徒60人(1年次生31、2年次生29)  
生徒以外87人(市民34、話題提供14、講師10、視察29)

### イ 企画意図

平成26年度から、前述の「こくさいフォーラム in Wake」の最終回として本校が開催してきた「多様な主体による協働会議」は、高校生と市民がともに地域の未来について話し合い、構想する場であった。これまで、地域の方々が出展する文化祭など、この会議で生まれたアイデアが実現したこともあるが、大きなうねりにつながるものではなかった。

そこで、今年度の「多様な主体による協働会議」は大きなアイデアを描くのではなく、高校生や地域住民が持つ具体的な構想を、一歩前に進めるための場として設計した。内容は、「やりたいことがある」「知ってほしいことがある」「相談したい」「仲間がほしい」といった話題を持った人(グループ)がお題を発表した後、参加者がそれぞれ興味関心を持つグループに分かれて車座になって話をするというシンプルなものだ。

これによって高校生と地域住民、あるいは住民同士がつながり、次の一歩に向けての知恵や仲間や元気を得る場にしたいと考えた。高校生は、総合的な探究(学習)の時間「閑谷學」での探究を前に進め実践につなげるために、地域でさまざまな活動をしている大人たちは仲間を見つけたりヒントを得るために。意欲的な人々との出会いによって、地域の魅力や可能性を感じる生徒と地域住民が増えることも企図した。

高校がこのような場を設けることの意義は、生徒の成長のためということももちろんあるが、高校が地域づくりの主体となることにもある。高校と地域は「協力してあげる」「協力してもらおう」という関係になりがちだが、その関係性を超えて地域づくりのための場を高校が主催する。高校と地域の協働の新しい形を模索した。

### ウ 成果

当日は、地域から10テーマ、本校生徒から10テーマの話題が提供された。大人から提供された話題は、里山で子供たちが遊び育つような居場所を作りたい/和気駅前マルシ

エを開きたい／和気のものやエネルギーの地域内循環を創り出したい／中高生が来たくなる自然保護センターのあり方／旧和気小学校の校舎で「何もしない合宿」の仲間募集／自宅や古民家で結婚式をあげる「祝言」を実現したい、など。生徒からは、論語カルタの普及をしたい／キャンプ場の活用を促進したい／部活動で国際交流をしたい／障害者用のグローブの普及をしたい／和気の良いところの情報発信をしたい／防災ポスターを作りたい、など。

意図せず、大國家住宅の活用についての話題提供をしてくださった方は同テーマの生徒と一緒にグループになったり、当日その場で、生徒と地域のグループが一緒に話をしたいということになったりと、会の始まりから繋がりが生まれた。また「何にもしない合宿」のグループに参加した本校生徒3人が、3週間後に行われた合宿のスタッフとして事前の掃除から最後のふりかえりまで参加するという広がりもあった。地域の方々からも「こういった場があること自体に、和気町の可能性を感じた」など、好意的な意見が多く寄せられた。

最後に、当日、参加者から寄せられた振り返りのコメントを一部、紹介する。





## (7) 姉妹校交流

本校は平成 29 年に韓国・沃川（オクチョン）高等学校、韓国・昌原龍湖（チャンオンヨンホ）高等学校、そして台湾・屏東女子高級中学の三校と姉妹校提携を締結し、1999 年に友好交流協定を結んだ中国・上海市嘉定区第一中学、三東省曲阜市第一中学を含めた海外 5 校と積極的な交流を重ねている。お互いの共通項であるユネスコスクールとしての取り組みや論語を通して活発な意見交換を行うなど、ともに貴重な生徒育成の場と捉えている。

姉妹校の 3 校すべてが今年度に契約の最終年を迎えるということで、沃川高等学校が 6 月、昌原龍湖高等学校が 7 月、年明けの令和 2 年 1 月に屏東女子高級中学がそれぞれ来校するという国際交流イヤーとなった。協議の結果、3 校ともに姉妹校契約は更新することになり、特に近い将来には本校、沃川高等学校、屏東女子高級中学の 3 校が修学旅行などを利用し、1 箇所ですべて生徒による合同サミットを開催したいという案が浮上している。

### ア 韓国・沃川高等学校との交流

韓国・沃川高等学校は、今年度、6/10 に生徒 15 名・教員 3 名で来校した。昨年度は 9 月の楷楓祭文化の部に合わせて来校し、チマチョゴリに代表される民族衣装や伝統工芸品などを紹介する韓国ブースの出店をした。今年度の交流では本校で日本の日常的に行われる授業を受けてみたいという要望から、現代文と家庭科の授業を受けることとした。

まず行われた歓迎式典では、本校 2 年次生の閑谷学広報チーム（広報を探究するグループ）を中心にすべて韓国語を使用して進行した。2 カ月間に渡って韓国語講師を迎え、ハングルを覚えながらスピーチの練習を行った。式典内では、スピーチの内容において韓国の生徒から拍手喝采を浴びるなど、高い評価を得ることができた。沃川高等学校の生徒も日本語で代表挨拶を行うなど、お互いに相手国の言語を学んでくるという交流のスタイルが確立した。学校紹介においてもこれまでのスライドを使用した説明ではなく、本校生徒一人一人に配付された iPad を駆使した相手に理解してもらいやすい長編動画を作成するなど、もてなし方にも変化が見られた。

2 年 A コース（理系・文 I コース）で行われた現代文の授業では、教科書の内容に対し、グループ活動によって日韓協同で答えを模索した。沃川高等学校の生徒は日本語で黒板に板書するなど初めての授業体験を楽しんだ。3・4 限は家庭科で桜餅やわらび餅を作り、着付け、茶道体験をしてもらった。昼食は学食で好きな物を食べてもらったが、韓国語のメニューを用意したことで、注文が非常にスムーズに通った。午後は旧閑谷学校を訪れ、本校のガイドボランティアの生徒の話を聞きながら、日韓の文化の違いを実感していた。観光後は来日前から SNS で予めつながっていた本校生徒それぞれのホームステイ先に向かった。



#### イ 韓国・昌原龍湖高等学校との交流

昌原龍湖高等学校は、7/22に生徒20名、教員2名が来校された。昨年度本校は修学旅行で昌原龍湖高等学校を訪れているが、同校の来校は2年ぶりとなる。交流スケジュールとしては沃川高等学校の交流とほぼ同じ形となったが、授業体験が3年Aコース（理系・文Iコース）との日本史の授業となった。授業はすべて英語で行われ、意見交換を取り入れながら日韓両国の歴史問題を考えさせられる内容となった。生徒同士の議論は活発に行われ、友好関係は深まった。また、昼食時には本校の閑谷學（総合的な学習の時間）で「韓国との異文化交流」をテーマに探究を行っている2年次生グループが「韓国生徒のおもてなし企画」として、ジェスチャーゲームなど様々なイベントで昌原龍湖高等学校の生徒を楽しませていた。

#### ウ 台湾・屏東女子高級中学との交流

国立屏東女子高級中學は、令和2年1/20に生徒33名、教員3名が来校した。屏東女子高級中學も、本校への来校は平成30年2月以来、2回目であった。歓迎式典では、令和2年度に修学旅行で台湾を訪れる本校の現1年次生29名のうち、有志で立候補した代表生徒8名が中国語で司会・進行を行った。その後は、スポーツ交流や日本食づくりを通して両校生徒が交流した。昼食後は韓国の2校と同じく旧閑谷学校を訪れ、本校のガイドボランティアの生徒の話を聞きながら本校の源流となる閑谷学校の歴史について学んでもらった。その後学校に戻り、放課後の部活動見学を行った。日本の部活動の様子を見て、屏東女子の生徒たちは興味深い様子だった。

#### エ 今後の課題

今年度において残った課題としてはホストファミリーの確保が挙げられる。姉妹校締結後、初めてのホームステイ受け入れとなったが、ホストファミリーの希望家庭が非常に少なく、韓国側の要望に応えられない部分もあった。1名の生徒受け入れに対して、一律3,000円の支給を開始したが、20名を超える生徒が来校した昌原龍湖高等学校との交流においては、本校教職員2名がホストファミリーとなるなど、ホームステイ先の確保においては課題を残す結果となった。現在、2年次生の閑谷學で「韓国との友好関係」を探究テーマに掲げているグループが、「ホストファミリーを増やすにはどう対策すべきか」という課題に対して探究を開始した。その結果を踏まえながら、来年度以降の体制を整えていきたい。

## (8) 全国募集に係る取組

岡山県では、平成 30 年度高等学校入学者選抜から生徒の全国募集を開始することになり、本校が最初の実施校（平成 30 年度入試では本校のみ）となった。全国募集の実施に向けた初年度の動きから今年度（全国募集開始から 3 年目）の動きまでを報告する。

### ア 全国募集開始の経緯

本校は、庶民教育のための日本最古の郷校である閑谷学校の歴史を承け継ぎ、学ぶ意志のある地域の若者を受け容れ、多様な資質・能力を最大限伸ばさせてきた。戦後の学制改革によって学区制が導入される以前は、岡山以外の地からも閑谷学校に集った若者が切磋琢磨していたことから、生徒の全国募集については、以前からその実施を希望してきた。

岡山県教育委員会は、令和 10 年度を目途とする「岡山県高等学校教育研究協議会」の中間まとめを受け、平成 29 年 3 月、小規模化する学校において、県外から高い目的意識を持った生徒を受け入れることにより、生徒同士の切磋琢磨による学校の活性化を一層進めることを趣旨として、第 1 学年の募集定員が 160 人を下回る学校等において、科ごとに全国募集の実施を可能とした。

また、実施校については、学校の魅力化に積極的に取り組むとともに、生徒の寄宿先を確保するなど、実施準備が整うことが条件とされた。

本校は、以下の 3 点を挙げて、平成 30 年度入試からの全国募集実施を希望し、平成 29 年 5 月に本県最初の全国募集実施校として、本校が決定された。

- (ア) 総合的な学習（探究）の時間を中心に、地域の多様な教育資源を活かした体験的な学習や探究的な学習をとおして、地球規模の視野で考え、地域視点で行動するグローバル人材を育成しているが、この取組に賛同し、地域おこしやグローバルな課題の解決に関心を持つ若者を増やす。
- (イ) 東備地域外へ移住した親世代の子どもが親の実家（祖父母宅）で高校生活を過ごす“孫ターン”を促進するため、地元市町に協力を得て、広報誌等で身元引受人への登録を呼びかける。現時点で、身元引受人の候補者がおり、希望する生徒に紹介できる。
- (ウ) 地元 2 市 1 町（備前市、赤磐市、和気町）の教育委員会へ、本校が平成 30 年度入試から全国募集を実施する旨説明を行い、了解を得ている。また、広報活動への協力及び支援について依頼しており、広報誌への掲載等について内諾を得ている。

## イ 全国募集の概要

(ア) 実施する科 普通科・キャリア探求科

(イ) 募集方法

- ①普通科、キャリア探求科ともに、特別入学者選抜において、普通科8人、キャリア探求科1人を募集する。
- ②特別入学者選抜での合格内定者数が、科の募集人員を満たさなかった場合は、一般入学者選抜〔第Ⅰ期〕で募集人員に満たない人数を募集する。

(ウ) 出願資格・条件

次のいずれにも該当する者とする。

- ①志願者及び保護者が県外に居住していること。
  - ②当該科に対して高い目的意識を持つこと。
  - ③令和2年4月7日までに、県内に保護者に代わる身元引受人が居住していること。
- ※県外の自宅から通学する場合は、身元引受人は不要。

## ウ 全国募集実施のための推進組織

全国募集の実施にあたり、広報活動や生徒受け入れのための準備等を円滑に行うための組織を初年度、設置した。

(ア)「活力ある学校づくり（全国からの生徒募集）研究推進委員会」

本校校長と職員、和気町職員や企業関係者、同窓会、PTA、県教育委員会職員が、学校の魅力づくり、生徒の受入体制、生徒募集の方策等を研究協議する。年3回開催。

(イ)「全国募集検討委員会」

教頭、主幹教諭、指導教諭2名、教務課長、進路指導課長、和気町支援職員2名で構成された校内の検討組織。

## エ 広報・募集活動

(ア) 中学校等への説明

兵庫県西部の中学校及び関係教育委員会等を訪問し、広報活動を行っている。まず初年度は、実施校決定・公表を受けて、最寄りの兵庫県立上郡高等学校及び上郡町、赤穂市、相生市西部の5中学校（上郡中、有年中、双葉中、那波中、矢野川中）、関係教育委員会（上郡町、相生市）を訪問し、全国募集の趣旨等について説明した。当初は、本校への通学利便性を考慮し、対象をJR山陽本線沿線の上記の5中学校に絞って活動した。その結果、夏のオープンスクールでは当該地域からも参加があった。このことを受けて、広報活動強化のため、秋の地区別学校説明会を上郡地区、相生地区



でも開催することとした。

秋の地区別学校説明会では、当初対象としていなかった J R 赤穂線沿線の中学校から参加があり、広報対象を再検討し、J R 赤穂線沿線の赤穂市立中学校 4 校（赤穂西中、赤穂中、赤穂東中、坂越中）と智頭急行線沿線の佐用町立中学校 2 校（上月中、佐用中）を加えた。

兵庫県内の中学校への広報活動を通じて、兵庫県西部は県内の私立高校が少なく、多くの生徒が岡山県の私立高校を受検している実態があること。また、兵庫県の高校入試制度改革によって通学区域が広がり、中学生にとってはより近くの学校という点で本校も十分選択肢となりうることがわかった。2 年目から今年度にかけても、兵庫県西部地域での広報活動は初年度と同等の内容を行っている。

#### (イ) 首都圏等（東京・大阪）での広報活動

東日本大震災以降、首都圏から本県の高校への入学を希望するケースが増加したことや、和気町を訪れた移住希望者から高校入学に関する問合せがあったことから、大都市からの志願者掘り起こしの広報活動は、まず、和気町の移住関係施策と連携して実施することとし、岡山県が主催する移住・定住関連イベントに参加した。

##### a 「地域みらい留学」、「東京私塾協同組合」合同説明会

他県の全国募集実施校との合同説明会に今年度は大阪府、愛知県、東京都（2 回）と計 4 回参加した。初年度に本校ブースを訪れていただいた中学生は若干名だったが、3 年目を迎えた今年度は 33 組と本校の認知度の上昇を肌で感じる事ができた。本校生徒を各地に帯同させ、生徒の手で学校説明会を開いたり、ブースにて中学生との進路相談も行ったりしている。

##### b 広報媒体：広報用チラシ及び全国募集用の WEB ページ

広報用チラシ及び本校ホームページにリンクする全国募集用の WEB ページを、和気町の支援を受けて、専門業者に委託して作成した。広報用チラシ及び WEB ページは、本校ホームページで公開している。

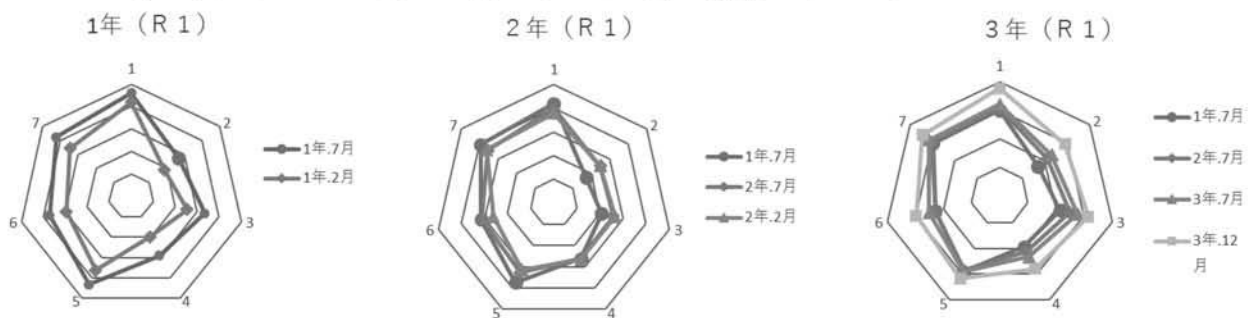
### Ⅲ 評価

#### 1 7つのチカラアンケート結果

令和元年度において、本校ではすべての教育活動を通し、7つのチカラ（「自分を理解する力」「職業とつなぐ力」「考える力」「行動する力」「コミュニケーション力」「チームワーク力」「自立する力」）の育成を目指し取り組んでいる。そして、この取組の中で、特に意識していることは、各活動（授業等）の中での探究的实践である。知識・技能の習得をはじめ、課題発見・解決の实践（各教科での「パフォーマンス課題」や「総合的な探究（学習）の時間（「閑谷學）」）などを通し）を行っている。この実践によって、生徒個々の7つの資質・能力が育まれ、卒業時には、本校の目指す「『恕』の心を持って地域と協働する探究人」へと成長し、自らの進路実現を果たしていくことを期待している。

##### （1）調査とその推移について

7つの資質・能力調査は、1・2年次は7月の中間期と「探究学習発表会」（2/1）後に、3年次は7月の中間期と「卒業探究発表会」（12/19）後にアンケート形式で行った。各年次の推移の傾向として、1年次においては、7月の調査でのデータが概ね高い数値であったため、傾向が見えにくくはあるが、その中でも「自分を理解する力」「自立する力」に成長を窺えるデータがある。2年次においては、2年次の7月に落ち込んでいたデータが、特に「考える力」「行動する力」「コミュニケーション力」「自立する力」において概ね上がっており、また、「職業とつなぐ力」「チームワーク力」においてもインターンシップに関する項目など7月のデータを上回る結果となっている。3年次については、7月のデータと比べて概ねそれを上回る結果となった。



##### （2）まとめ

各年次でのデータの推移は、総合的な探究（学習）の時間（「閑谷學」）での発表会後のものであり、多くの生徒が、この発表会を目標に、課題解決に向けて「自分」を、そして、「地域とのつながり」を意識できるようになっていったのではないと思われる。ただ、各年次のデータの推移の過程には、多くの課題が絡んでおり、その課題解決のためにも、本校における教育活動がより横断的なものになるよう、教員間での共通理解を図り、更に授業改善等の工夫をしていけたらと考える。



7つのチカラ アンケート集計 (R2, 2)

4. とてもあてはまる 3. 少しあてはまる 2. あまりあてはまらない 1. ほとんどあてはまらない の平均点

	R1.7	R2.2	H30.7	R1.7	R2.2	H29.7	H30.7	R1.7	R1.12
<b>1. 自分を理解する力</b>	1年	1年	1年	2年	2年	1年	2年	3年	3年
1 自分の得意なことがわかっている	3.15	3.05	3.08	3.06	2.91	3.02	2.99	3.01	3.21
8 自分の好きなことがわかっている	3.44	3.36	3.33	3.23	3.36	3.44	3.38	3.25	3.38
15 自分の好きなことは、将来の職業につながっていくと思う	3.24	3.25	3.06	2.96	2.85	3.08	2.95	3.04	3.20
22 将来の目標がある	3.03	3.02	2.86	2.85	2.94	2.79	2.96	3.06	3.22
29 自分はどうな仕事に興味があるかわかっている	3.16	3.15	2.92	2.97	2.93	2.92	2.95	3.00	3.12
36 職業を選ぶとき、重視したいことがわかっている	3.12	3.06	2.90	2.91	2.91	2.71	2.82	3.09	3.08
43 働く上で、何を大切にしなければならぬかわかっている	3.22	3.17	3.03	3.02	2.98	3.01	3.09	3.00	3.13
50 これからの人生を生き抜く上で、自分が大切にしたいことがわかっている	3.26	3.14	3.03	2.99	2.91	3.04	3.01	2.97	3.21
	25.61	25.20	24.21	23.99	23.79	24.01	24.15	24.42	25.53
<b>2. 職業とつなぐ力</b>	1年	1年	1年	2年	2年	1年	2年	3年	3年
2 いろいろな職業について知っている	2.57	2.45	2.38	2.54	2.47	2.31	2.30	2.43	2.64
9 いろいろな職業について、それぞれどのような進路をとれば、その職業につけるか知っている	2.78	2.56	2.53	2.66	2.63	2.49	2.57	2.58	2.82
16 いろいろな職業について、それぞれにどのような能力や知識が必要か知っている	2.81	2.71	2.63	2.66	2.62	2.52	2.66	2.65	2.85
23 いろいろな職業が、それぞれ社会でどのように役立っているか知っている	2.90	2.85	2.60	2.75	2.74	2.63	2.72	2.83	2.93
30 インターンシップなどの職業体験は、自分の職業を選ぶ上でためになると思う	3.16	3.15	3.04	2.97	3.07	2.92	3.08	3.15	3.23
37 職業についている人の話を聞いたことで、仕事の大変さがわかってきたと思う	3.18	3.03	2.91	2.98	3.07	3.00	3.09	3.02	3.27
44 人の話や経験を通して、仕事のやりがいや楽しさについて、わかってきたと思う	3.18	3.05	2.81	2.95	2.94	2.83	2.98	2.97	3.02
51 自分が目標とする職業につくために、今のような勉強や準備をしなければならぬかわかっている	3.13	3.09	2.84	3.01	2.97	2.68	2.84	3.00	3.07
	23.71	22.89	21.74	22.52	22.51	21.38	22.24	22.64	23.83
<b>3. 考える力</b>	1年	1年	1年	2年	2年	1年	2年	3年	3年
3 困ったときには、どこに問題があるか見つけようとする	2.98	2.86	2.80	2.86	2.82	2.78	2.90	2.97	3.09
10 やるべきことや問題があるとき、今の自分の状況を分析する	2.93	2.80	2.60	2.78	2.74	2.69	2.72	2.86	3.00
17 課題を解決するための方法を、あれこれと考える	3.03	2.89	2.69	2.78	2.83	2.72	2.84	2.88	2.95
24 何かを選択するときには、その結果がどうなるかを推測する	2.98	2.84	2.58	2.68	2.71	2.74	2.82	2.95	3.05
31 何かをするときには、優先順位をつけてとりかかるとする	3.21	3.05	2.98	3.00	3.03	2.99	3.00	3.13	3.08
38 実行した後は、それが確実にできたかを見直し、改善する	2.97	2.93	2.56	2.72	2.75	2.63	2.72	2.70	2.96
45 自分が選択したことに責任を持つ	3.26	3.21	3.17	3.02	3.07	3.08	3.13	3.18	3.23
52 新しいアイデアをいろいろ考える	3.00	2.98	2.68	2.74	2.68	2.68	2.85	2.91	2.96
	24.34	23.55	22.06	22.57	22.64	22.31	22.98	23.57	24.30
<b>4. 行動する力</b>	1年	1年	1年	2年	2年	1年	2年	3年	3年
4 より良い解決策を見つけるために、できるだけ多くの情報を集める	2.91	2.75	2.70	2.75	2.86	2.78	2.88	2.88	2.96
11 何かを始める前には、必ず計画を立てる	2.84	2.78	2.49	2.81	2.62	2.40	2.61	2.69	2.79
18 自分が立てた計画を実行する	2.93	2.82	2.74	2.77	2.83	2.58	2.64	2.78	2.88
25 何かをしようと思ったら、すぐにとりかかるとする	2.95	2.74	2.81	2.71	2.73	2.74	2.69	2.74	2.86
32 問題を解決するために、できることから片付けていく	3.17	3.05	3.05	3.00	3.02	3.14	3.14	3.10	3.08
39 さまざまなことに、自分から進んで取り組む	3.00	2.88	2.88	2.79	2.80	2.68	2.73	2.72	2.96
46 新しいことに、積極的に挑戦する	3.03	2.99	3.04	2.87	2.88	2.78	2.75	2.88	2.97
53 失敗や困難に直面しても、最後まであきらめず、ねばり強く努力する	3.07	2.96	2.91	2.91	2.90	2.79	2.81	2.88	3.12
	23.90	22.97	22.62	22.62	22.65	21.89	22.25	22.66	23.61
<b>5. コミュニケーション力</b>	1年	1年	1年	2年	2年	1年	2年	3年	3年
5 自分の考えや気持ちをうまく表現できる	3.01	2.80	2.69	2.69	2.59	2.73	2.63	2.72	2.85
12 自分から積極的に話しかける	2.96	2.87	2.60	2.65	2.49	2.73	2.59	2.54	2.81
19 相手の伝えたいことを理解するために、いろいろな質問をする	3.02	2.95	2.64	2.80	2.73	2.68	2.80	2.89	2.88
26 話を聴くときは、その人の気持ちをわかろうとする	3.29	3.15	3.14	3.06	3.11	3.14	3.15	3.14	3.18
33 相手の立場になって考えることができる	3.27	3.21	3.09	2.99	3.01	3.12	3.22	3.12	3.20
40 人のためになることを進んで行う	3.14	3.00	3.06	2.98	2.87	3.01	2.94	2.91	3.03
47 周囲の状況を見て、ふさわしい言葉づかいや態度・行動をとる	3.29	3.29	3.17	2.97	3.11	3.14	3.16	3.18	3.18
54 人に会ったときは、きちんと挨拶する	3.35	3.36	3.34	3.15	3.23	3.27	3.22	3.33	3.22
	25.32	24.62	23.73	23.29	23.14	23.82	23.71	23.83	24.35
<b>6. チームワーク力</b>	1年	1年	1年	2年	2年	1年	2年	3年	3年
6 人の意見を聴いて、それを尊重する	3.37	3.25	3.04	3.05	2.98	3.14	3.08	3.15	3.15
13 グループ活動のときに、進んでリーダーシップをとることができる	2.48	2.55	2.37	2.56	2.45	2.24	2.21	2.28	2.63
20 グループ活動のときに、自分から発言したり、意見を述べる	2.90	2.80	2.59	2.79	2.59	2.53	2.59	2.63	2.87
27 グループ活動のときに、どんな役割が必要かを考えて、自分の役割を選ぶ	3.08	2.91	2.81	2.83	2.87	2.83	2.78	2.91	2.93
34 自分の伝えたいことを、相手がわかるように伝える	3.13	3.05	2.87	2.90	2.84	2.83	2.88	2.96	3.02
41 人に対して、自分から働きかけて、理解や協力を得る	3.07	2.93	2.94	2.94	2.77	2.74	2.83	2.82	3.03
48 自分の果たすべき役割に、責任を持つ	3.30	3.20	3.23	2.96	3.02	3.05	3.08	3.12	3.16
55 人と協力して行動する	3.39	3.27	3.31	3.08	3.11	3.21	3.14	3.15	3.16
	24.70	23.95	23.16	23.11	22.63	22.57	22.59	23.04	23.97
<b>7. 自立する力</b>	1年	1年	1年	2年	2年	1年	2年	3年	3年
7 うまく気分転換して、気持ちを切り替える	3.27	3.08	2.94	3.05	2.93	3.15	2.99	2.96	3.12
14 困ったことがあるとき、信頼できる人に相談する	3.29	3.27	3.17	2.94	3.07	3.14	3.06	2.94	3.11
21 自分がどんな人生を送りたいのか、真剣に考えたことがある	3.09	2.95	2.78	2.86	2.89	2.84	2.97	3.14	3.13
28 将来どんなことにお金が必要になるか、考えたことがある	3.13	2.96	2.98	2.94	3.02	3.08	3.08	3.11	3.21
35 将来、自分の役に立つ資格について知っている	2.85	2.76	2.72	2.80	2.66	2.54	2.69	2.84	3.00
42 社会人としてのマナーを知っている	3.16	3.17	3.14	3.00	3.01	3.20	3.15	3.10	3.09
49 約束やルールをしっかり守る	3.29	3.27	3.29	3.02	3.16	3.28	3.19	3.25	3.18
56 将来のことを考えて準備する	3.16	2.99	2.93	2.94	2.88	2.71	2.95	2.97	3.04
	25.25	24.46	23.95	23.56	23.62	23.94	24.08	24.31	24.88
<b>8. 本校独自</b>	1年	1年	1年	2年	2年	1年	2年	3年	3年
57 学校生活に満足している	3.20	2.95	2.87	2.83	2.80	3.00	2.73	2.80	2.82
58 総合的な学習の時間(関谷学)では、将来社会に出て行く上で必要な力が身についている	3.05	2.89	2.82	2.80	2.92	2.83	2.68	2.81	2.88
59 自分の地元を誇りに思い、文化・伝統を大切にしている	3.11	2.90	2.97	2.90	2.81	2.87	2.68	2.87	2.95
60 自分の考えと異なる意見も尊重し、公平な立場で聴いている	3.28	3.20	3.07	3.00	2.97	3.10	2.96	3.07	3.18



IV 関係資料

1 新聞記事

**岡山県立和気閑谷高等学校と岡山商科大と包括連携に関する協定締結式**



包括連携協定を結び、握手を交わす井尻学長（左）と香山校長

**岡山商科大と和気閑谷高 包括連携協定を結ぶ**

岡山商科大（岡山市北区津島京町）と和気閑谷高（和気町尺所）は16日、学生や教職員の相互交流などを進めるための包括連携協定を結んだ。

同高は本年度、文部科学省の「地域との協働による高校教育改革」の教員が派遣されるほか、学生同士の交流も

推進事業」の指定校となっており、生徒が地域の課題を見つけ、解決に向けた手法などを研究している。今回の協定で同高が行っているマーケティングなどの商業系の授業に同大の教員が派遣されること、

同大であった調印式で、井尻昭夫学長と香山真一校長が協定書を交わした。井尻学長は「研究成果を提供し、学びに役立ててもらいたい」とし、香山校長は「授業の中身を深め、地域の活性化にも貢献したい」と話した。

同高が大学と包括連携協定を結ぶのは初めて。同大の高校との包括連携協定は、岡山市立岡山後楽館高、岡山商科大付属高、県立津山商業高に続き4校目。（須藤里恵）

2019年7月18日 山陽新聞 岡山市民版

全県版

教育改革指定校・和気閑谷高

小中高生サミット計画

地域課題解決へ事業報告

文部科学省が本年度、和気閑谷高(和気町尺所)は協議会を同高で開き、始めた「地域との協働」24日、地域住民や保護者らと学校運営の基本による高校教育改革推進事業の指定校・和気一方針を検討する定例の



和気閑谷高が文部科学省の事業で取り組む内容を報告した協議会

2021年度までの3年間に同事業で取り組む内容を報告した。香山真一校長ら同高教員が委員約20人に説明。生徒が大学教授や地元企業の経営者らから指導を受けながら、東備地域の抱える課題の解決に向けた手法を考える授業のほか、地域の問題について考える小中高生のサミット実施などを計画しているとした。

委員からは「(和気閑谷高が行っている)生徒の全国募集でも積極的に事業をアピールしてほしい」「生徒が社会に出ても困らないようにコミュニケーション能力を高める教育も充実させてほしい」などの意見が出た。

同事業は身近な課題をテーマにして生徒の学習意欲を高め、地域を担う人材育成や地方創生につながる狙い。県内では城東高も指定を受けている。

(太田孝一)

2019年7月25日 山陽新聞 全県版







### 新・地域考

要領を踏まえた取り組みで、探究的な学びを通して新しい時代に地域を支える人材を育成し、地方創生につなげる狙いもある。

## 岡山 高校に地域連携組織

岡山県立岡山第一高等学校は、地域との連携による高校の代表により組織化された。

## 地方創生へ人材育成

町の首長や教員、商工会議所・商工会のトップ、地域住民ら18人が名を挙げた。岡山県立岡山第一高等学校は、地域との連携による高校の代表により組織化された。



行政や経済界の関係者らが集まって発足した和気開谷高の地域連携組織「魅力化推進協議会」=7月24日

岡山県教による同様の事業を行う高校でも、地域連携組織づくりが進む。本年度から始まった「高校魅力化推進事業」の6校(和気開谷を含む)や、2018年度から行っている「おかもま創生 高校パワーアップ事業」の計10校などだ。

4面に続く (岡山一郎)



パンは、瀬戸南高(岡山市東区瀬戸町沖)の生徒が作ったソースを、クリームチーズと合わせて焼き込んだ。ソースの濃厚な甘みにチーズがアクセントとなっている。1個90円で250円、200個を販売する。

パスタラサンソースのパン  
黒豆入りクッキー  
タピオカ風ドリンク

## 東備の味召し上がれ

和気開谷高(和気町尺所)のキャリア探求科2年生が、東備地域の特産品を盛り込んだ新商品を地場2社の協力を得て開発した。赤警市特産の西洋ナシ・パスタラサンのフルーツソース入りパンと同市産の黒豆を生地に練り込んだクッキー、タピオカ風ドリンクの3種類。23日に和気ドーム(岡町益原)で開かれる「ふるさとまつり」で販売する。(岡亮佑)

## 和気開谷高 生徒が販売

「商品開発」の授業を履修する16人が4月から着手にメニューの決定や商品に貼るシールのデザインに苦戦などに取り組んできた。笹星星空さん(17)は商品の特徴が分かるよう、デザインを工夫した。自慢の味を売しだ」と話している。

2019年11月23日 山陽新聞 東備版

東備版

山陽新聞デジタル  
https://www.sanyonews.jp





円にしかならないという結果が出ている。

### 2・3 努力は必ず報われる？

「努力は必ず報われる」この言葉は時に私たちがつらいとき、背中を押してくれる言葉である。しかし、経済的な困難を抱えるご家庭と話をしていると、残念ながら、この社会では努力が報われないことがあると痛感する。まず貧困になる原因として東日本大震災などの自然災いがいなどで収入や資産を失ったなどや、家庭が父子、母子家庭や親が病気で働けないなどがあげられる。ここで公益社団法人チャレンス・フォー・チルドレンがサポートしている子ども事例を取り上げる。父親は公務員、母親は専業主婦だったが、のちに父親に多額の借金があることが判明し、両親が離婚。母親は離婚後、3人の子どもを支えるためにトリプルワークを始める。母親は良い仕事に就くため資格を取ろうと、夜遅くまで勉強もしていたが、ある日、過度のストレスからか鬱病になって働けなくなってしまうため、貧困の世代連鎖が生まれていく。親の経済的貧困は、子どもから学習の機会やさまざまな体験活動の機会を奪うことにつながる。教育機会に恵まれなかったことで低学力・低学歴になってしまった子どもは、成長したときに所得の低い職業につきかざるを得なくなり、更には彼らの下の世代にも貧困が連鎖してしまう。

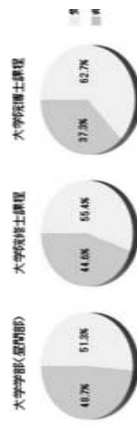


### 3 低所得と上級学校

家庭が低所得だと上級学校には行けないのだろうか。多くの学生は、奨学金を借りてその多額の学費をまかなっている。日本学生支援機構の「学生生活調査」(平成26年度)によると、奨学金を受給している学生の割合は、大学学部(昼間部)で51.3%、大学院修士課程で55.4%、大学院博士課程で62.7%となっている(図表4参照)。

特に大学院生では利用割合が高くなっており、大学院の費用まで親が全面的に負担しているケースは少ないようだ。

図表4 奨学金を受給している割合



### 3・1 上級学校の費用

文部科学省令による標準額では国立大学が入学科料28万2,000円、授業料53万5,800円。公立大学が入学科料39万3,426円、授業料53万7,809円。大学4年間の学費の合計=入学科料+1年間の授業×4年分という計算で以下を詳細にまとめると、国立大学の学費は入学科料は28万2,000円で授業料：53万5,800円×4合計の242万5,200円。公立大学の学費は入学科料は39万3,426円で授業料53万7,809円×4の合計254万4,662円となる。入学金と授業料以外でかかる費用は受験検定料、入学時の各種保険代金、教科書代、交通費、一人暮らしの場合は家賃、その他飲食・交際費

で少なくとも4年間で300万円程度は必要となる計算だ(図表5参照)。

国立大学	公立大学
授業料 282,000円	授業料 393,429円
入学金 535,800円	入学金 537,890円
合計 2425,500円	合計 2544,662円

### 3・2 奨学金と若者

奨学金は就職後の返済が条件となっており、無利息・利息付きに関わらず、学生は就職後に数年あるいは数十年かけて、返済しなければならぬ。返済が滞ると滞納金の5%が遅延金として上乗せされ、3カ月滞り、一度ブラックリストに登録されると、返済後5年間はリストに名前が残る。ローンが組めない、クレジットカードが作れないなど、社会生活に支障をきたすため注意が必要だ。日本学生支援機構 JASSO の場合、利子付きは年(365日あたり)3%を上限とする利息付。無利子は特に学生及び生徒で経済的理由により著しく修学困難な学生に貸与される。また、給付型という返済が不要の奨学金も存在するが、条件は厳しい。以下はそれを記す。

#### 学力及び資質

- (1) 十分に満足できる高い学習成績を収めている
- (2) 教科以外で大変優れた成果を収め、概ね満足できる学習成績を収めている
- (3) 社会的養護を必要とする者であって、進学後特に優れた学習成績を収め

る見込みがある

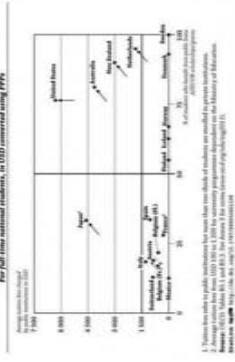
家計については

- (1) 家計支持者が住民税非課税(市区町村)民税所得割が0円)であること
- (2) 生活保護受給世帯であること
- (3) 社会的養護を必要とする人(児童養護施設入所者等)であることが条件だ。

### 3・3 海外と日本の奨学金

OECD(経済開発協力機構)とは、加盟している国は日本も含め、北米、ヨーロッパなどといった先進国が多く、そのため「先進国クラブ」などとも呼ばれている。世界の高等教育の柱は、低学費、給付型奨学金による補助。教育システムを「エリート教育」から「職業教育」に拡大している。

図表5 公的機関による奨学金の提供と学生の受益(2008-09年)



図表6

図表6は縦軸が大学の年間学費、横軸が公的奨学金/ローンを受けている大学生の人の割合を示している。

- ① グループは授業料が高いが、奨学金が充実にしているグループで、該当国はアメリカ、オーストラリア、ニュージーランドなど。(右上)



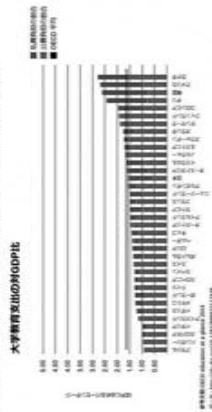
②グループは授業料が高く、奨学金も充実していないグループで該当国は日本のみ。(左上)

③グループは授業料が安く、奨学金が充実していないグループで該当国は大隈ヨーロッパ、スイス、メキシコ、フランス、ベルギーなど。(左下)

④グループは授業料が安く、奨学金も充実しているグループで北欧のノルウェー、デンマーク、フィンランド、スウェーデンなど。(右下)

これを見ると日本だけが孤立していると述べている。

図表7は「大学教育支出の対GDP比」を示したものである。このグラフでは日本は、ほかのOECD諸国と全体的な支出は一見変わらない。しかし、その内訳は、赤の棒グラフ(公的支出、すなわち国の数値が他国



と比べて極めて低く、私費支出の割合すなわち家庭からの支出が高いことがわかる。要するに、国がまともに大学学費への援助を出さないから、親が苦労して子供の学費を捻出しているということだ。

3・4 ブラック奨学金  
 学生を支援するための資金である、奨学金を活用すれば充実した環境下で教育を受けられると仮定した。奨学金について調査

したところ、今野春貴氏の「ブラック奨学金」にあるように、奨学金は借金であり卒業後多額な利子と元金を返済しなければならず、子供の世代まで連鎖する悪影響に苦しむ人も多かった。3でも述べたように、大学生以上になると、ほとんどの学生が奨学金を利用して返済しきれず、学校をやめてしまう学生や、ブラックバイトで学業に支障をきたす学生や、学費のため風俗を選ぶ学生もいる。このような状況に陥る前に、様々なケースに応じたマネープランを準備する必要がある。

4 教育のセーフティネット  
 教育におけるセーフティネットを広げていく。教育にかかる費用は学費だけではなく、子供の成長に合わせたかかる額も変わってくるため、ある程度予測し、無理のない資金計画を立てることが重要だ。そこで多くの親が利用するのが学資保険だ。学資保険とは、子供の教育費を貯蓄するための保険である。学資保険の存在をあらかじめ知っておくことで、子供に経済的な理由で進学をあきらめさせることがなくなるかもしれない。

4・1 自尊心低下=学力低下  
 しかし、学資保険などで準備をしていない子供は、進学することをあきらめなければならぬのか。そんな子供をサポート、支援できる制度はないのか。どんな制度があれば誰もが気軽に利用できる、経済的な理由で教育をあきらめる子供が減るのか。家庭の経済環境が悪い子供は、自尊心が低い傾向にある。周りができていることが自分にはできない、周りの子は塾に行っているのに

トでいい点を取っているのに自分は塾に通えない。参考書が買えない。経済的な格差が直接学力に差を産む原因の一つでもあるが、服が買えない、ゲーム機が買えないから周りの話についていけないなども自尊心低下につながる、それが学力の格差の原因の一つにもなる。

4・2 学習支援  
 東京を中心に全国で教育支援活動を行う認定NPO法人カタリバは、無料の放課後教室での居場所づくりや学習支援などを行っている。このように学費に関しての直接的な支援だけでなく子供をサポートすることもできる。誰もが気軽に利用できる学力向上につながる活動をしていくことも教育格差是正につながるのではないかと考える。私はファイナンシャルプランナーの資格を取得しそれを活用し、NPO団体などを立ち上げ、地域の幼稚園や保育園などの地域の施設で保護者にマネープランを提供する活動などをしたいと思っている。

5 分析結果、解決策  
 分析結果

- ・格差が起こってしまうのは、デフレ経済が関係しているため。
- ・格差の原因は、自然災いが、父子、母子家庭、親が病気で働けないなど。
- ・上級学校進学には巨額の学費が必要であり、日本では海外と比べて、補助が少ない。
- ・上級学校へ行くための手段として奨学金があげられるが、多額の借金を背負う可能性がある。インターンシップで実際に働いている人の話を伺うと、大切なのはやる気

で、学歴=仕事内容ではないようだ。

結論

教育格差の何が原因なのか、どうすれば解消できるのかを述べてきたが、日本は先進国の中で教育に対する対策が遅れていること、奨学金では教育をサポートに不十分であること、それでもやむを得なくその道を選び奨学金の恩に陥ってしまう学生が多くなるが、今後の日本を担う貧困の連鎖を阻止するためには子供が安心して自分の行きたい学校へ、経済的にあきらめられる子供がいなくなるそんな政策を作る必要がある。しかし、これらの開発は一朝一夕には実現しない。私たちはまず、子供の貧困や教育格差について意識すべきだ。私たちにできる支援を少しずつ多くの人が様々な取り組みを行うことで子供の貧困が引き起こす教育格差の是正につながるかもしれない。いったって未来を創るのは若い世代だ。子供の貧困は他人ごとではないことを広く知ってもらうことが第一だと私は考えた。

参考文献

- 日本における教育格差-香川大学経済学部  
[www.ec.kagawa-u.ac.jp/~tetsuta/jeps/no7/Maegawa.pdf](http://www.ec.kagawa-u.ac.jp/~tetsuta/jeps/no7/Maegawa.pdf)
- 平成26年度学生生活調査-JASSO  
[http://www.jasso.go.jp/about/statistics/gakusei\\_chosa/2014.html](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/gakusei_chosa/2014.html)
- 生活費が大変な大学生<格差>がさらに広がる可能性が - 渡辺敦司  
<https://blogs.com/article/174458/>
- 東京私大教連 私立大学新入生の家計負担調査 2015 (平成 27) 年度



<http://www.tfpu.or.jp/2015kakeihutan-chousa-essence20160406.pdf>  
 拡大し続ける子ども貧困一結局、日本の教育格差はどこで生まれるのか？  
<https://children.publishers.fm/article/1026/>  
 子供の貧困と教育格差 | CFC-チャンス・フォー・チルドレン  
<https://cfc.or.jp/problem/>  
 国公立・私立大学の学費は4年間でどれくらいかかる？ | セロフインターン  
<https://01intern.com/magazine/archives/15809> MAGAZINE  
 奨学金を利用している学生必見！就職活動で考慮すべきポイントとは？  
<https://www.nikki.ne.jp/magazine/entry/2018/03/3002>  
 奨学金の制度（給付型）-JASSO-日本学生支援機構  
<https://www.jasso.go.jp/shogakukin/kyu/fu/index.html>  
 大学・大学院等：文部科学省  
[http://www.next.go.jp/a\\_menu/kyoikuhi/detail/1338251.htm](http://www.next.go.jp/a_menu/kyoikuhi/detail/1338251.htm)

貧困家庭から大学進学できるようになるために - 本山勝寛  
<https://blogs.com/article/201903/>  
 日本の大学学費の高さ、奨学金制度の弱さ  
 がわかる OECD のデータ 5 つ。学費無償化を留保しているのは、日本とマダガスカルだけ  
<http://socius101.com/date-of-education-ineed-post-1015/>  
 公共財団法人生命保険文化センター 奨学金を受けている学生の割合はどれくらい？  
<http://www.jili.or.jp/lifeplan/lifeveer/education/10.html>  
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A5%A8%E5%AD%A6%E9%87%91> Wikipedia  
 プラック奨学金 今野晴貴（文春新書）2017年6月  
 日本に本当に必要なもの 18歳からの格差論 井手英策 2016年6月16日 東洋館社

優しい機械とは  
 3年Aコース 矢野 馨  
 [序論]  
 先進国を中心に高齢化の波が広がっている。※[グラフ1-1](#) 例にもれず我々が住む日本も高齢化の波が広がり、もはや高齢化問題に目を瞑ることができない状況となっている。人生100歳時代とはよく聞かなくが、果たしてこの100年間全く介護を必要とせずにご過ごせる人が、どれほど居るのだろうか、残酷なことには、高齢者の大半は介護を必要としている。※[グラフ1-2](#) しかしながら、介護現場では常に人手が不足し、つらい深夜勤務や力仕事などが多くあるため、介護現場では、介護を補助する機械を導入している。安心・安全を常とする介護現場では、機械という存在は高齢者に負担を与えかねない、そのため福祉の現場に導入される機械は、優しなくてはならぬ。本研究では、介護現場における「優しい機械」が何か探っていきたい。

[本論]  
 福祉の現場で利用される機械の優しさとは、大まかに分けて二つある「介護士への優しさ」と「被介護者への優しさ」である。近年では、介護士の人数が減少し高齢者の人数に対応することが困難になっている。また、少子高齢化社会は、高齢者が高齢者を介護する老老介護の問題を引き起こしている。そのため、介護士にかかる負担が拡大し腰痛、関節痛、精神病などの介護障がいを引き起こされている。そのためこれからは、介護

ロボットの製作段階から介護士への配慮を組み込むべきである。  
 一つの事例として私の祖母の話がある。  
 私の祖母が手術した後、取り付けられたCPM (Continuous Passive Motion) ※[写真1-3](#) の機械音に不安を覚え、医師に何度も安全確認を取っていた。しかしながら、医師は大丈夫、大丈夫とあしらっていた。この出来事は、医師（使用者）と祖母（被使用者）の間に認識の差があったため起きた出来事だと考える、医師（使用者）の目線だと使い慣れた使いやすい機械という認識であるが、祖母（被使用者）の目線だと嫌な音がする機械という認識だった。CPM (Continuous Passive Motion) の機械音を削減することでもっと「被使用者」に優しい機械となるだろう。上記により、これからの機械は「使用者」（介護士）と「被使用者」（被介護者）に配慮することにより初めて、優しい機械と言えるのではないだろうか。  
 私が、これからの介護現場をサポートする機械として注目しているのは、パワーアシストスーツである。パワーアシストスーツには様々な形態や使用用途があるが、大半に共通することは人間の動作を支援するというところだ。有名なパワーアシストスーツに筑波大学の山海嘉之らにより開発された、「HAL」という生体電気に反応し動作を支援するパワーアシストスーツである。※[写真1-4](#) この「HAL」は、使用目的によりタイプが分かれ、リハビリテーションや腰への負担を軽減することを可能とした。このように、「HAL」をはじめとするパワーアシ

ストスーツは介護現場やリハビリテーションセンターで活躍し、高齢者や障がいのある人々の助けになるべく開発された。

ここで私は、パワーアシストスーツはまだ人間に優しくなれると考えている。

先に挙げた優しい機械の条件に「使用者」と「被使用者」への配慮というものがある、「被使用者」に対する優しさ、「被使用者」への優しさに視点を当て、パワーアシストスーツ将来のあり方について考えていきたい。

まず初めに、高齢者や障がい者の助けとなるべく生産されたパワーアシストスーツは、残念なこと介護現場であまり使われていないというのが事実である、理由としてパワーアシストスーツは人を抱える際は介護士の負担を軽減できるが、介護の仕事は多岐にわたる。ほかの仕事に取り掛かるたびにパワーアシストスーツを脱ぎ、人を抱える仕事を行うときに今一度、装着する手間がかかる。それに加え、着脱に多くの時間を要する場面がある、介護現場でパワーアシストスーツが普及しないのは、ストスーツが多様な動作に対応することができず、パワーアシストスーツが余計な手間になってしまっている。このことから、「使用者」に優しくないと見える。そして、私が「特別介護老人ホーム岡山千鳥福祉会長船莊」にご協力いただき、パワーアシストスーツに対する意識調査として、「パワーアシストスーツが怖いですか?」「機械を使う介護をどう思いますか?」という二つの質問を主軸に、対話を交えた聞き取り調査を行った際、意外にも高齢者はパワーアシストスーツに抵抗が少ないことが判明した。しかし一方で、介護士のパワーアシストスーツに対する評判は、上記に挙げた装着の手間などに

より悪かった。

そのため、パワーアシストスーツの優しさとは介護士にかかる負担を極力減らすことに注力すべきだと考えた。

[結論]

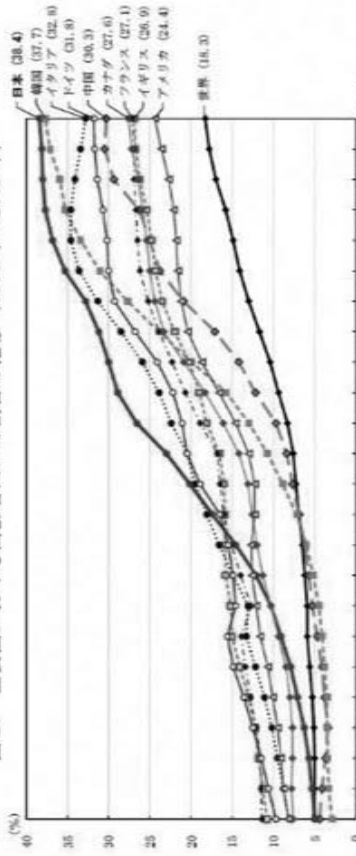
パワーアシストスーツが介護現場で使われるには、やはりスーツが単純な動作しか対応できないところを解決すべきだろう。重い物を持ちあげる動作や、物を握る動作は比較的に簡単な動作である、しかしながら、介護現場の多様な動作は単純な動作では到底対応できない、そのため、複雑な動作に対応できるパワーアシストスーツが求められる。

私は、柔軟な素材を利用したパワーアシストスーツについて可能性を見出している。プラスチックや金属部品などの柔軟性のない素材を利用すると、スーツの可動域が制限され、同時に着用者の行動の多彩さを欠く、結果的に多様な動作に対応する事が出来なくなる。一方で、柔軟性のある素材なら伸縮、湾曲することができると可動域が広がり比較的多くの動作に対応する事が可能になる。

私が介護施設などで調査し、導き出した優しい機械の形とは、ゴムやラテックスといった伸縮性のある素材を利用した、多様な動作に対応できるパワーアシストスーツという形になった。しかしながら、このパワーアシストスーツを実現するには多くの課題が存在する。たとえば、外骨格型のパワーアシストスーツと比べ、柔らかい素材のパワーアシストスーツは筋肉を支援する力が弱くなるという点、多様な動作に対応するプログラム、どのように軽量化しコンパク

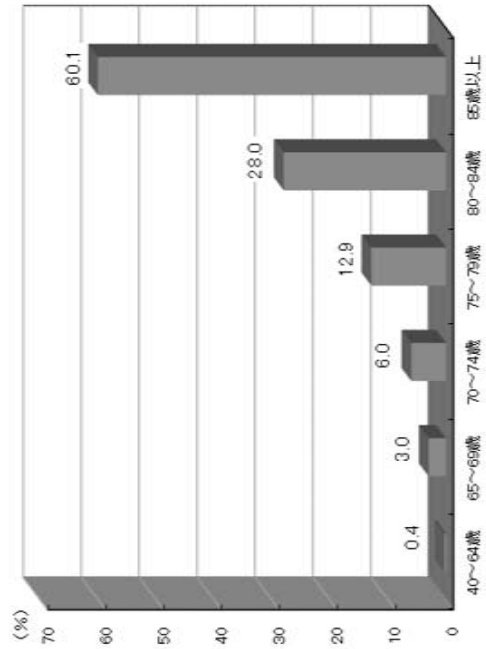
トにするか、心理的効果、動力源、安全性などがある。私は使用者に配慮する思考を保ち、大学でこの多様な課題を解決したパワ

図 21 主要国における高齢者人口の割合の推移 (1950 年～2065 年)



資料: 日本の値は、2015 年までは「国勢調査」、2020 年以降は国立社会保険・人口問題研究所「日本の将来推計人口」  
他国は、World Population Prospects: The 2017 Revision (United Nations)  
注) 日本は、各年 10 月 1 日現在、他国は、各年 7 月 1 日現在

グラフ 1-1



(縦軸は要介護者の割合を示す)

グラフ 1-2





写真1-3



写真1-4

#### 参考文献

- グラフ1-1  
<https://www.stat.go.jp/data/topics/topi1135.html>
- グラフ1-2  
[https://www.jili.or.jp/lifeplan/life\\_security/nursing/2.html](https://www.jili.or.jp/lifeplan/life_security/nursing/2.html)
- 写真1-3  
<https://www.gadelliusmedical.com/ja/p>

#### みんなを笑顔にするには 3年3組 斎藤 杏

##### 1. 探求動機

私は藤工房さんのコラボによるパンの商品開発を2年次からしている。そして、3年次も同じことをしようと思った理由は2つある。1つ目は、研究を進めていくうちに楽しさを覚えみんなの笑顔を増やしたいと思ったこと。2つ目は、2年次でできなかつた米粉を使った商品を作成させたいと思つたことだ。

私は高校卒業後郵便局に就職するが、私は「多くの人に元氣と幸せを届けられる郵便局員」になりたいと思つている。パンでみんなに笑顔を届けたように今度は様々なサービスでみんなに元氣と幸せを届けていきたいと思つている。

##### 2. 探求過程・実践内容

###### 2-1. 2年次の取り組み

「物を作って売る苦労を知る」をコンセプトに、藤工房とコラボして新しいパンの開発を行った。まず初めに全校生徒・教職員にパンについてのアンケート調査を行った。次に、自分たちが作りたいパンをデザイン画に起こし、商品として売るために何度も試作を重ね、あんバターフランスとフルーツパイが完成した。そして、実際にそれらのパンを本校の文化祭を初めとし、さまざまなイベントで販売をした。また、あんバターフランスは藤工房の定番商品に認定され、本校の購買で販売されるようになった。そこで生まれた課題がアレルギー対策だった。

###### 2-2. 3年次の取り組み

「小麦アレルギーの人も一緒にパンを楽しむ

む」をコンセプトに米粉ドーナツとフルーツパイの2つの商品の開発を行った。米粉特有のもちもち感を十分に生かすにはどのような商品を作るのか慎重に考える所から始まった。パン、クッキー、ドーナツと3つの商品からメリット・デメリットを考えた結果ドーナツを作ることに決まった。大きさや1カップに入れる個数、販売形式などを考えることまで行った。また、フルーツパイをジャムから缶詰に変え、フルーツの下にカスタードを敷くことで味も見栄えもよくなりコストも下がった。多くの期待に応えるよう今年もそれらのパンを本校の文化祭で販売をした。一般のお客さんはもちろん校長先生も買いに来てくださった。多くの人にパンを届けることができた。

###### 2-3. コラボの実際

藤工房の窓口となった千田さんとのやりとり

1 回目はそれぞれがどうしようとしていいのかを知るために意見交換をした。その結果、フルーツパイに改良を主に米粉の開発をすることに決まった。

2 回目でフルーツパイはどのフルーツを使うか、米粉は何を作るのかを商品を想像してメリット・デメリットを考えながら作る商品を決定した。

3 回目は藤工房さんにパイ生地だけをもらい自分でフルーツをのせてみた。パイ生地がフルーツの

写真1



汁をずってしまいパイ生地がべたべたになってしまった。そこで、フルーツの下にカスタードを敷きたいという意見を写真1とともに送った。米粉ドーナツは自分が作った



レシピと感想を書いた紙を送った。

4 回目は米粉ドーナツの試作を3つの大きさで作ってもらいどの大きさにするかを決めた。このときフルーツパイは見栄えがあまりよくなかったためトップがかかってしまった。そこで見栄えを良くするためにブルーベリーをのせることにした。(写真2)

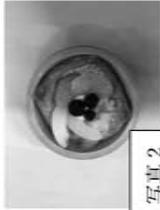


写真2

5回目それぞれが完成し、文化祭で販売するために話し合いをした。

コラボをすす中で難しかったことは、意識疎通だ。相手がどんなものを想像しているのか、どうしたら自分が想像しているものを的確に伝えることができるかを考えながら行った。また、商品を作る中でそれぞれの素材の良さをどう生かすか考える必要があり、そこに難点を感じた。

### 3. 自分の成長

この2年間を通して私は、みんなを笑顔にするためにはまずは自分が笑顔であることが大切であると思った。理由は、自分が楽しいと思っていなければ他人を楽しませることができないのと同じで、自分が笑顔でなければ、他人を笑顔にすることはできないと思ったからだ。私が2年間も研究してきたことは、当たり前なことではあるが一番大切であると同時に一番忘れがちであることのように感じた。社会人としてあるべき姿、接客をする中で大切なことを見つけて出すことができたと思っただ。大切なことは意外と目の前にあるのを見つけて出せずにいて、今回の研究を通して自分はその見つけ出すことができた。

### 4. これからの課題

私が開発したかったことはすべてできたが、それを続けてくれる人がいないということがこれからの課題である。藤工房さんに「今年もよろしくお願ひします」と伝えるとき「ぜひ」と答えをいただいた。私は藤工房さんに「ぜひ」と答えをいただいたときとてもうれしかったことを今でもはつきりと覚えていてあのときの高揚感は忘れられないと思っっている。にもかかわらずこの研究が終わろうとしていることが悔しい。最初は先が見えないことで投げやりになっってしまうかもしれないが、最後にはこの研究をしてよかったと思っ思うので、ぜひ続けてやってほしいと思う。

・協力者 社会福祉法人 藤の里 (藤工房)

言語感覚士の探求から「障がい」に対する考え方と知的障がい者の接し方を考える

3年Aコース 横川 聖菜

### 序論

#### 探究動機

私が所属している剣道のスポーツ少年団(スポ少)で指導している子どもの中に自閉症の子がいて、その子が周りについていけず、周りの人たちがあまり手助けをせず取り残されている感じがした。その子もつと剣道を楽しみ、将来自立していただけるためにはどうすればよいか考えたととき、ことばやコミュニケーションの発達が遅れている子どもたちが学校後に行く「ことばの教室」に言語聴覚士(ST)の方がいて指導していると聞くことを知った。名前は知っていたが詳しい仕事内容は知らず興味を持ったのでSTについて探究することにした。また、周りの人がどのように障がい者と接していかればよいかを探究した。

### 本論

#### (1)STの仕事内容

まずSTの仕事内容をSTの方が書いた本や実際にSTの方に話を聞きまとめた。

ST…病気や事故、発達上の問題などで言葉によるコミュニケーションがうまく保てない人たちに専門的サービスを提供する。また、発声発語機能と深い関係にある摂食・嚥下(食べること・噛むこと、飲み込むこと)の問題にも対応する。そして、改善の方法を見出すため検査や評価をしたり、指導・訓練の計画を立て実行する。

ことばやコミュニケーションは人と人との関係で成り立つことなのでSTひとり

奮闘しても限界がある。また、ことばはからだ全体の状態とも深い関係がある。そのため、医療専門職(医師・歯科医師・看護師・理学療法士・作業療法士など)や、保健・福祉専門職(ケースワーカー・介護福祉士・介護支援専門員など)、保育士、幼稚園の先生、学校の先生、心理専門職などと協力し、チーム一員としてことばやコミュニケーション改善を目指す。

#### (2)実践

スポ少で指導をするとき、STの方が書いた本を読んだり、実際どのようにしているのか聞いたりして自分なりの工夫、改善を加えながら試した。これは自閉症の子だけでなく他の子に指導するきにも実践した。

#### (3)結果

うまくいかないときもあつたが、今までより指導を聞いてくれるようになったり、実際に指導した通りに動いたり自分なりに考えて行動している姿がみられた。また、自閉症の子は試合になると竹刀をただ振り回すだけだったので、最近の試合ではある大会で3位という結果を残すこともできた。

これらから、①知識がないなりに、色々試してみると意外と指導が伝わった。伝わるだけでなく自分で考えながらしてくれる姿がみられた。②しかし、周りの人が無関心だったり、避けたり、周りの子と違う目でみたりしていてスポ少全体で協力してその子や周りの子をサポートすることはできなかつた。自分だけが指導するわけではないので自閉症の子が他の人の指導のときに心を閉ざしてしまつたり、怒つたり、泣いたりという場面がみられた。

(4)疑問、自分なりの考え

①から、私のような知識ない高校生がし

てみても思っただよりまよくできた。なのに  
なぜ ST などの専門職が必要とされて  
いるのかという疑問がでた。それは②の周  
りの人が無関心だったり避けていたこと  
が原因だと思った。もちろん専門的な  
知識がないとできないこともあるので ST  
などの職があるということもあるが、もっ  
と周りの人が協力的で全員で助け合うこと  
ができればよりよくなるのではないかと思  
った。

間、なぜ周りの人は無関心だったり避けた  
りするのか

その背景には「障がい者」に対する周りの  
考え方に問題があると考える。まず特別支  
援教育の導入で、幼い頃から教室が違うこ  
とから「自分とは違う人」という認識が植え  
付けられる。また、障がい者は欠点があるか  
ら優しくしようという文化がある、それに  
対して不満がある人もいる。このようなこ  
とから「障がい者」=普通の人ではないとい  
う認識があったり、障がい者とその他で区  
別ができ、周りの人が避けようとしたり手  
を差し伸べる人が減った。そのため ST のよ  
うな専門職が必要になっただけだと思ふ。

今「普通の子」とされている子は先生の力  
をかりながら親や他の周りの人の力を借り  
て成長することができている。しかし障がい  
がある子は先生と親からしか力を借りること  
ができない、そうしなければ伸びる力も周りの  
子より小さくなる。だから周りの人が協力的  
になり手を差し伸べられるようになれば  
もっと力を伸ばせることができるし、区別  
もなくなると思う。

どのようにしたら区別がなくなるか  
まず普通の人、普通じゃない人という考  
え方をやめる。普通とは「他の同種と比べ

変わった点がないこと」という意味。人間に  
他と変わらない人はいない。一人一人個性  
があり、一人一人違う。なので普通の人はい  
ない。

次に障がい=病気、障がい=自分たちと  
違うという認識から、障がいではなく個性  
という考えにかなえる必要がある。また、障が  
い者はなにもできないという考え方をなく  
す必要がある。

脳の中身を電球と電線で考えるとわかり  
やすい。生まれたときはまだ電線がなが  
ってないかかったり、電球が小さかったり、並  
びが不規則だったりする。それが成長する  
につれ大きくなったり、つながつたり、きれ  
いに並べられたりする。ただ、その電球の大  
きさや並び方にはそれぞれ個性があり違  
いがある。成長する中でうまくなると電線がな  
がらなくなったり、ある電球だけが成長しな  
かったり、光が暗かったり、それが「障がい」  
と言われている人たちの状態だ。こう考え  
ると障がいではなく個性ととらえることが  
できるはずだ。

また、障がい者が飛び跳ねたり、動き回っ  
たり、一人でしゃべったりするのにも理由  
があると考える。たくさん理由が考えら  
れるが、一つは不安やストレスから逃れる  
ためだと考えられる。私たちが貧乏ゆすり  
をしたり、運動をしてストレス解消するの  
と同じで、それが少し動作が大きかったり  
人前でしたりしてしまうだけだ。一人でし  
ゃべっているのは、脳だけでは処理しきれ  
ず、声に出して処理しようとしているから  
だ。考え事や記憶をするときに声に出すと  
考えやすくなること、や、幼い子  
が戦隊ごっこやままごとをするときにしや  
べりながらするののも脳で処理しきれないか

ら声に出すので、それと同じだ。

このような例は私が読んだ本に書かれて  
あり、ST の方が実際、保護者や色々な人に  
説明をするときに言っていることで、障が  
いではなく個性だということもニュアンス  
だけでも伝わればよいと思ふ書いた。

間、知的障がいの人はどういふふうな状態  
で生活しているのか、そのことからどう接  
してあげるとよいか

口に手を当てたり離したりしながら話を  
すると「あーわーわー」となり言葉が揺れて  
聞こえる。もしそれが脳の中で勝手に起こ  
っているとしたら、しかもそれがストレス  
により激しくなるとしたら、、、  
常に相手の声が聞きづらく、しかもきち  
んと聞いていないと「なんでちやんと聞か  
ないの」と叱られる。それが毎日続きストレ  
スになりさらに聞きづらくなる。私だっ  
たらその場を逃げ出したくなる。

「あじさいがきれいだったのてつい遊び  
に行ってしまったって遅れちゃったんです。」が早口す  
ぎて「あ時差い眠鬼れいダッタの出つあ  
そ微に入って鳥つ手遅れたんです。」と意味  
不明な文に聞こえる。

状況を見て判断する力がまだ発達してい  
ない状態で「あれをして」「それはこうなる  
からだめ」と言われても主語がわからない  
のでなにをいっているかわからない。

このような状態になっているかもしれな  
い。このことから「ゆっくり話す」「しっか  
り主語を伝える」ことが大切だと思う。また  
私たちが先生や目上の人から物事を言われ  
ると緊張するのと同じで、自分より上だと  
思っている相手には緊張してしまいそれも  
ストレスになるので相手に目線を合わせた  
り、口調に気を付けたりする。

実際に「目線を合わせてはなす」「どうし  
てそうなるか、なぜそのようにしたほうが  
いいのかを詳しく教える」を指導に加える  
だけで相手の子の聞き方や行動が変わった。  
また、スポーツにしている子の親は、自分でできそ  
うなことには手を貸さなかったり、間違っ  
たことや悪いことをしたときにはきちん  
と叱っていた。なので少しずつだが自分で考  
えながら行動しているようにみえた。

## 結論

・ST はロボットでもできるような単純な仕  
事ではなく、奥の深いとても難しい仕事で、  
常に探究しながらよりよいものにしていく  
ような仕事

・周りの人が「障がい者」という言葉に違和  
感を覚えたり、今持っている考え方が変わ  
ったりして、一緒に助け合い暮らしていけ  
るようになればもっと成長するし、差別や  
区別がなくなると思う

私は今後、専門学校を出て ST として働く  
とき、たくさん人のサポートをしていく  
なかで、今「普通の人」と思っている人たち  
にも今回の探究をもっと深め伝えていき、  
「障がい者」と「普通の人」という区別をな  
くし、すべての人が一人の人間として助け  
合いながら生きていけるようにしたい。

## 参考文献

発達障害の子どもを伸ばす魔法の言葉かけ  
shizu 平岩幹男  
発達障害とことばの相談 中川信子  
協力者  
・言語聴覚士の方  
・スポーツ少年団  
(指導者・保護者・子供たち)



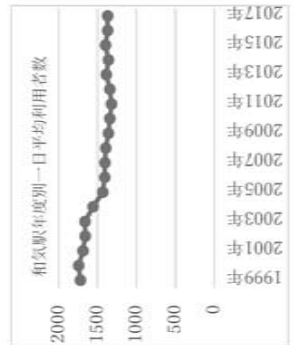
### 歴史を地域活性化に活かすには

#### 3 A 花房友斗



きっかけ

私がなぜこのテーマにしようと思ったかと言うと、和気町の活性化の一環として商店街の活性化を行おうとしたが、活性化の手がかりとして自分の好きな歴史を使っていこうと思ったからだ。きっかけは昨年、商店街会長である杉山幸雄氏から和気町商店街について伺った際に和気町商店街が衰退した歴史を教えてください、かっけは原因とは交通手段の変遷にあり、かつては電車が交通手段のメインであったが今は自動車へと変化していき、電車による恩恵を受けてきた和気町商店街は自動車に対応できなかつたために衰退していくこととなった。そこでこのことから歴史を活かして和気町商店街活性化をしていこうと考えようになった。この問題を解決することの社会的意義は最終的に和気町を活性化することにつながるのだと思う。



### 歴史の種類

まず、どのように歴史学的方法論を使っているのかというと、歴史の正面、負の面とらえを和気町商店街の活性化に活かしていこうと考えている。和気町商店街において正の歴史とは和気町にある文化財や偉人などである。負の歴史は先ほど述べた交通手段の変化である。この二つのことを知り、活かすことが歴史を和気町商店街活性化に使っていく方法だと思う。

#### 解決策

和気町商店街の活性化において重要になってくるのは国道沿いの店舗との兼ね合いである。商店街と国道沿いの店舗が争うことは無意味かつどちらとも和気町には必要なものであり、活性化のためには国道沿いの店舗とどう共存していくかが重要となる。そのためには和気町商店街が国道沿いの店舗との差別化を図ることが必要である。そこで目につけたものが和気駅の存在と商店街の周辺にある正の歴史だ。最初と和気駅の存在だが、先ほど述べたように時代の流れによって車が主流となり、電車の恩恵を受けてきた商店街が衰退したという負の歴史を述べた。しかしある特定の条件となれば電車などの交通機関が車より有利になる条件が出てくる。それが旅行者の移動手段だ。多くの場合、旅行をするとなると車より公共交通機関のほうが楽であるし、経済的だ。そこで電車を利用する旅行者が商店街のターゲットとすることで商店街が和気駅に近いという特性を存分に生かせると考えられる。

歴史を活かす

そして次に商店街の周辺であるが、商店

街だけでは旅行としてきてもらうには力不足すぎる。だが、商店街の周辺には旧大國家住宅や大題目など歴史的な建築物などがある。また、偉人でもある和気清麻呂誕生の地でもあり、それに関連して和気清麻呂を祀る和気神社などがある。そして少し足を伸ばせば鶴岡谷温泉や藤公園、様々な飲食店といったものがあるので和気町商店街の力不足さを補える素晴らしい戦力になると思われる。そこで重要となってくるのは和気駅だ。今までに述べた場所に電車で来た旅行者が行くには必ず和気駅を利用する。和気町商店街は駅から非常に近いことは今までも述べてきたが、和気町に観光に来た旅行者についてと寄ってもらうことが和気町商店街の活性化につながるかと考えられる。だが、和気町商店街について寄ってもらうためには商店街に魅力的な商品があることが重要になる。その魅力的な商品を作るには和気町の特産品を活用していくべきだと思う。和気町にはリンゴをはじめ藤の花などの特産品があるので、これらを活用することができ。実際に昨年、和気町商店街の活性化の一環として一日だけ商店街に店舗を開催したことがある。ここでは和気町の特産品であるリンゴを使用した商品、リンゴリングを販売し大好評だったこともあり和気町にも魅力的な商品を作る土台はあるということはずすでに確認している。つまり私が言いたいことは、和気町に来た旅行者に対してのお土産などの販売の場を設けるということだ。こうすれば負の歴史からの学びを行かせられるし、なおかつ、国道沿いの店舗との明確な差別化も図れるのである。このようなことが歴史を和気町商店街の活

活性化に活かすことだと思う。

#### 結論

結論として、ここまで歴史の使い方のことを述べてきたが、歴史を見るという行為は地域活性化において基本的なことである。ではなぜこのようなことを述べているのかというと歴史を意識してみようということあまりないからである。だいたいの場合、歴史を見ようというのは改善点を見つけることと言いつつ換えている場合が多い。しかし歴史を見るということはその一点だけでなく、改善点の他にも私が最初に述べていた使用できそうな素材を見つけてくること、つまり正の歴史を発見することが重要であると思つたからである。そのため私はここで地域活性化において歴史を使おうと考えたわけである。だが、この論文も完璧なものではなく、私自身の知識だけではとうてい完成できるものではなく、様々な人から知識を得て完成したものだと思う。そのため、私は歴史科の大学に進学するので大学の歴史の学びの中で歴史をどう活かしていくのかというのを学んでいきたいと考えている。



リンゴリング

#### 出典

岡山県統計年報 [www.pref.okayama.jp](http://www.pref.okayama.jp)

グーグルマップ

<https://www.google.co.jp>

お世話になった方

杉山幸一様



### 3 運営指導委員会 会議録

#### <運営指導委員>

氏名	所属・職
足立 大樹	ベネッセコーポレーション 学校カンパニー 西日本教育支援推進部 中四国支社長
石原 達也	岡山NPOセンター 代表理事
岡山 一郎	山陽新聞社編集局 編集委員室長
神崎 浩二	岡山県経済団体連絡協議会 事務局長
中村 賢三	岡山県総合政策局 地方創生推進室長
前田 芳男	岡山大学地域総合研究センター 副センター長（教授）

#### 【第1回運営指導委員会】

##### (1) 日時

令和元年10月4日（金） 14:05～16:15

##### (2) 場所

和気閑谷高等学校 会議室

##### (3) 出席者

###### ・運営指導委員

足立大樹、石原達也、岡山一郎、中村賢三、前田芳男

###### ・和気閑谷高校

香山真一、上野修嗣、福田浩司、鈴木渥子、荒金恭子、安東真美、浮田圭一郎、赤島真一、岸田典子、太田悠未、西山有紀、江森真矢子、梅村竜矢、中村哲也

###### ・岡山県教育庁高校教育課（管理機関）

室貴由輝、神田慶太、小出裕介

##### (4) 内容

【第1部】運営指導委員による「総合的な探究（学習）の時間」の授業参観

【第2部】事業説明（事業概要、和気閑谷高等学校の取組）、質疑応答・指導助言

##### (5) 質疑応答・指導助言（○運営指導委員、●和気閑谷高校、■岡山県教育庁高校教育課）

- 閑谷学を実施する上で、現状一番の課題は何か。
- 狭い地域のなかで生活しているため、深い学びができる場所が少ないことが課題だ。
- 主体的に探究してほしいが、主体性を持たせることが難しい。
- 主体性がある生徒2割弱、関係ないことをする生徒2割、残りは言ったことしかできない生徒。できる生徒を伸ばすことも大切であるが、底上げが重要であると考えている。
- 3年生は自分の進路に絡めて探究を行っており、地域の職業を調べる際に、給与について研究している。私が本校に赴任して同様の研究を行っているのを2度見たが、SGHやSSHの学校に比べ先輩から研究成果を引継ぎ発展させていくことが及んでいないためと考えられるため、解消・改善していきたい。
- 今春の入学者及び14年後の入学者下方推計の資料のなかで、第1学年の生徒数が80人を下回る状況が、令和5年度以降2年続いた場合には、翌年度の生徒募集を停止するとあ

るが、どのように考えているか。

- 岡山市の東部や瀬戸内市から一定数入学しているが、地盤となっている2市1町の生徒数が今後減少することや、今後県教委が学区を外すことが想定される。そうなった場合、都市部に生徒が行く流れとおもしろい教育をしている都市部以外の学校に生徒が来る流れが作られるだろう。おもしろい教育をしないと都市部に生徒が流れる一方だと思う。
- 資料のロジックモデルを見ると、おもしろい教育発信を行うことで和気閑谷高校の入学者が増えるように思えるが、現在の立ち位置はおもしろい教育発信を行う手前であるように感じるため、そこをもっと明確にする必要がある。中学生が自分にとっておもしろい教育をしているから行きたいという判断もあるが、親御さんがその高校に行かせたいという思いも当然あることから、双方に明確に発信する必要がある。7つの力が身に付いているかを評価する指標はあるのか。
- それを今作り始めている。
- デュアルシステムについては、私自身が実業高校出身であり非常に大切なことだと思っている。自分の認識では、アルバイトをするというより、職人の下で授業半分、そこで働くこと半分で技術を身に付けることだと思っている。そうすることで、地元への就職につながってくる。
- 主な部分は、授業の時間中に生徒の居住地に近い地元企業へ定期的にはほぼ1日実習に行くことで、自分自身の職業観を育成することに資するとともに、それが単位認定につながっていくことだと考えている。

その一方で、8時間は学校に拘束されることになるが、平日は残り16時間、加えて土日は家庭にいる。生徒は地域で生活しているため、そのなかの1つとして高校生であればアルバイトがあると考えている。実際には隠れてアルバイトをしている生徒がいる中で、そういった生徒をどう学びに結び付けていくかを考え、コンソーシアムを作って地域でいかに育てるかという環境がある中で、話し合わないのはもったいないと考えている。
- 委員の言うデュアルシステムは、ドイツのデュアルシステムで技を身に付けるということだが、同じ言葉は使っているが意味は違って、そこまでは無理だと考えている。学校の中でできていない「働くことはなにか」「働くための意欲を喚起する」ことを考えるまでだと思っている。
- 付け加えるとすれば、政府が1人1社制の改善を教育再生のテーマにしている。今の高卒の就職は7月に求人票が来て、応募前職場見学を2、3社行い、9月半ばに就職試験という非常に短い期間で行っている。生徒は求人票で給料の高低、休暇の多い少ないで判断をしているため、本当に人生をかけるに足る会社なのかわからないまま就職している。そのため、2年で20%、3年で40%といった離職率が全国にある中で、生徒たちに5日間以上、アルバイトレベルではなく会社に入ってからステップアップを学ばせてくれるところに複数行って、自分の強みを考え、3年生で進路を深めて欲しい思いがある。腹落ちをした進路指導をすることで、和気閑谷高校を卒業した生徒は、就職して真っ先に率先して動いてくれるという構造を作れば、なくてはならない学校になる。今はまだまだそこには至っていない。
- 地元に必要な人材を輩出する高校であることは非常に重要であると思う。ただ働くのではなく、目的意識をもって働く人材が和気閑谷高校から出て活躍しているということになると非常にわかりやすい。プログラム開発を商工会だけでなく意欲的な企業と一緒にすることも大切だ。



- カリキュラムの開発を行っているところである。具体的には、全員は無理だが、特に就職を考えている生徒を中心に5日間のうち4日は学校に登校し、残り1日は会社で学ぶといったカリキュラムを考えている。
- 給料や休暇以外で、会社を選ばれることがお互いにとって大切であると思う。小中高キャリアパスポート事業におけるキャリアとはなにか。
- 学校教育法を2007年に改正し、学力の定義を、基本的な知識、技能、それを働かせて課題解決に必要な思考力、判断力、表現力、主体的に学びに向かう力とした。そのなかで、一番重要なのが主体的に学びに向かう力であり、その意欲をどう評価していくのか。そういった中で、キャリアパスポートの様式を作成して、小学校、中学校でどんなことをして成長したのかをパスポートとしてつなげていく。高校では大学等の高等機関に進学する調査書の様式が変わってくるため、調査書2枚目3枚目に小中高と受け継いできたキャリアを表記し、受け取り手は意欲態度を評価することになる。来年度から小中高でスタートし、高等学校の様式は県教委が作成中である。
- 小中高高校生にとってのキャリアのメインは学びであり、その学びの履歴を引き継ぎ残していくことは重要なこと。
- いわゆる普通の授業でない経験を残していくということか。
- それも含んでいる。授業を探究的に研究する生徒もいる。
- キャリアパスポートについて、来年度の中学3年生が再来年の高校入学時にキャリアパスポートを引き継ぐ方法は決まっているのか。
- 学校単位でまとめて高校に提出することになると聞いている。どこまで重要なものがあがってくるかはまだ見えてこない。
- 入学者に提出を義務付けるということか。
- そうだ。校長会でも色々な意見をいただいたが、教員によってキャリアの捉え方が異なる中で、共通したものを示すことが必要だ。
- そこを和気閑谷高校では、小中高接続部会で基準を作り、子ども達の意欲を高められるものにしたいという構想がある。
- 具体的にどんなものが使われることになるのか。
- まだ示されていない。和気閑谷高校で実際にやっているのは、7月の3者面談の際に、4月からの3か月で自分の成長を親や担任に語るということをやっている。エビデンスや体験に基づき自分の成長をプレゼンしている。こういったことが様式化されるイメージである。
- これを支えるものとして特別入試の口頭試問で、論語を踏まえて自分自身の中学校の生活について語らせるという大学のA0入試に近いことをしている。
- 一部の意見として、キャリアパスポートが高校に提出されるものだと理解した時に、脚色して記載する可能性もある。また、高校に入学した際に、今までの自分をリセットしたい生徒にとっては、キャリアパスポートは足かせになってくる可能性もある。
- 本校の口頭試問は、決してプラスの経験が評価をされて、失敗談をマイナスに評価するということはない。論語を踏まえて自分自身についてどういう風に語れるかが一番のポイントである。
- キャリアパスポートを作成する際に、そういった誤解がないようにしてもらうことが重要だ。今までよりも踏み込んで生徒と向き合う時間をつくるのがキャリアパスポートの目的であるが、それができる学校とそうでない学校の差がでることは予想される。

- キャリアパスポートは全国でやろうとしている。私自身は入社試験までキャリアを積み重ねて、ペーパーテストの得点は高いが自分で考えることが苦手な人とペーパーテストは得意ではないが自分のキャリアを磨き個性や能力を高め実際になにかを成し遂げた人、双方が評価される世の中になるためにキャリアパスポートが利用されるようになればいいと考えている。
- 就職する生徒と進学する生徒の割合はどうか。
- 4年制大学に進学する生徒は30~40人、専門学校・短大に40~50人、就職する生徒が30~40人。ほぼ1:1:1だ。
- コンソーシアムのメンバーは何人か。
- 20人を目標としていたが、18人であった。
- 人選は学校でするのか。選考基準はあるのか。
- 学校で選ぶ。県が県立高校にコミュニティ・スクールを導入する方針を示していたので、コミュニティ・スクールの規則を参考にしてコンソーシアムのメンバーを選んでいる。
- コンソーシアムのメンバーに備前市長や赤磐市長が入っているからといって地域連携できるわけではなく、結局は部会で決定するようになるのか。
- 意思決定のできる首長、教育長、商工会長をメンバーに入れているため、意思決定のスピードは早くなると思っている。なお、和気閑谷の場合、実行性は部会が担っている。
- それは国のモデルに入っているからではなく、学校の判断なのか。
- そうだ。国に採択されたということは1つのチャレンジではあるが、このコンソーシアムの形もありということだ。
- 今までの閑谷學をやってきたなかで、部会のようなものはあったのか。
- 今までは和気町主体で事業を行っていたため、実務者会議をしていたぐらいで部会のようなものはなかった。
- 他の学校も同様なのか。
- コミュニティの定義付けによって変わってくる。和気閑谷の場合、2市1町で1つなので、コンソーシアムを作る際に、行政と経済界をメンバーに入れることが念頭にあった。
- コンソーシアムで実現したいことによってメンバーは変わってくる。
- コンソーシアムの作り方に関して、三重県立飯南高校でも同様の業務をしているが、飯南高校では元々小中高連携をやっていたため、コンソーシアムのメンバーの中に、小中学校の校長先生や地域振興会の人が入って、もう少しこぢんまりとしたメンバー構成だ。
- アルバイト禁止の理由は。
- 大学進学主体の普通科高校は勉強に支障がでるため、厳しく制限している。
- 備前緑陽高校や岡山南のように制限せず、学校でアルバイト指導をしている学校もある。
- それぞれの学校に事情がある。部活の妨げになるという理由で制限している学校もあれば、人間関係形成力を身に付けるという観点から部活よりアルバイトをさせている学校もある。自由にさせたら歯止めがきかない生徒がいるから難しいところだ。
- 地元に就職する生徒が多いのか。
- 就職する生徒の男女比はほぼ半分半分であり、50%弱が和気ハローワーク管内で就職している。それ以外の生徒が和気以外の岡山県内に就職している。県外はほとんどいない。
- 進学した生徒が県内や和気に戻ってきて就職しているのか。
- 進学する生徒も県内大学に進学する生徒が多いため、東京や大阪に就職する子は少ないのではないかと。



- 今年から高校生の地元就職をテーマに市町村と地方創生推進室で検討を行っている。行政としてできることとすれば、産学官連携の分野で事業所での受け入れがあると考えている。生徒を受け入れてくれる事業所は学校で探しているのか。
- 学校としてお願いする部分もあるが、ほとんどが商工会を通じて募集をかけている。ただ、募集をかけたところで、たくさんの反応があるかどうかといえば厳しい面もある。
- その部分で、市町村ができることがないか検討している。商工会との連携の部分については、学校よりも行政の方が企業側との接点もあるため、市町村が手伝える部分があると思う。
- 5日間の実習をすぐに手を挙げてくれるかという点と簡単ではない。3日間のインターンシップは受け入れてくれるが、5日間となると難しい。さらに、単純労働だけでなく、その会社に入ってステップアップできるのかという話もしてほしいとお願いをしていることからハードルが高い。事業所側としてもブラックな面は見せたくはない。高卒の給与体系と大卒の給与体系が慣例のように作られているが、高卒の子が頑張っても成長していきける給与体系を作るべき。新しい企業は高卒・大卒の区分をしていないところが多いが、古くからの企業は慣例となってしまう。
- 実際に生徒の声を聞くと、職業観を学ぶことにもなるアルバイトをしたら怒られる、あるいは地域と触れ合おうとして川で遊んでいたら通報されるのが実状であり、理想と現実とに矛盾が生じている。地域でこの高校を盛り立てていかなければ本当に魅力的なことはできない。小学生や中学生にとっての就労体験は仕事の楽しさを知ることだけで問題ないが、高校生は体験を通して職業観や就業意識をもつこと、大学生は自分の専門と結び付けて社会を考えることが大切である。授業見学を行った際に、生徒に課題設定や仮説を立てさせていたが、働くということに対して仮説を立てさせることは非常に難しいことである。体験の後のリフレクションを行う能力を格段と高められるようになればいいと考えている。
- 就労体験でリフレクションを行うことは理解できるが、息苦しさを感ずる生徒もいるのではないかと思う。
- 学校がアルバイト禁止になったのは学校がいろいろなものを抱え込み過ぎてきた歴史の延長線上にある。地域と協働して学校で取り組むことの価値の1つとして、学校が抱え込み過ぎていたものを地域に返していくということもある。
- 校内でアルバイト論議をやろうとはしている。生徒のなかには高校3年間で起業すると宣言して頑張っている生徒もいる。そういう面白い子たちの出る杭を打たれないような仕組みにしていけないと良い人材が集まらないと思っている。
- 3自治体の商工会議所とつながっていることを生かして、本当にやる気のある子たちが地元企業でインターンシップを行うなど、本気で取り組めるようにすることで連携の意味があるように感じる。ただし、インターンシップは必ずしも全員で行う必要はないと考える。
- 1週間だけとかでなく半年や1年単位でしっかり取り組まなければ効果が出ない。
- 働くという意味では外に出て受け入れてもらうだけでなく、例えば、高校として住宅調査等をした後に数値を解析し単純集計で図表を作り、提案分析することでデータリテラシーも高まり、地域のことがものすごくわかるようになる。既存のやり方を変えていかないと自転車で行ける範囲でしか学ぶことができない。
- 自分がどの段階にいるか理解して体系的な学びをすることが重要。
- 発表会で先輩の姿を見ている。年度のスタート時に昨年度の取組を基に今後の取組をイ

メージはさせているがすごく意識できているかといえは難しいかもしれない。

- 年度当初に3年間の閑谷學の計画を示している。
- 発表することは手段に過ぎない。なんのために発表するかを考えていかないと中身が詰まっていけない。
- グループ討論をしていたが、グループ討論で大事なことは底上げをすること。出来る子がいることによってグループを底上げすることが徹底できていないように感じた。

## 【第2回運営指導委員会】

### (1) 日時

令和2年2月6日(木) 13:00~16:00

### (2) 場所

和気閑谷高等学校 同窓会館2階会議室

### (3) 出席者

#### ・運営指導委員

足立大樹、岡山一郎、神崎浩二、中村賢三、前田芳男

#### ・和気閑谷高校(教員)

香山真一、上野修嗣、神田明夫、鈴木渥子、荒金恭子、安東真美、浮田圭一郎、赤島真一、岸田典子、太田悠未、西山有紀、梅村竜矢

#### ・和気閑谷高校(発表生徒)

花房友斗、横川聖菜、田中桜、堤梨那

#### ・岡山県教育庁高校教育課(管理機関)

室貴由輝、神田慶太、小出裕介

### (4) 内容

【第1部】生徒による閑谷學の発表、委員と生徒との意見交換

【第2部】事業報告(今年度の取組、来年度以降の計画)、質疑応答・指導助言

### (5) 運営指導委員からの感想、指導助言

- ・生徒のデータリテラシーを鍛えるためには、生徒がデータに触れる機会をたくさん設けて教師がアドバイスをしていくしかない。
- ・生徒が誤った方向に研究を進めないためにも、生徒と一緒に教師が悩むことが大切である。
- ・生徒の「人との距離感を大切にしたい」や「ご縁を感じている」と言った言葉から、成長を実感した。
- ・他校の生徒との交流や総合評価も重要だが、一番影響が大きいのは教師からのフィードバックだと思う。
- ・閑谷學が学力に直結することが一番の理想だが、簡単にはいかないだろう。
- ・閑谷學を、教科学習と結びつけて欲しい。
- ・大学進学希望者に対して、大卒者を主な求人対象とする企業へのインターンシップを行うことで、大学卒業後に地元企業へ就職する可能性が広がるだろう。
- ・閑谷學を通して学んだことを、どうやってアウトカムするかが大切。

※ 第2回については、議事録が確定していないため、要旨を掲載。



令和元年度

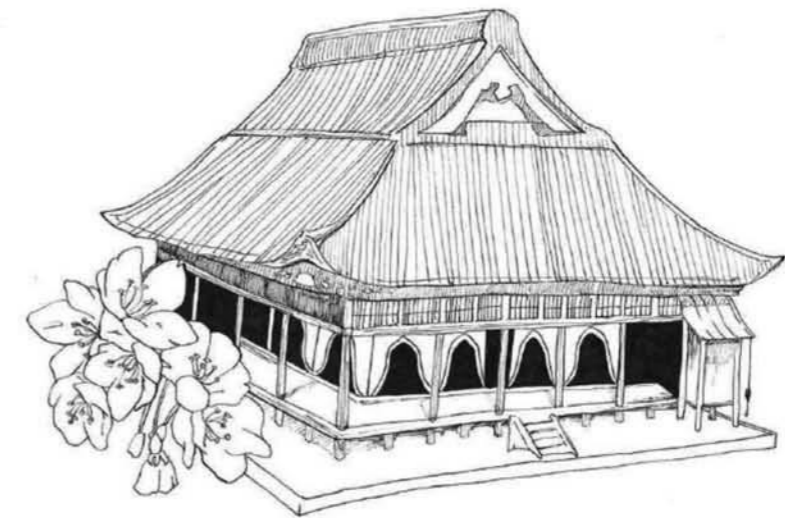
文部科学省事業

地域との協働による高等学校教育改革推進事業(地域魅力化型)

研究開発実施報告書(第1年次)

研究開発構想名

「恕」の精神を持って地域と協働する探究人の包括的育成



イラスト：キャリア探求科2年次 笹埜星空

岡山県立和気閑谷高等学校

本報告書は、文部科学省の委託事業として、岡山県が実施した令和元年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。

事務局：地域協働プロジェクト推進委員会

氏名	職名	氏名	職名
上野修嗣	教頭	赤島真一	教諭（産学官連携部会）
神田明夫	事務長	岸田典子	教諭（高大接続部会）
福田浩司	主幹教諭	太田悠未	教諭
鈴木渥子	指導教諭	西山有紀	総括主幹
荒金恭子	指導教諭(研究主任)	江森真矢子	カリキュラム開発等専門家
安東真美	教諭（企画主任）	梅村竜矢	カリキュラム開発等専門家
浮田圭一郎	教諭(小中高接続部会)	中村哲也	地域協働学習実施支援員

令和元年度

文部科学省事業

地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）

研究開発実施報告書（第1年次）

令和2年3月発行

発行者 岡山県立和気閑谷高等学校  
〒709-0422 岡山県和気郡和気町尺所 15  
TEL 0869(93)1188 FAX 0869(93)1010

印刷所 株式会社三門印刷所  
〒703-8233 岡山県岡山市中区高屋 116-7  
TEL 086(273)0550 FAX 086(273)0587